

真本五人因令

春錦之御極口
酒并昇造中社

諫之卷藏版

(男五人旗)

旗本五人男の内
阿小路源三郎

第一

席

春錦亭柳櫻口演
酒井昇造速記

阿小路源三郎と云ふは旗本の御話で、エ、只今は皇政に相成
て余程振合ひも變り舛たが御案内の通り徳川様御盛んの時分に
天下の諸侯と旗本と云ふので東照宮様の御遺言に小身の旗本は責て
家でも潰さんやう致せと云ふ事が百ヶ條の内よ有ると見えてお旗本
様は殊外御本行跡で御座いました御殿の内へ常賭場の博奕を拵へた
り種々の事を致しましてもお家の潰れる氣遣ひはないと云ふ所へ見
込が付て居り升故公然よらかしました是は本所荒井町に於て千二
百石の食祿で阿小路源三郎さまと云ふお旗本が有まして親御を阿小



路藤三郎さまと申上り申上り此源三郎様を誠に美男で御座いますから若士姿で彼方此方を歩行と阿小路の若殿く〜と云て評判の美男子でげす夫故藝者を買へば藝者が思ひ付き女郎買ふ参れば女郎よ思付かれますから何ふしても辛抱が出来ません或時旗本衆の若殿バウリ五人一座で吉原仲の町の辨港と云ふお茶屋へ着き辨港から江戸町一丁目山田屋と云ふマザリ見店へ送られました處が旗本衆のお遊びで御座り舛からドーしても温和しやかで中々挨拶連中の様な遊びで有ません何處までも品格が宜しいさて此源三郎さんの處へ出ました華魁を繁浦と云ひ初會から大層大事に取られましたら源三郎も繁浦の好い女郎だと思ひました繁浦の方でも嗜たらしい人だと源三郎に思ひ付きましたから初買惚れでげすナ…中には 甲 籠棒奴遊びに往つたつて初會で惚れたかハレたの知れるもんかと被仰い舛がイ、人かワルイ人なのかは初會で解り舛嫌られるのは初會から振られ

乙 彼の女郎メエ巳を初會よ振アがつたから本音を吹くまで通つて通ひぬいて見様杯と被仰るのハ無益で何時まで通ても本音を吹かない其中よ自分の家が身代限りよ成ますから女郎よ本音を吹かせるより米でも買って置た方が宜かろうかと思ひ舛且説温和しやかに遊んで五人一座の旗本の若殿が翌朝歸た後で繁浦の番頭新造が 番新 華魁 昨夜のお客さんハ本當よ温和しんさいます子 繁 ホンよ然うさいますヨ 番新 其中にも華魁が出さした源はんとか云ふ方は本當よ好い男ぢや有ませんか俳優よも彼様な好い男ハント有まへんヨ 繁 然うさいますねエ…と云たが繁浦も腹の中での 繁 何うかして後を來て呉れ、ば宜と思て居り舛た源三郎も大切に取られましたので其他の四人は往ませんが自分壹人で折節繁浦の處へ遊に往き舛た繁浦も源三郎に惚れて居り舛から成丈散財をさせません藝者を呼んでも祝儀は出させないで自分がだす様な譯だあら源三郎にハ余程惚

れて居ります。却説源三郎ハ繁浦の許へ一年ばかり通て居ます。内に當
 今と違ひ古昔の事ですから互に起証の爲取替を致したか年が明た曉
 き繁浦を引取て千二百石の奥様にする譯にも往んから屋敷へ呼ん
 で茶の間へ置き偏房同様朝暮顔を見やう見られよふと水も漏さぬ幣
 と成りまゝ然處不圖源三郎が舐の道を切た様に來なくなりました。
 サア繁浦ハ惚て居ります。氣を揉み出し日に手紙の三本も五本も
 出へ舛たが相手が天下の諸侯旗本故え手紙も先方へ届きませんから
 遂に返事も参りません。柳港と云茶屋は余程手紙が滞滞て居り舛處が
 吉原は現今と違て昔の女郎ハ籠の鳥で出られませぬ。紙拾りて
 お百度を搦へ廊下を往たり來たりして神信を始め豊川稻荷或は水天
 宮黒助稻荷……是は廊の内よ有るゝ参詣りハ出來ます。外の神は
 然うハ行きませぬ。茶斷ち、搦斷ち、鯨立ちを致して源三郎の來るやう
 よと信心を致ました。スルと丁度四十日目の晝間源三郎が茶屋諸共

参りました。番新チヨイと華魁エお悦びなさい。いまし何かお呉んなは
 い。母がお入來なすつた。お芽出度う……と云ハれ繁浦も惚れた男が
 参つたので御座います。から飛立様に思ひ舛た。さて源三郎ハ馴染だ。お
 ら直よ座敷へ通りました。繁チヨイと御前貴郎ハ何う爲さうつた。ノ
 四十日計り御來臨が無いので毎日の様よ書簡を差上りました。が一返も
 お返事が無かつた。何う爲さしつた。源扱て繁浦存外不沙汰を致
 した。が實ハ旗本仲間で行跡を始め祿に知りも致さん。博奕に係
 り一ト函程取れた。が部屋住の身の上で千兩も取られては大變だ。夫の
 みあらず父上や母上の着類迄盗み出して……尤も親の物を子が遣ふ
 に不思議ハ無いが濟んハ親類より父上へ五拾兩の抵當よ大小を預
 けたのが有る。其大小を予が土藏より盗み出して他家へ五拾兩の質よ
 置て其金も亦博奕で取られて仕舞。然る處今日親類より五十兩に利
 分附て其大小の質受けに参つた。サア藏に有るまい如何にして其金を

算段致そうと心得たが今の身では五拾兩はさて置き五兩の才覚も出来んのじや幸ひ父上の御登城なされ御留守だから宜いが只今もも歸館よ成れば土藏の中を探すだらうて大小が無いければ源三郎中譯が立んぬら割腹致して言譯を致す所存で有る然し其方どの起證の爲取替を致し年が明た曉よは朝暮顔を見やう見られ様と云ふ契約を結んで有から其方よ黙ッて此世を去ッての餘り不實意と心得今日暇乞ひよ參ッたが其起證は反古と思ふて呉れア、源三郎も、モ、此山田屋の二階へ昇る事も出来ぬら厭でも有うが香花の一本も手向け念佛の一遍も稱へて呉れヨと繁浦の膝へ手を突いてポロリと涙を翻され死程惚れた男が四十日目よ來て腹を切て死ぬと云ふのだから此の驚きまうたらうの繁左様さいますか貴郎が死なッともやるなら妾も一所に冥途とやらへ連れて行ッて呉んなまし 源「ナニ繁浦此源三郎と一處に死で呉れる所存かア、一辱けない然れば一所に死で呉れエ 繁

だが子御前も金が五拾兩あれば死な、いでも宜さいますせう 源「されば五拾兩の金が有バ死なんでも宜しいが其五十兩の才覚が出来んのじや 繁「然らば御前斯う爲さいます、本町よ鬮屋善兵衛と云ふ藥種屋が有るので其家の支配人を安兵衛と云て妾の其人と起證の爲取替が爲て有んです 源「ナニ……繁浦起證の一本より書んど心得て居ッたが其方は引札同様彼處此所へ起証を出して有るのか 繁「イ、ニ然うじやア御座いません貴郎が御登樓爲はッて散財をさせるの御氣の毒さいますので安兵衛ら御金を曳出よハ夫婦の約束を爲て年が限たら女房よ成る亭主にしやうと厭嫌だけれども反古同様ナ起證を爲取替ました譯で其安兵衛の處へ無心を云て遣ればキツと御金が出来るんぞい舛々ら何卒御前其金を御用よ立てお呉んなさいます 源「ア、一辱け無い武士に有まじき事だが併し切迫詰ッてあるから繁浦何分頼み舛 繁「エ、宜うさいますとこれから直に書面を認て安兵

衛の處へ送りました。スルと安兵衛の惚れた女郎の處から書面が来たのでニコニコいながら開封致して見ますと書面じやア解らんから直に來て呉れろと云ふ文意でげす只今なら腕車だが昔の事故三枚の駕籠で飛ばして参り茶屋は七軒の半四郎近江で御座いますから直よ山田屋へ送られて参り繁浦の座敷へ通りませと。安兵衛イヤ繁浦手紙で解らんから早う來て呉れと云ふので取る物も取敢へず急いで來たがなんぢや。繁「おまはんマア其處よ立て居ては往けないから座てお呉んなない。安「何んぢやい。繁「マ鼻の尖頭の汗を拭てお呉んなない。びっしより汗をかいて。サ。安「駕籠で來たよ因て汗を拭間も無いが何んぢや。繁「イヤ外の事ぢやア有ませんが子今朝阿父さんの處から手紙が來た。安「和女に阿父さんなら予れの爲めにも義理有る阿父さんだ何様な手紙が來た。繁「何よ子義理の悪い借財か五十兩有て其借財を返さないと阿父さんが牢へ這らなければならぬと云ふか

ら年を老て居るし萬一牢で若しもの事でもあれば取返しが出來ないので親不孝に成ませから御願で御座います。が五拾兩のお金子を才覺へてお呉んなない……イヤく出來なければ詮方がないから妾の年期を増えても調達して遣る積りです。安「イヤ夫りやア不可ん僅か五十兩や七十兩の金で二年三年と年期が増て不可ん如何にかして予が才覺して和女の阿父さんの處へ送る依て心配せんでも宜い併し今日と云譯よ往かんから二三日待て呉れ。繁「ダッて其様な裕長のお金ぢやア有まへんヨ遅くも今夜の引けまでに遣してお呉んなない。安「引け迄に出來んワ。繁「然う……夫れぢやア最う要の有まへん妾は口惜から自害まで死で和郎はんを取附くヨ。安「イヤそりや往かんく……今夜大引け八ツ時分迄は何うか才覺えて予が持て來る因てに其様よ心配するナ。繁「お金が出来たら金子斗り遣してお呉んは和郎はん來なくつても宜いから願だから早く遣してお呉ん

なほい 安「ウーン……チヨツと一盃飲て歸いろうか 繁「不可へんヨ早
くもないと手遅れに成るから水でも飲んでお歸んあいのヨ是よ於て
安兵衛の取り急ぎ金策よ立ち歸りました源三郎の次の間に之を聞いて
居りました 繁「サア御前彼の馬鹿が屹度お金を遣すンぞいますから
落着てお酒をお飲んなはいア、一 源「ア、一辱けない其方の予の爲
にハ命の親だ……」と是から甘くお酒を飲んで居る中よ日が暮れ赤い
蒲團の上へ枕を並べ繁浦と源三郎と御愉快みが有ましたらう、サア四
ッ半引けと成りましたが金子の沙汰が御座いませぬ 源「イヤ繁浦當
事と何んぞやらハ向から外れる道理で何よ一を、五十兩と云ふ金子
彼れも奉公人の身上だ、設令支配人よもせヨ然う急よ金子は調達まい、
嗟吁詮方がない到底其方と一緒よ成れる因縁が無いのだから屋敷へ
販り武士らしく立派よ切腹致す積りぢやから最早源三郎は歸る……
と起上るを遮て、袖を押へ 繁「マアお待なさい御前……和主えんが

お歸よなつた後へお金子が來ると何ンよも成ませんあら、モ一少し待
て、お呉んなはいお願だから……」と引止められ八ッ半七ッよ成りま
した沙汰が有ませぬ 源「今に來んから六ケ一いので有ろう 繁「イ
エ最う些と……」と云内にレンヂが明るくなり戶外での雪駄や下駄の
音が致しますから客人の歸へる時刻に成て居ます 源「イヤ繁浦到底
も往ん 繁「そんなら妾を先へ殺してお呉んあえい、お願ひしますか
ら 源「夫れぢやア繁浦和女を殺して拙者も一緒よ死のう、と是から屏
風を廻して遊女の事で御座い升から豫て情死や何かの事も聞て居り
ますから繁浦ハシゴキで足をちあんど結び惚れた男に殺されるんだ
から昇怯れる事の御座いませぬ念佛を稱へながら合掌を組んで居り
ます 源「サ繁浦未來は必ず夫婦で有るゾヨ……」と念佛諸共髮剃を繁
浦の咽喉へ當て、プツッリ斬た 繁「ウーン……」と誠に善事を死にやう
で御座い升源三郎も繁浦の死骸の上へ乗り重なり念佛諸共咽喉へ髪

剃を當がいましたたが 源「イヤ待てヨ是ハ往かん情死だから孰れ檢視
 が下るだらう繁浦ハ高が知れた遊女賣女で有るから髪剃で死でも笑
 れる氣遣ひのないが此源三郎は苟且よも天下の旗本御先祖は東照宮
 様のお旗よ付き参遠兩國已來お供をして戴いた千二百石の食祿を子
 孫に及び此源三郎の髪剃よて死んだら先祖の耻辱よ相成り且には源
 三郎外聞父上よも相濟まん逆も死ぬなら大小を供へ置て立派よ切腹
 致さんければ武士の耻で有る……コレ繁浦源三郎は逃げるのでいな
 いヲ料港に大小が預けて有るから是を持って来て割腹致す所存だから
 少の閑暇を呉れヨ……」と立上たが遊女屋ハ華魁が送らなければ出
 られませんゆえ途方に暮れ 源「如何して歸たら宜ろう……」と料港へ
 往く事が出来ません處へ五人一座のお客に女郎衆が五人附いて茶屋
 諸共十一人で座敷の前を通るから 源「占めたり……」と直ぐおき手拭
 で面体を匿し十一人の中へ潜り込み誤魔化して匿れ先へ土間へ下り

て最早履物を履く間も御座いません跳足でガラリと大戸を開けて仲
 町へ参りますと料港ハ未だ寝て居り舛くらドンク 表の戸を叩き
 源「藤助やく、トンク……お菊や、チヨツと起て呉んなく 若「へい
 く……サ皆起なな客様がお立ち歸りだヨ。へいお早ようがすと開き
 をガラリと開けて 若「是ハ殿様デ……大層お早よう御座いまするア
 源「イヤ早く屋敷へ歸らんければ往んら大小を出して呉れ 番「ア
 宜しいぢやござんせんか一服召上て入らッまやいまー 源「イヤ然うし
 ては居られん手後れよなるくら早くくと腰立てられ毛氈へ包んで
 有ますお腰を持って参り夫へ出す源三郎ハ取急ぎ大小を掴み差し致
 ままて再び山田屋へ取返し繁浦の傍で腹を切ろうと云う料簡と見
 へます却説間違の出来る時と云ふもの詮方があゝ源三郎が歸た後
 へ安兵衛が遣て参りました處が茶屋ハ未だ寝て居りまする直ぐに
 山田屋へ來ると若衆が案内をして繁浦の座敷へ参り 若「魁華エ安兵

衛さんが立歸りで御座いますと云ひ捨て若い衆は下へ下りて仕舞ふ。安「サア繁浦来たヨ」く定めて和女がボヤイて居たろうと思ふてた。サアお起んの繁浦お起んかど云ひながら屏風を取て見ますと血汐に染んで俯伏して居ますのら。安「ヤア……コレ繁浦和女の短氣な事を爲すなア今夜が明た斗りだ予は昨夜些つとも寝やせんぜ茲に持て来た五十兩の金も和女が死んで見れば石瓦ぢやア」短氣な事を爲すオツたあ……オ、く是に在る髮剃で自害を爲たか和女ばかり殺しハせん予も死んで未來ハ必ず夫婦で有るゾヨと死骸の上へ重なつて安兵衛が咽喉元へ髮剃を當がイ、ブツ——り切たが是は死ぬ氣でない不意に遣りましたから切り所が悪かつたと見えて。安「ウン……」と唸て居る聲を聞付け子供が起て来て。子供「イヤ——大變ございますヨ情死が有ますから誰れか早く来てお呉んばはいヨ——」と子供が騒いだので朋輩女郎から遣手衆が起て来て見ますと是で御座いますか

ら上を下へと立ち騒で居ます處へ源三郎が大小を掴み差しよいて這て来ましたのを見て若者が。若「殿様お待なさいまし何時の間に……」源「イヤ、く繁浦の傍へ参らなければならんから其處を退て呉れ。若「イヤ大變でグス、只今二階で情死が御座いました何が何うも華魁方てエものは解からんもんでげすナ繁浦さんの尊公に首ツ切りと心得て居ました處が藥種屋の支配人の醜男子の安兵衛と今情死を爲だてのホヤ、くで御座います尊公が御覽なさいますと御立腹で有ませうから二階へお昇んなさらんやうに……」源「ナニ安兵衛と申者が参たか若「へい左様で御座います。源「夫れ大變だ……實に此方が繁浦を殺して立歸たのヂヤ其安兵衛と云ふ男を情死の飛入だ早く申せを情死の天狗連見たやうなものだ安兵衛が繁浦を殺したのでない實に此方が繁浦を殺し情死を爲やうと思たか武士が髮剃で死で生涯の笑えれ草よ成るよ因て……見やる通り此方が榊港へ大小を取りよ参

跡へ安兵衛が参た事と見え何しろ繁浦よ濟まんから其處を退け
 繁浦の傍で切腹いたさんければ相成ん……番「マアくお待なさい、
 夫れじやア大變で情死二人で澤山の處へ尊公がいらッーやれば情死
 が一人増ます、マア内所へ入らッして下さいまし」と是から源三郎を内
 所へ連れて参り升と山田屋の主人も起て居て 亭主「借て殿様マ何う
 云ふ譯で御座います 源「イヤ實ハ博奕に負て伯父より金の抵當に預
 りの大小を倉庫から盗み出して置た處か今日質受けに来られ此方が
 兩親へ云譯がないよ因て切腹致す覺悟で昨日繁浦の許へ暇乞ひよ参
 た處安兵衛と云客人が来るから五十兩の無心を云て死ぬのを止まつ
 て呉れと心切に云ふて呉れるに依て實は五十兩の金子の來るのを待
 て居たが夜明け方に成ても金子が参らん是非よ及ばんと存じ覺悟を
 決たが遊女屋の二階ハ刃物が禁て居るので何日か繁浦が剃刀を二挺
 合せて持て來て到底も金が出来なければ妾を先へ殺して呉れと云



扶桑園
香浦堂

から此方が繁浦を殺して置き見やる通り今柳港へ大小を取りに参た
 後へ安兵衛が参た事と相見え嘔吐かん疑ふなら安兵衛の懐中を
 改めて見やれ五十兩の金子が有ろうから是れよ於て主人は若昔と共
 よ二階へ昇り死よ係て居る安兵衛の懐中を探すと五十兩の胴巻が有
 ましたから持て参り 亭主偕て殿様尊公は五十兩をければ此世よ生
 存れん御身の上花なら答の御年ばい殊に千二百石の御食祿を投出す
 は誠よ情けない事で御座いますから五十兩の金子がお入要なれを此
 金をお使用なさい私の方で安兵衛と繁浦と情死の体で届ます検視
 が下りれば孰れ情死と相成まより其代り二人の葬式の立派よして
 やつて下さいまし 源「ア、——辱けない……死のうと思つた源三郎が
 助かり死ぬまいと思つた安兵衛と云ふ男が此世を去たハ誠よ氣の毒千
 萬な譯で有る併し此金が無ければ生存て居られんから借て参る其變
 り情死の入費ハ予が半分出して遣るから後ハ立派に兩人の施餓鬼を

して遣るやうよと云ひ置き源三郎の五十兩の金を以て歸つたから是
れ助かりました所が安兵衛と繁浦は情死の体よて検視が下りました
から検視済みの上二人の尸骸ハ山田屋の菩提所へ葬りましたが安兵
衛は此世を去ても惚れた女と一緒に死んだのだから成佛るが成佛な
いのハ繁浦で惚れた男が残て居て嫌な安兵衛と一緒に冥途の旅立ハ
余りドツと致しますまいとて繁浦の怨念が源三郎へ取付き女太夫お
まよの爲めよ千二百石を棒よ振ると云ふ是れが阿小路源三郎のお話
の序文で御座い姪チヨイと一煙……

第二席

春錦亭 柳櫻口演
酒 井昇造 速記

へイエ、千二百石の座光寺の身上を女太夫およと云ふ者の爲よ滅亡
す事よ相成ますが御先祖ハ鎗の先へ血を塗て家康公より戴いた千二
百石其祿を子孫に及び鎗は鎗だが僅々二寸五分か三寸で根本お毛の
生て居る先の豎よ分裂た鎗で千二百石を滅亡と云ふは誠にハヤ情な
い事で併し古昔から女で家國を亡た者ハ幾許も有ますから川柳の
悪口よ 川柳 飯盛も陣屋位は傾ふけると云ふ……成程城を傾むけ國
を傾けるは傾城で夫ゆへ飯盛も陣屋位を傾けるといふ狂句が有ます
落語家杯ハ陣屋も無いから羽織を傾ける事が折節有升般の紉玉は姐
己の爲めよ國を滅ぼし日本よも大名旗本にて女の爲めで家よ感亂の
始まるのが幾許も有升加賀の騒動は御家内の通り御妾の阿貞と云ふ
者と大槻内藏之助と姦通に及びて遂に宰相義則卿は信州筑摩川よ於

て鳥居又助の爲に御落命にならせられました是れ女ゆへに百二十万石の大守の命を又助の爲に縮られ其他も三方御逝去で御座い升皆是が女から割て出るので又黒田騷動も阿秀の方と倉橋重太夫とが姦通よ及んで御家の騒ぎを起し伊達騷動も綱宗卿が高尾の許へ御通ひなさいましたのが根本濫陽でシテ視ると皆女ゆへに騒ぎが起ります大名旗本町人或は天子將軍と雖も女の爲に其國を乱すのが昔から幾許も有升座光寺源三郎さん討りで無い却説源三郎が五十金で命が助かりましたから大槻兩人の施餓鬼は致して遣りましたるう檢視の入費も源三郎が速に山田屋へ出して遣りました其後父親さんの御逝去も相成まして源三郎殿が千二百石の家名を相續し乃で奥様は森對馬守様(一万石)から座光寺の御臺所をしまして御縁組と相成ました此へ源三郎さんへ男が好いから森さまの姫君が御所望で御嫁よ参りました処が何う云ふ事の御婚禮がありました後奥様が何うも身体が

健康無い色青醒まして煩ッてをりお在なされるから御傍よ侍て居る者や御實家では多方惚切て居る姫君ゆへに内々チト過度るんだらうと申して居りましたが然うでは無い何よか奥様の眼に怪しい物が見へると視へます大方繁浦の怨念が源三郎に附繞つて居るので有ませう斯く爲て姫君の五ヶ月ばかり座光寺の屋敷にお在なさいましたが遂々身体が健康ないと云ふので御實家エ歸り是れッ切り御縁が絶まいてマッ御縁縁よ相成ました其故源三郎さんへ 源三郎さんへ生涯女房を持たんと云ふので無妻でげすが何処ともなく源三郎さんの身体が健康無い御役も勤まりませんから是に於て座光寺は小普請入りよ相成ました處が此頃は大きに身体も癒りましたが女郎買ひをなさるうじやアあし藝者を御買なさると云ふ事もなさらん繁浦よ義理が有ますから婦女の方へ歸めちまいました只折節観音の奥山へ参りまして揚弓が大好だから揚弓を引てお在なさいましたけれども然うく揚弓場

へ計りも参られませんから御殿の内へ揚弓場を拵らへ御家來兩三人を相手よ爲て揚弓を引ッ張て在ッやるから揚弓の方でハマア評判でげす(大中)と謂れて居りました恰ど三月中旬の事で御座いなした今日も淺草觀音の奥山へ遊びよ御出なさろうと思ひ帶刀よて僕を一人召連れ本所荒井町を御出なさり途中よて 源「大小チャア目立と云ふので大を他家へ預け小劔ばかり一本落とし差しよして上よは御召縮緬の子持大名の総糸の掛りました小袖を召下よは羽二重の長襦袢を着し御召龍紋の長やかなる黒の無紋の羽織を着てお頭へ覗きよ手拭を乗ッけまして疊附の駒下駄を履き吾妻橋の上へ來てロヨいと石の上へ乗りガツクリ下駄を覆り返り升たが粹がる人の鼻緒の甚く延たのは不恰好で足の親指で蝮蛇を拵へチンくモガくを爲て歩行のは餘り格好が宜く御座いませんから嫌ひ升不圖橋の杖を見ると直し屋(例のデイ)が居り升たから傍へ寄り近き 源「コレ駒下駄の鼻緒

を緊て呉れ……直しや「へい、殿さん土是をお履なさいまし……」と代の駒下駄を出して鹿の切角よ油壺を出して鼻緒をつめ 直しや

「エ、殿さんエ片ッ方が緩やかでは矢張りお履き難う御座エませうから其方も御直し申やせう…… 源「イヤ此方は恰ど宜しい……ふれで宜しい何程チャ 直しや「へい……エ、殿さま御言葉を掛けチャ相濟

みませんが誠に暫くへい……何時ながら御繁盛で御目出度存じます……」と雪駄直しよ口を利れたから源三郎も愕然りして 源「ソ其方ハ

ナ何んチャ 直しや「へい御免下せエまじ……」と笠を取り頭よ乗ッけて居る吹流しよして居ました頬冠りの手拭を取り升て辭儀を爲ながら

ら 直しや「エ、私アお見忘れて御座エませうか神田白壁町の左官長

右衛門の粹長五郎で御座エ升……子供の折御屋敷へ御出入を勧めた

時分若殿さまとお庭で角力取りを致した事が御座いましたッけが長五郎で御座い升ヨ 源「オ……長五郎か如何して其方ハ斯様な身の

上よ相成つた 長へい……誠よ面目次第も御座いません言詞を申上
 ては濟みませんが毎度尊公が此處を御通行の御後影を見ては嗟呀
 座光寺の若殿様へ立派にお成んなをかつた夫れよ引きかへ私え斯様
 ナ、なさけねエ身の上にて爲つたかと實ア腹の内へ泪を流して居ました
 處へ今日お鼻緒を直しましたのでツイ吾を忘れ言詞を申上げて誠に
 相濟みません……エ、小哥ア別よ蕩樂も御座いませんが博奕よ酒に
 女郎買ひツイ彼處此處へ博奕を打に參る中よ新堀端の小屋へ遊びに
 參たよスツカリ負けて素ツ裸体に成ちまい其晩を家へも歸れません
 から小屋へ泊り小屋者の娘の夜具の裾から潜り込んだが惡縁で今チ
 ヤ身分違ひ小屋者雪駄直しと相成まして、へ、面目次第も御座いませ
 ん……源ア、長五郎其方の情けない身の上よ成たナ今日は宜し
 いが向後予が此所を通行しても必ずとも予に物を云ふては成らんソ
 旗本仲間よでも見られると予が愧入るから……必ず口を利く事は相

成んぞ 長へい誠よ恐れ入りました……モ、必ずお言詞ア掛ません
 へい御免下さいませし……源三郎さんえ鼻紙袋から金子を取り出し若
 干有ましたか紙へ捲つて其處へ投り出し 源「長五郎此金を遣えす
 り 長へい難有う存じ升…… 女太夫「長さん阿父さんが大變よ怒て
 るから些と云譯よお出ヨ 年増「長さん戯談ぢやアないよ親方が怒て
 るヨ本當に余まり失敬ぢやアないか 長「是はマお免なせエませし……
 今日え流してげすか何うかお歸りなすつたら宜しく被仰て下さい
 まし何れ二三日の内に參堂ますが…… 女太夫「屹度お出ヨと女太夫
 ハ淺草の方から本所の方へ渡り往く是れハ流しに出た歸途か一人の
 女は年頃十八九の余程美麗婦人で御座います是ハ本所二ツ目の小屋
 頭喜六の娘よ本所路孝と云はれた別嬪でげす木綿打扮だがキリ、
 まやんとして小倉鼻緒のすがつた下駄を穿き管の妻折笠を冠て居り
 笠の紐ハ緋鹿の子洗髮の薄化粧で余程美しい娘故へ誰も振り反て見な

い者はなにと云ふ例のふよで其傍よ随て居ります婆さんは年頃四十七八彼是れ五十よ見へるテッブリ肥つた婆さん三味線を二挺駒ア脱まして手拭で頬冠をさせ小脇に抱ひ込み是れも同じく木綿着物よ小倉の帯をメめ妻折笠を冠て居ります 夫よ「ぢやア長さん屹度お出よ 長へい……阿父さんよ宜しく……親方に宜しうおふよさん御免なさいまし……殿様エ、くお履物が宜さう御座いますヨ……エ御前……尊公何よを見て被入います……オ、くお手拭が飛びました、お羽織が脱げますヨ殿様エ、く……ボンと肩を叩かれ 源、ハツ、ア、長五郎驚愕り致したワイ…… 長、尊公何よを見て被入います 源、ハツ、ウ……只今此處へ参つた彼は何者ヂヤ 長へい彼の女太夫でけす何んどマア殿様エ女太夫よも美しい女が有ますチア、云ふ別嬪が居るから悪くすると平民から小屋へ陥るのは茲でがす彼ハ本所呂幸と謂はれる本所二ツ目の喜六てエ者の娘でげすが美しい女でがすねへ 源、

ム、ウ……長五郎く嗚呼美しいものだ夜目遠目笠の内と申すが成程然うだ此(ヨメ)トホメと云ふえ年廻りだと云ふお然うでえ有ません夜見ると醜い女でも好く見へまた遠くで見ると矢張り好く見へます夫から笠を冠ると一ト際容貌を好く見せる者で御座います夜分杯お若衆が吉原へ遊びよ被入いまして蟋蟀見たよふよ格子へ捕住て見て居ります 甲「彼の主坐から二枚目の娼妓は眼がパツチリとして瓜核顔で眉毛を見ると地藏眉毛で頗る代物だから彼の煙草盆を引いて呉れと二階へ昇り臺の物を傍附け引付けが濟んでから能くく見ると大違ひ眼がパツチリと居たと思たのは年を老て眼が凹で居るので印幡沾の鰻見たよふよ……天水桶へ鮑貝を投り込んだやうに奥の方でピカーリくと光て、覗かなければ眼の珠へお目通りが出来ないのでがそウチリ眉毛と思たのが引眉毛で一緒よ寐て八ツ時分に眼を覺して見ると右の眉毛が逃亡して仕舞ふなノかんのてエのが幾許も

有ます又笠を冠ると容貌を好く見せますが、あまよの笠を冠ても冠ら
 んでも美しい女でげすから源三郎はあ羽織の脱るのも知らないで之を
 見送て居りまゝた斯う申しますすが其實陶宮から出ました全くは年
 割でがす 源長五郎く 長へい 源少一其方頼みたい事が有か
 らチヨツと彼の川岸ッ縁に積んで有る薪の間迄で来て呉れまいか
 長へいく 何よ御用でがす 源彼へ参て其方に話をするから巳の跡
 へ従て来て呉れ 長へいく 畏まりました……源三郎の榎木と榎木
 との間へ這入りましとから長五郎の道具箱へ敷て居るゴザをかけ源
 三郎の跡から附いて参り手拭斗り冠て榎木の間へ這り 長へい 殿様
 何よ御用でがす 源只今の女太夫の何んとか申たな 長へい、あまよ
 と申ます 源ム、ウ何んと長五郎お願だが彼の女太夫よ只だ一度で
 宜しいが酒の相手をして貰て呉れる譯に往くまいか 長へい何んで
 げすとエ…… 源イヤサ彼の女太夫に暫時の間酒の相手をして貰て

呉れる譯よは往くまいか 長へい、ハ、ハ、ハ、戯談被仰てハ不可せん彼の身
 分違ひで御座いますヨ幾ら美しい女だと云ても身分違ひ尊公は天下の
 諸侯お旗本様何様な女だつて自由になるお身の上ぢや御座いません
 か彼は高の知れた汚れの身体の者を尊公のお傍へ女太夫を 源コレ
 く 静かよして呉れ……只だ一度で宜しいが酒の相手をして貰たい
 が如何で有ろうナ 長へい夫れエマ如何云ふ譯で幾ら女が美からつたつ
 て餘まり馬鹿氣るぢやとわせんか提灯よ釣鐘八幡太郎よ番太郎義經
 よ向隅程違ひます幾ら奇麗だつて虎子は飯櫃にやア成やせんが、何
 う云ふ思召しなんで 源イヤ然んあら話すが實は此方が先年吉原江
 戸町一丁目山田屋の抱へ遊女繁浦と云ふ者よ馴馴染み不圖な事よ
 り情死の約束が手違よなり藥種屋の支配人安兵衛と云ふ者が予よ代
 て此世を去て居るから定めて繁浦も本意なく思て居るだらう處へ今
 日彼の女太夫よと申す者を見ると過ぎ去た繁浦よ瓜二ッ割らで其

儘ア能く似て居る繁浦が蘇生て参たかと實はおまよの顔を見て繁浦
 ではないかと思ひ悚と致した位で夫れゆへ手拭の飛ぶのも知らずよ
 見て居たが余り懐しう思ふから彼のおまよを繁浦と心得て酒の酌を
 して貰ひたいが何んとか長五郎出来まいか若し其方が出来ないと云
 へば詮方がない他に雪駄直しも居やうら他のテイく頼んでなり
 ともおまよに酒の相手をして貰ふ積りだが如何チヤ 長然んならば
 宜ふがす尊公が其位よ被仰るならば小哥がお取持を仕ましようけれ
 ども殿様エ酒のお相手ばかりで有ませうナ 源勿論の事だ 長必と
 も一緒に寐ては大變ですヨ 源何に馬鹿を長五郎必とも左様な事な
 ない 長ぢやア何んですがイおまよさんをお屋敷へ…… 源馬鹿を
 申すナ屋敷へ連れて來られてハ大變だから斯うして呉れ小梅よ梅屋
 と云ふ待合茶屋が有る其處へ連れて來てハ呉れまいか明日の未刻時
 分コなア…… 長エー宜うがす小哥ハ顔を知られて居りますから彼

の娘ばかり遣りやう 源然んならば此方が晝過ぎから梅屋よ侍
 て居るから何分頼みますヨ 長エー宜がすが殿様エ實ア小哥が彼
 の娘の親父から五兩借りが有るんで五兩一分の金ですが小屋者の
 癖よ金を持てますから彼方此方へ金エ貸して居るんで處が小哥ア借
 りたッ限り利も入れないから彼の娘よ此事を然う云へば屹度悦びま
 せうが親父さんが滅方界固ふ御座エますんで小哥ハ着物を質に打込
 んで負ちまいましたか殿様エ何卒二兩斗り拜借致し度う御座います
 エへ、お安い御用でげすが願へますまいか 源フ、何んだお安
 い御用は此方で申すのチヤ 長エ、お金を出させたり云へせた
 りーちやお氣毒でへ、と何うか二兩斗り…… 源ウン……サ是れ
 を……と鼻紙裏から金を出して遣りまうた長五郎は此金を握り腹ン
 中で 長占たり黄金の綱へ捕たナ……と思ひ源三郎さんよ別れ直々
 よ仕事を仕舞て歸る座光寺の殿様は俄音さまの奥山へ遊びよ参りな

した長五郎の新堀端の我小屋へ歸り早速髪を結まして賀受を致し此
 晩本所二ツ目小屋頭喜六の處へ参りましたが云はずと知れた二ツ目
 の橋の下に家が有ます尤も家と云た所がウーと云た限りチも何よも
 ホンの小屋懸け同様で有ます是は精く申上げるよば及ばん大抵お客
 様方がお存じで有ましよう今長五郎が門の胸障子へ手を掛けたがガ
 ラリとは往かない土臺が腐朽て居りますからゴソ／＼と明いた手拭
 を脱て 長「イヤ親方誠御不沙汰ア致しやした…… 喜「オ、長五郎の
 何うしたんだ風の悪い奴ぢやアねへか五兩の金エ助けて呉れと云て
 借たつて往た限り利も持て來ねへとは余り無情ぢやねへか 長「ハイ
 親方誠に相濟ませんどうか勘忍して呉んなさい…… 子お虎さん何
 卒宜しく親方へお詫をして呉んなさいまし 女「長さん戯談ぢやな
 いヨ親方は怒てお在なさるから偶に顔をお出しなさいヨ 長「ハイ
 …… エ今日は利子だけ持て参りましたが百疋何卒…… 喜「ナニ利子

さへ入れて置けば嚴酷しく云のねへ…… が今月分を這入らんのだナ
 長「ヘイ殘金の又二三日内よ持て参ります…… エ、おまよさんエ
 喜「ウン流しよ出て歸て來たが寒エ胃たつて奥に寐て居るヨ 長「然う、
 でおすか御免下さいまし…… チョツとお目に掛らなければ成ません
 から 喜「彼の奥の六疊の座敷よ居るよ 長「ハイ…… 御免下さいまし
 と唐紙を開けて中へ這入り 長「イヤ今晚の…… お前さん寒エお胃な
 すつたそりで 喜「オヤ長さんお出なさいまし…… 何んだか知らな
 いが何うも頭痛がして…… 長「其奴ア不可せんねエ…… 是はお土産
 で 喜「オヤ是は本かいエお前さんの本がお嗜だから持て來やした
 が是ハ釋迦八相記だ繪が余程宜うがす近年の草双紙まで畫工が骨を
 折ります子是は新板に出たんで 喜「然うかい夫れは有難ふ…… 長
 さん何時もお貰ひ申てばかり…… 長「何う致しましてエ、おこよさん
 先刻小哥の見世で履物を直させて武士さんが居ましたろう 喜「オヤ

本統に好い男だねへ乳母と話をしながら歸たが役者にも彼の位の男は余りないが何處の御家來さまだエ 長「イエエ家來ぢやア有ません彼ア本所荒井町乃座光寺源三郎と云て當時殿様でげすが好い男ぢやアごわせんか 長「本當にお美しいねへ 長「彼乃殿様が前に足駄ア穿て首ッ切りなんだ小哥よドーカ取持て呉れまいかと被仰るの御存じの通り小哥ア舊左官で彼のお屋敷へ出入を務めた者でがすが其千二百石の座光寺の殿様がお前さんに死ぬ程惚れたんで明日小梅乃梅屋に待て居るから連れて来て呉れと被仰るのだが何んとお前さん行く氣はあいか如何でげす 長「夫れだつてお前余まり恐れ入るぢやアないか勿体ない多寡の知れた小屋者の妾が何程なんだつてお旗本の殿さまのお側へ……若しそれが知れでもすると大變だヨ 長「なアに知れる氣遣ひはねへ小哥が梅屋の門口までお前さんを連れて往くから殿様に會て盃の献酬ばかりだてエが殊に寄たらば多寡の

知れた小屋者の娘が千二百石の殿様の(エテ)物を頂戴せるかも知れねへお是れ名聞だ小屋者の娘が天下の諸侯お旗本と一ト所寐をすれば此位な名聞は有ませんがおこよさん如何だエと云入れておまよえ恥かゝそろうよ小聲で 長「ちやア長さん妾の行かうか 長「エ……行てお呉んなさるかイ 長「ア…… 長「其奴ア有難エ 長「此金は少ないがお前鼻紙でも買て呉れ…… 長「是りやア有難う御座います濟ません子 長「こよ「イエエ少しばかりだヨ 長「夫れぢやア如何してお呉んなさいます 長「こよ「明日晝時分よ家を出て中宿で着物を着換て行くから親父さんよ知れない様に 長「エ、親方は八釜しいから知れぢやア大變で、ぢやア然うしてお呉んなさいましと茲で長五郎は我小屋へ立ち歸りました

本話第一席中阿小路とせいの座光寺の誤りよ付茲は正す



第三席

春錦亭柳櫻口演
酒井昇造速記

扱て其翌日阿古代は本所の小屋を出る時は木綿衣服で出まして中宿へ参り南部縮緬の小袖と着替へ本國の帯をゆめ頭は立派に差飾り些と熱いが頭巾を被つて面体を隠して梅家へ参りまゐたが是が座光寺の家没落致す發端で御座い升却説斯う成つて見ますると彼の道ばかりは追々深くなる者で繁々梅屋へ参りまして座光寺の殿様と逢ひ曳を致しました中よ壁よ耳有る世の譬で何時か親父喜六に知れました或時に親父が喜して阿古代本所荒井町の座光寺様と云ふ御旗本の若殿様と小梅の何屋とか云ふ待合で逢引き爲ると云ふ事だが左様だろちな古「ハイ……殿父の御耳に這入りましてハ濟ない譯で御座い升が實は長五郎がコレ」で往きました喜「イヤ夫れハ大變だ……若し此事が表向よなると千二百石のお家に関係るのみならず其方も

予も獄門の兇状だよ因てお願ひだから止して呉れ。古夫だつて斯う云ふ譯に成つて見れば今更止す譯よは往かないヨ。喜然んならば斯う爲て呉れ待合で逢引を爲るの誠ふ危い劍の刃を渡る様だから一層此小屋へ若殿様をお連れ申して呉れ。古其だつて嚴父さん斯様を汚れた穢ない處へ。喜イヤ穢なくつても穢なく無くつても世間へ知れない方が上分別だ奥の疊替を爲て周圍へ七五三を張て夜具蒲團を新しく拵へ煙草を召上るなら煙草盆で無く燧火で煙草を召上れば別火だ又此小屋で煮炊を爲た物を上さへ爲なければ宜いか。殿さまが御來臨なさる其晩は晝間の内から料理屋へ詔らへ酒下物を別火よ爲て差上れば殿様の身体に汚れハ係らないから左様爲て知れぬ様よ……古代長五郎へ話を爲て殿様よ然う申す様よ爲な左様成れば予も安心するから。古成程然うだ子火打箱で煙草を上げ夜具蒲團を新しく拵へ小屋で煮た物を上ない様よ爲て料理屋から取つて物を上

げりやア別火に成るから汚れは是ッばかりも掛らんから成程然うだ子と是を長五郎よ云ふ長五郎ハ直ぐに座光寺の殿様へ話し升と源成程尤もだ梅屋で逢引きを爲てハ危いから然うして呉れ左様なうば……と本所二ツ目喜六の處へ座光寺の殿様が遊びよ参りまゐたが物は道理の附様で煙草ハ火打箱の火で喫み料理屋から酒肴を取れを別火で汚れハ無い様だが肝心な古代の薬研が別火に成ませんや是を別火に爲るよは金杓子で搥つて取つて他のと入替へなければ別火よハ成ませんが無理な道理を附るもんで遂々此盃梅に致して居ました。が此頃は宜い金の蔓よ捕つた氣で長五郎は橋臺へ職業よも出ません長古代さんチヨツと三兩……殿様チヨツと五兩と互ひ違ひに無心を云ふから長五郎ハ福々でげす處が餘り果報まけたと見えて寒を冒て十日ばかり煩らひました却説風邪も宜い盃梅に重くならんで病氣は平癒しましたから起て見升と博奕に負た揚句よ煩らつたから三文も

ない 長「ア、詮方が無い今夜二ツ目の喜六ン處へ行ッてお古代よ
 衝突ッて金の五兩も借りて衣類を受けやうと月代を生じ汚穢い橋袴
 を着て夜分喜六の門口をガラリと開けて 長「親方此間ハ 喜「イヤ、
 長五郎如何した久しく見エなかつたあア 長「エ、風邪を引きやして
 恰ど十四五日臥やした全体エ傷寒よでも成るだらうと思ひやしたか
 宜い搥梅よ風邪が抜けたんで……時よお古代さんは何處へ 喜「古代
 は遺書を殘して五日跡よ家出を爲て仕舞ツた 長「エ……何處イ行な
 すツた 喜「マア聞いて呉れ長五郎悪い事ハ出来ねエ殿様も自分の身分
 よ關係ると段々怖く成ツたかお古代に悪い夢を見たと思ひ諦らめて
 呉れ今日後來ないからと被仰て殿様が足を抜いて來なさん處が汝
 も知ッて居る通りお古代が恍惚極ッて居るから阿父さん殿様に逃ふ
 事が出来ないなら妾ア此世よは居ませんと遺書を殘して五日跡に何
 處かへ逃落だ多分身でも投て死んだらうヨ、ア、一僅々一人の娘を玉

なしに爲て長五郎己ア落胆り爲て居るのだ 長「ヘエ……うりやアマ
 ア何しろ御心配でげす子 婆「アノ長さんお古代さんの行方が知れあ
 いので親方の涕泣てをかり居なさるヨ 長「左様でげすか誠に御氣の
 毒千万な今と成チャア小哥をお恨みでげせう 喜「ナニ汝を怨恨んで
 も詮方が無いが矢ッ張り爵が當ツたんだなア 長「チャア何れ小哥が
 おまよさんの行方を探しませう 喜「イヤ、詮方が無い已も斷念め
 ちまつた 長「じやアマア小哥も能く信心を爲て彼處此處を探して見
 ませう左様あら…… 婆「長さんまた時々來て親方へ力を附て上てお
 呉れヨ 長「ヘイ、く……じやア御免下さい……左様なら……」と戸外
 へ出て 長「五兩の無心を云をうと思つたがスツカリ目算が外れて仕
 舞ツた併し逃走と云ふのは此事ア偽だな己の無心が餘まり烈しいか
 ら己を省みうてエのだな……夫れ共お古代の亞魔が屋敷へ入たか知
 ら……正可女太夫を入る譯よは往くめへ……何か是よ細工があり

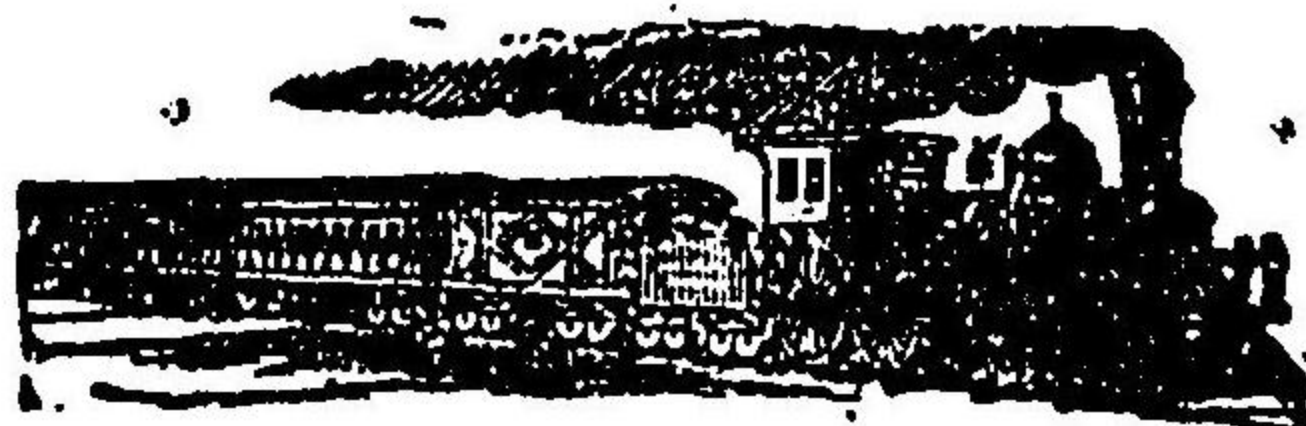
うだ……解らねへの殿さままだ己が否だと云ふのを無理遣り頼んで今更俺を省くと云ふなア餘まり解らねへ……宜しく殿様よ遇つて一ツ談判を爲なくつちやアならん」と詮方が無いから此晩は新堀端の我小屋へ歸つて寝ました翌日から相變らず道具箱を引ッ擔いで本所荒井町の座光寺の屋敷の周圍ばかり流して居りました。長「デイーく、雪踏直一をデイーく」と云ふは相場が定つて居り升けれ共本來手入れくと云ふのだそうて京都邊で之をシデンシと云ひ舛。女「チヨイとデイーく屋さん。長「へい……」女「此雪踏の裏金を入替て夫れから此駒下駄の鼻緒をつめてお呉れ。長「へい……」と長五郎は笠を冠たま、尻しきと取出し雪踏の裏金を入替へ駒下駄の鼻緒をつめて。長「エ、出来上りました。女「御苦勞く、何程エ。長「エ、兩方で八十八文何うか……」其中で十六文の煙草を五匁戴き度う御座エやすから十六文お扣除なすつて。客「チャア負て上るヨ……」サ何か煙草入で

も有かい。長「へい此吹煙草入ン中へお入れなさつて下さいまし……」へい有難う……エ、生憎火道具を忘れて参りましたが火が御座い升なら恐れ入升が何卒親方お火を一ツ……。親「其火鉢の中よ團炭が埋て有から。長「へい御免なせエまし……」と長五郎ハ煙管を持まして今戸焼の火鉢の藁灰の中へ煙管の雁首を突込み藁灰を掻退け火を附け。長「有難う御座エやした……何うも日が永く成りやまた今朝の事ハ暮方にやア忘れる様で……此近邊は内儀さん御旗本様方が餘計に居らつしやい升子。女「ア、御大名の下屋敷や御中屋敷其他は大抵御旗本ばかりだよ。長「エ、慥かお向ふの御屋敷ハ千二百石の座光寺様と云つて大殿様は御逝去に成つて只今では若殿様の御世ですねエ。女「ア、左様だヨ能くマアお前旗本の事を知つてお在だねへデイーくの癖よ。長「ナニ小哥だつて以前からデイーくじやアおわせん以前は職人で御座エ升愚父が向ふの御屋敷へ出入を勤めて居りましたから

本所よ洗しよ来る度毎よ此御屋敷を見ちやア腹へ涙を漲して居り升
 髓か奥様の御座いませんだったねエ 女「ア一久しい以前に入らしッ
 たがそれの御離縁に成ッて此間又御出あさったそふだヨ 長「へエー
 ……何んでげすかい奥様が御出で爲すつたとい 女「何にもお前其様
 なに驚く事ア無いヤ十日ばかり以前よ御婚禮が有つたヨ 長「はてあ
 ……奥様は未だ御若いかい 女「妾の未だ見りやア爲ないが十八九よ
 お成んなさる餘ッ程美イ御容貌だうふだヨ 長「へエー成程…此奴
 ア屋敷い入れたナ…年頃ハ十八九で身丈がスラリと爲て色の白い
 目のパツチリと爲た小鼻がつぼんで口元尋常齒が冬瓜の種子の行列
 して居る様で髪の毛の黒い美イ奥様でーやう 時「お前マーデーく
 の癖よ能く其様事を知ッて居るねエ 長「へ…美イ女…たど云
 ふから身丈がスラリと爲て小鼻がつぼんで口元尋常と張ッて置けば
 大抵相場ア狂いませんら 女「マーア〜其様ものだねエと話しを爲

て居升る内よ座光寺の表門がギーッとして開くと中から紹張りの桐棒の
 駕籠の一挺出ました左右よ女が三人付て若黨が一人跡から釣壺へユ
 タンを掛たのを仲間二人で擔ぎます門がピツタリ閉ると駕籠の中と
 外で女中へ話を爲て居り升のハ半町程隔ッて居り升から何んの話
 だか聞えません長五郎は氣の所爲か何うも駕籠の中は女太夫阿古代
 らしいと思ひましたから取急いで道具箱を仕舞ッて肩に引ッ擔ぎ直
 に此駕籠の跡を見エ隠れに尾て參ると云ふチヨト一服致しませう…





第 四 席

春 錦 亭 柳 櫻 口 演
酒 井 昇 造 速 記

へい、エー、明和二年五月宵節句に本所荒井町座光寺の長門が開きま
 て、襷子張り切棒の駕籠が一挺出ました。左右に下婢が三人、若徒一人、釣
 臺へ油紙を掛ましたのを仲間兩人で擔ぎ門を出る。半町計り此方の煙
 草屋の前に居た雪踏直一の長五郎が之を見て、長万「とーたら彼の
 駕籠の中に居るのは阿古代でえないか」と見て居ました。が離れて居る
 から聲は聞へませんが、駕籠の中と外の女中と何よか話を致して居ま
 すのを長五郎は早速道具箱を引ッ仕舞て駕籠の跡を尾て參る。何と高
 いも低いも色情の道戀に上下の隔はない。伶俐な人も痴漢に成ると往
 昔から申して有ます。が何程何でも千二百石天下の御旗本座光寺の屋
 敷へ女大夫が奥様に成ろうとは思はれませぬ。乃て大音寺前の梶井左
 膳と云ふ易者の所へ今日お里歸りでお古代が參ります。ので長五郎が

其跡を購て参りました是は前日申上ませんが何う云ふ譯で女大夫が
 座光寺の屋敷へ這入り奥様も成たかと云ふも實ハ三月中旬に先日
 申上ましたが長五郎へ依頼で阿古代を取持て貰ひ最初は宜しかつた
 が座光寺の殿様へ十兩無心を言ひ或は古代も三兩無心が數回で如
 何にも長五郎を善くない奴でげすから喜六が古代も向ひ 喜如何
 も長公が中へ這入て居ては誠な危い御方は素より吹けば飛ぶやうな
 身分違ひ小屋者だから宜いが万一として千二百石のお家に疵が附く
 やうな事が有ては成らん長五郎が中へ這入て居ては誠な危い善ない
 奴だから如何かして彼奴を省くやうな仕度いと云ふからさよも打節
 殿様の耳へ入れて置きましたか如何しても長五郎を省く場合がない
 實は源三郎殿も思案も餘りましたから大音寺前も占考を上手も致す
 者が有ると云ふので或日の事龍泉寺町梶井左膳の玄關へ参りまして
 源頼むく 下女「ドレ……入ッしやいませし 源「エー先生は在宿

かへ 女「ハイ先生は今日お宅で御座います 源「何卒一笠占て貰ひ度
 て罷出た 女「ハイ……先生彼のお客様が 左「ア然うか此方へお
 上げ申せ 女「ハイ……サア此方へお上りなさいませ……源三郎を笠
 を脱り傍へ置て上りましたが年の頃廿五六で形装も立派男も好い
 左「サア尊公此方へ入ッしやいませし、サ此方へ……源「御免……と源三
 郎は大を脱り右の方へ置き 源「さて先生一笠占考てお貰ひ申度い
 左「へエく……サアお茶を名上りませ……エー何んで御座います
 源「イヤ外でえないが身の上の事を一笠占考て貰ひ度い 左「へい
 ……殿様へ尊公何うか婦人の事を見よ被入いませたろりナ失礼な
 ら尊公と女難が見へますと星を指されて座光寺の殿源三郎も戦慄と
 したけれ共是ハ易者で御座いますから人相の解らんと云ふ事はな
 又醫者逆も人相を知らん醫者なれば往けません下手なんでけす柳櫻
 共でも是れで人相を三ツ位を知て居ますと云ふと中にハ 甲「ナニ落

語家の癖よ人相なんぞを……と被仰います。が餘計に知りませぬ三ッの確實よ知て居ます。嬉しいのと口惜しいのと悲しいと此三ッは確實に知て居ます。尤此三ッを知らなきやア馬鹿だが水難の相、女難の相、或の様な老人の醜男子でも女難が有ます中よ。乙「笠棒奴其様よ年を老やアがつて剩りよ其様な顔ほど女難杯が有る者かと被仰います。が佐野治郎左工門と云ふ人は八ッ橋大夫よ振られ化物と異名を附けられ、トウ、吉原で百人の人を斬て落し自分は公儀の御厄介よ成たけれ共是れ即ち女難で又姐奴よ惚られて繁く通ひ家を闇夜にするのも女難又振られて口惜んぼうよ先方の女に疵を付て自分の身を仕舞ふ者も女難でげす座光寺源三郎殿尊公の女難が見へますと云はれたんで實よ戰慄とりて。源「トウ……イヤ先生實に其事でお前を依頼で占て貰ふと思て今日罷越したか何うか先生見てお呉れ。左「へいへ

イ之の別よ見るも引くも御座いませぬ……が如何云ふ所を占て貰い度いと被仰るので。源「さればエ、予が世話をして置く婦人を町宅をさせたら宜ろうか如何したら宜ろうか實に予も思案に餘つて當家へ参たんだが先生如何致したら宜ろう……左「へい……失礼ながら尊公の御直参とお見受け申升がエ、孰れの殿様で在つしやいます。源「イヤ高が知れたる小身の旗本で本所荒井町よ居る座光寺源三郎と申す者で。左「へい……座光寺さままでエ、兼て御尊名を承り居ましたか。私ハ本所清水町のへ……御存じの通りお家の潰れまじしたか。井飼五郎大夫様の用人を勤めて居ましたので……源「ア、左様か。左「エ、夫故伺ひました。が尊公さまが未だ御幼年の時分エ、御目通りを致ました事が兩三度御座いました。が其様よ婦女の爲めに御心配遊ますとは當時エ、殿様の無妻で在つしやい升か。源「されば先般奥を迎へたが仔細在て離縁よ及んだ限り源三郎未だ無妻で居る。左「左様

で御座いますか……エ、其御心配筋の婦人と申すの殿様ナ何で御座
 います 源「イヤ誠よハヤ如何も耻入る……源三郎面目次第もない實
 は身分が違て居るので夫を苦よ病み當家へ占て貰ひよ參つたので
 左「へ、エ……身分が違て居るとハ……矢張り芳原の華魁か夫でなけ
 れバ見番の藝者或ハ他人の女房か何んで御座います 源「イヤく何
 よも華魁とか藝者とかやらを屋敷へ入れるのはコレ別に不思議をな
 い仲間中の旗本よも女郎を奥に爲たのも有れば藝者を奥に直しもの
 も有るから夫はナニ別に不都合もないが餘程身分が違て居るので……
 ……話すのも耻入る位いで有る 左「へ……餘程身分が違て居ると被
 仰いますか御存じの通り侍天下の總追捕使武將の始まりの源頼朝公
 の穢多の團左工門の娘を犯して夫ゆへに富士の根方で三万六千坪の
 地所を貰ひ五十稼業の長と成り團左工門尉源頼兼と名乗り徳川よな
 り別名矢野内記と申すすが其穢多の娘を天下ア掌握をした頼朝ハ抱

寝を致して胤を残したと云ふ是は諸君も知た話で尊公のハ何者で御
 座いますか高いも低いも色の道と申すから遠慮なく仰有て御覽じ
 ろ、エ何んで御座います 源「イヤ然んなら先生必ずとも他言をして下
 さいますな此源三郎が誠に耻入るから……實え本所二目小屋頭喜六
 の娘女太夫古代と云ふ者と心易く成たが中間に雪駄直しの長五郎と
 申者が居て此者が如何よも宜しくない奴で誠に危い万一と致して千
 二百石の家名に拘わるやうな事が有てはならん何卒其者を省き度い
 と心得居るが如何しても其者を遠ざける譯に往かんのので先生如何致
 したら宜しかろう夫ゆへよと云ふ女が小屋に居る譯に往かんから
 町宅をさして呉れと申すが町宅をさせて宜いやら不可いやら夫れが
 解らんのので如何致して宜ろうか先生夫を一筵占て貰ひ度いので 左
 へ「く……是ハ殿様見るも引くも御座いません若し其女太夫よ町
 宅をさせれば巨大な石を脊負ひまゑて懸崖縁へ赴くか劔の刃ア渡る

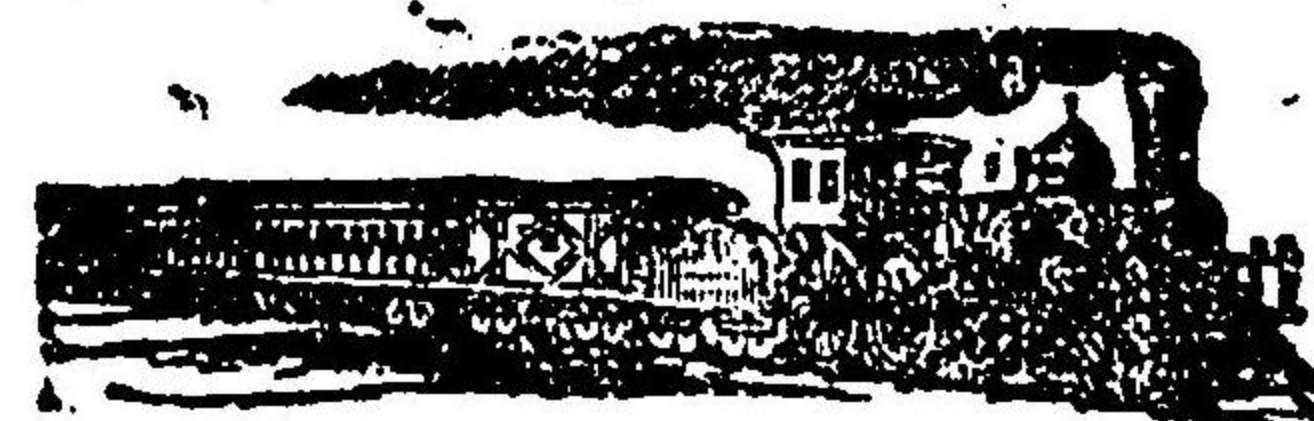
より危い事で寧ろ是はお屋敷へ入れてお仕舞ひ成さい、お屋敷へ入れて仕舞ひさへすれば安泰で御座います 源「夫の先生出来ない高が知れたコレ身分違ひの女太夫を屋敷へ……」 左「イヤ其處で御座います奥様よしてお仕舞ひ成さい親父も娘が出世とするのだから否とは云升まい必定女も尊公のお傍へ離れますまいから尊公が心易くする旗本が御座いませう内外を打明ると云ふ兄弟同様のあ方が御座いませう 源「夫は幾許も有ます其内よも予が兄同様よ致して居るの青山よ加藤與左工門と云ふ五百石の小身では有るが其男は拙者と兄弟同様に致して居ます 左「其處でけす然んなら早速其與左工門と云ふ人に殿様話を成さい龍泉寺町の梶井左膳の娘古代と申す者と心易く成たから何卒幸ひ奥もないから屋敷へ入れたいから御自分が左膳の所へ掛合て娘を貰てお前の娘よして予の處へ嫁付けては呉れまいかと斯う被仰いませし身分違ひ小屋者でハ不可ん私と土御門の流れを汲み賈

トを渡世よ致す長袖の身の上ですから私の娘にして旗本へ養女よ献でも宜しい譯ゆへ私が今夜なり明日なり本所二ツ目の喜六へ掛合ひましておまよを私が貰ひ切ります先方も我娘が千二百石のお旗本の奥様よ成るのですくら一も二もなく私へ呉れるに違ひ御座いません貰ひ切て二日でも三日でも置ましてから加藤與左工門さんが私の所へお入來なさいますれば私ハ速におまよを加藤さまへ進げます夫から與左工門さんの娘よして公儀へ進達に及び表向でお屋敷へ入れて奥様よ遊ばせば誰にも知れる氣遣ひを御座いません斯うなされは石橋を敲いて渡るより尙だ大丈夫で町宅をさせるのは誠よ危い事で御座います、殿様如何で 源「成程……先生恐れ入りました……夫れでは何うか其盃梅よして貰ひ度い併し必ずとも他人に發言を……」 左「イエ、く決して發言杯は致しませんから……」 源「其代りお前よは亦夫丈けの骨打を出します 左「イエ何やお屋敷へ出入が出来れば有難

い事で私は以前ハ四百石取の旗本の用人を勤めて居升たが私も生涯
 買卜者で終りたくも御座いません千二百石の用人とハ参りますまい
 が尊公のお屋敷へ出入を勤めて居ますれば誠よ心持が宜しいから何
 卒然うなさいませし 源「イヤ何分共先生お頼み申ます……」と源三郎殿
 は梶井左膳よ依頼ました大方廿五兩と三十兩ハ謝儀として左膳よ遣
 りましたらう是より左膳ハ本所二目の喜六方へ参り此由を咄します
 ると我娘が奥様に成れると云ふ此様な出世はないうら喜六は速よこ
 よを左膳の所へ養女よ遣りましたら左膳の家よ二三日置く内よ源
 三郎殿が加藤與左工門殿よ咄をするると與左工門殿ハ全く梶井左膳の
 娘と心得て我屋敷へ引取り是から公儀へ進達に及んで若年寄より之
 を表向にして婚礼を致し加藤與左工門の娘でこよを座光寺の屋敷へ
 入れたから誰にも知れません長五郎も存じません梶井左膳は旨い事
 を仕ました氣の毒なのは加藤與左工門殿で而後に五百石玉なしと斷

絶れます其理由を識らずして家を滅ぼしましたハ誠よ氣の毒千万な
 緯で御座い升夫もハ五月宵節句に實家歸りの支度に及んで大音寺前
 梶井左膳方へ参る跡を長五郎が見へ隠れよ尾て往ますと淺草吾妻橋
 を渡り觀音さまの前から門跡前山内上野東叡山へ突當り車坂から金
 杉へ掛り龍泉寺村へ曲り長五郎ハ半町計り跡から尾て参ると丁度四
 ツ角の駕籠屋の處から鷲神社の方へ曲て往くから 長「何處へ往きや
 アがるか……」と長五郎は四ツ角の處よイテ見て居ますと天社神道と
 云ふ占者の肴板が下つて居る所へズーイと駕籠が卸りましたから
 長「何者が出るか……」と見て居ますと引戸を開ける中から出ました
 のが女太夫おふよ…… 長「見ろ汝如何するか……」と是より長五郎が
 梶井左膳の所へ掛合ひに参ると云ふナヨイと一服……





第五席

春 錦 亭 柳 櫻 口 演
酒 井 昇 造 連 記

エ、長五郎はイんで見て居まはと駕籠から出ましたおこよの打粉五月宵節句の事もへ細の重ねを着まして下にと緋縮緬の長編絆帯は京錦頭飾を見ますと古流行た大きな丸鬘で(髪に三歳に變る髪貌と云て男の鬘も女の鬘を申に及むす三年目にとガラリくと變ります先男の鬘杯も柳櫻の若い時分清元銀杏と云つて鬘之後の方へヒョイと出た妙ナ鬘が流行りました終には小さく成つてハケの長いのが流行るやうになりました女中の鬘も藏前勝山と云つて丸鬘の小さいのが流行りましたズイと上の方へ持て来て頼の上へ丸鬘が乗かつて居りまよから悪く云ふと三平二満が年頭にでも来たか五文供を乗つけたやうなのが流行りました島田も又左の通り根を詰めて上の方へ持て往たのが流行りました中古丸鬘も島田もボンノッドへ下るやうよあり現

今の所では束髪と云つて何だか知りませんが鬘へ綱が掛つて居ります此頃は又鬘の大きいのが流行るやうで(おこよの鬘と餘程大きうなす乃で手柄の緋鹿の子を巻き根掛は白い丈長で小人島の天秤棒見たりやうな角立と云ふ箕櫛も角胸と申す儀式は時に差す櫛で後に玉入の鬘甲足の簪を挿其脇へ上が赤銅で下が銀で成つて居る赤銅へ銀象眼を以て唐艸の附て居る頭搔に不自由だと云ふので此銀簪を差し眉毛が有つて齒を染めるを半元服と申す(近年は眉毛を拂つても白齒で居ものが有ます時々の流行せんで眉毛が有つて鐵漿を附けたのも亦好く見へます)絹の白足袋を穿て女中の肩へ捕住て駕籠おら出る其後から女中が(シウロウ)を持って梶井左膳の窓へ這入たのを確と長五郎が見認ましたけれども然うでもないヒョツとして間違た日にやア大變だと思ひましたから梶井左膳方の裏手へ廻りましたが目今とは違ひ龍泉寺町は裏の方は、と笹敷に成て居ります 長 大方此處邊が賣

卜者の庭だろうと思ふ所へ道具箱を置いて其上へ乗りズイと笹敷を押し分け覗ひて見ますと恰と梶井左膳の庭で障子が脱て有ましたから能く見へます正面の毛氈の上へ座り傍に脇息を置いて安坐して居りはすのと女丈夫のれこど當年十九で御座います誠によい婦人でげす敷居の外に袴羽織で坐つて居のが親父の喜六其方へ引下つて三人坐つて居のは屋敷から供をして参つた女中で中間や若黨と何處へ往きましたる如何様橋興と違の方へでも片附けて有ましたるう所へ一人出て参りましたのが袴羽織で白髪交りの撫付け頭身丈はスヲリと致ました眼の細い鼻の高い何處ともなく大胆不敵そらな男が其所へ出ました 長 ア、ア、此奴が梶井左膳と云ふ易者だかと思つて居ますと 左 コレハ、奥さまには能うこそ今日とお入來で御座います……エ、只今に御前も此處へお入來で御座いませう暫く是れおて御体息遊をしますやうに……お女中ね前がたど大鷲神社へでも往つてナトお遊

びあすつてた出ささい……コソよお吸物を早く出せヨお茶を持て来
 あいか「長五郎は確に是を見届け道具箱を引ッ擔いで表へ廻り其儘占
 考の看板の出で居る門内エ這入り玄關の傍へ道具箱を置まして其上
 へ冠つて来た破れた笠を載セテツカ絞りの真黒に汚れた手拭を吹流
 一よ冠つて居年頃三十五六ある色の淺黒い月代の延びた襦みの有
 る長五郎が玄關の正面エ突立ち 長「エ、お頼メ申やす……オイ誰も
 居ねへるエお頼メ申やす 女中「ドレ……オヤオア何んだねエ或の宅
 ではアイノを呼びやアしないヨ何んだツて茲へ這入て来て玄關エ
 胡坐を掻いて居るのだヨ 長「オ、オ、女中先生然う云つて呉んな占
 て貰エたへ占考が有から来たんだ然う云つて呉んな先生に雪踏直し
 の長五郎が占考を占て貰エに來たんだツて然う云つて呉れ 女中「何ん
 だねエれ前 長「喧まさいやイ思お面アしてキヨロヨヨ見るねエ先生
 に然う云へ女中は呆氣に取られ物をも云わぬ奥へ参り女中「アノ御内

室へ雪踏直しがた玄關へ参りまして胡坐を掻て居ます長五郎てエも
 んだ先生に占て貰ひたい占考が有て來たツて彼處に胡坐を掻てます
 が狂發人で御座いますねニ 女房「静おれしヨ先生に申上げるから……
 先エ…… 左「コソ何故か吸物を早く持て参らんだ 女房「エ、只今
 玄關エ雪踏直しが参りまして長五郎てエもんだが是非先生お占て貰
 はさければならさいと申して胡坐を掻て居ます死よが取次お出まし
 たら譴責とやらを食して狂發人のやうで御座いますと 左「ム、ウ……
 雪踏直しのナ…… 女房「長五郎と云ふもんだとコソ申たそうで 左
 ヨシノ、今占て遣るから待て居ると云つて玄關へ待して置け……オ
 奥様エ決して御心配なさいますナ萬事私が心得て居ますから御緩く
 の召上りませすやうあ……コソ座蒲團お煙脚盆を出して置けヨと梶井
 左膳ハ「ジャガイ」と云ふ長い刀を提げて玄關へ出て参り櫛の上へ坐
 つて傍へ「ジャガイ」を置さ物をも云はせキヨロヨと長五郎の顔を

見て居りましたが、ドウも他人にキヨロく見られるのと随分可思なもので御座います。左「コソヤイ何んだ汝と……ウーン占者を占て貰ひ度心何故関の外エ両手を突て先生お願ひ申ますと云はん其方等と此方とは身分違ふ尙且にも此方と土御門の門に入り賣卜を渡世に致す梶井左膳だ其方等は身分違ひ小屋者じゃアあいか何んで此所へ這入て来た國の外エ手を突いて占て下さいませしお願ひ申すと斯う云へを予も稼業だ飯令錢と取らんでも占て遣ひすサ早く外へ出る。長「嘘ましいやイ何を吐すんだ筈棒奴エ身分違ひだも成程目今は身分違へたが腹からの雪踏直しではねへヤ而かも神田の白壁町左官長右衛門さまの御子息さまだの御運拙なくまて小屋者あ成つたが油壺お鹿の切角を握つてオギヤアと生れた長五郎玄やアねへ、コソ能く聞け俺の事を小屋者だの身分違エだのと云ふが奥に居る奥様と袴ア穿て坐つて居る彼は何んでエ。左「コソく小僧……(白眼む)小僧。長「小僧だ

ア何んでエ。左「静にしるイく。長「奥の奥様と袴ア穿て坐つて居る彼ア何んだ。左「静にしるイ、コソ能く聞け汝は身分違エの小屋者だ汝が其一條で今日此處へ来たんだらうが其様な事ぢやア往かんぞ此一條よと御旗本が二三軒與つて在でなさる飯令小屋者であるふが何んで有ろうとも梶井左膳が中エ這入の旗本衆が掛つて居それで只今奥へ御入来あ成たんだ能く聞け汝の事も此先生が聞いて居るが強面に此所へ来るの心得違エだ先生どふかお願ひ申すと何故神妙に云とねへ。長「嘘しいやイコソ能く聞け第一番お俺の庇護で座光寺の殿様と奥よ居る奥様でエれまよと通情やうに俺が爲て遣つたんだ筈棒奴其俺を省さやアがるてエ事があるけエ。左「小僧神妙にしる能く聞け夫を汝が強面に胡坐を搔ねへで下から出て先生お願ひ申すと何故云とん汝が強面に出れば無據く汝に金子を握らせねへでする事をしおければならねエが先生お願ひ申すと云へば汝を以前の素人町人あ

一て座光寺の座敷へ連れて行き金子の百両と二百兩握らして遣るん
 だが然ら強面に來て裳をまくり胡坐を掻いて掛合うのは心得違エだ
 ろう如何だ小僧神妙にする 長「オ、先生聞ねへ俺アのお前に逢ふの
 は始めだが此三月の中旬お吾妻樓で仕事をししてエると 左「コレ」
 皆ナ云ふな何も角も予が承知して居るら以前素人にして立派に
 して遣る其代り裳を下してチヤンと坐つて下から出る予を尋常の賣
 ト者と思つて居るか加役衆も驚むて居るが予の前名を聞て吃驚りし
 て噫を止めて舌を巻くナ宜いか予の前名を聞かして遣るう目今と梶
 井左膳と云ふがカッふりの名人悪黨の觸頭山王小僧要人之助今道白
 栗原先生と云ふの予の事た五街道を息杖一本でアイガナと云ふ
 雲助から彼地此地の半エ這入り江戸の半エも四五度這入て居る汝杯
 は半法は知るまいコレ能く聞け十二人の役人てニのは何んだか知る
 まい一人と問頭といふ世話役半内では旦那と云ふ是が一だお頭隅役



七六 (男 人 本 五 旗)

二番役中座の役人ときて三番役四番役五番役本番助番詰めの本番助
番々キグチ番是を穴の隠居と云ふて是れで十二人の役人だ十二人半
法杯は汝弁まいめニ賭博も彼地此地で打て信州でと長半大阪では三
粒の投長半四九を取つたと云へば前に五三と坐る先生で加役除けの
梶井左膳だそれより柔和やかに先生ね願ひ申と云へばマソマリ金を
握らして素人に爲て遣る否なら據あく命を取らなけりやアならねエ
旗本二三軒と此方の身分に掛るのら此ツヤガイシで斬らまわなけり
やアあらねへ夫より寧ろその事下から出てお願ひ申と柔和しく頼め夫
ども強情を張り着物を捲つて胡坐を掻き予に抵抗て金子を投げる氣
か如何だ小僧サ挨拶しろイ 長エ、先生然んあらお願ひ申ますが實
は小哥を癪に障りやす小哥が骨を折て尻尾を持上げて遣つたのに今
ぢやア小哥を省う爲めおこよよ身を投られたと空涙を蹴されては餘
まり宜い心持でと御座エませんチブ一丁抜けものにはさくらやア子何

卒つと小哥こがの顔かほの立たやうにしてお呉くんなさいまし……左ひだりコソ／＼爲なて
 やろう……けれども身分みぶん違ちがひの小屋こや者ものでは話はなが出来できらんら足あしを洗あつ
 て素人よそこに成なつてまい……ポン／＼(手てを拍たたつ音ね)コソみつや鼻紙袋かみかみを……
 と懐中物くわいちゅうぶつを取寄とりにせ小判こばんを十枚じまい出して紙かみの上うへへ載のせ長五郎おちごの前まへへ押遣おしや
 の左ひだりサ拾兩しゅうりょうあれを小屋こや者ものの足あしは立派りっぱに洗あへるから此金ここのかねで素人よそこに成な
 り羽織はねおりを着きて先生せんせいお願ねがひ申ますすと云いつて茲こゝへ来きりやア此時このとき之座ざ光寺くわんじ
 の屋敷やしきへ掛合かあひつて以前のいぜん左官長五郎さくわんちやうごおして遣やるが賭博たばこで負まけました先
 生せんせい何卒なんぞモウ一遍べんぱん願ねがひまそと無心むしんに來きると其代そのはり羽織はねおりを着きて來きれを立
 派りっぱナ町人ちやうじんに爲なつて遣やるけれども宜いい氣きに成なつて賭博たばこお負まけ再度また足洗あしあひ
 金を貫ぬひに來きると據よなく汝なの首くびを斬きんければならん首くびが無ないのを粹すい
 ナものだといふが歩行あひぎくに見當けんたうが知しれねへせ小僧こぞう此後このち無心むしんに來きるな
 ら首くびを洗あつて來きい……」と頬邊ほぺたを人ひとさし指ゆびで突つつ突つました 長おちご何卒なんぞ先
 生せんせい何分なんぶんお願ねがひ申ます……」と拾兩しゅうりょうの金子かねを腹掛はらかけの隠袋かくしエ打込うちこんでソ

コソ／＼梶井左膳かきいさぜん方かたを立出たいで入谷反甫いりやはんぷエ來きまして 長おちごハア一大胆奴いったんぱんぬ
 だ彼の梶井左膳かきいさぜんでエ奴やつは……彼あノ畜生ちくじやうは餘よッ程儲ほけやアおつたるう
 何なんんどおこよも立派りっぱに成なつたな何なんしろ此金このかねで足あしを洗あひ羽織はねおりを着きて
 以前いぜんの左官長五郎さくわんちやうごで出掛でかけりやア如何いかかなるナ……併ひし何なんにしる彼
 奴やつと乃公のらより餘よッ程大胆奴いったんぱんぬだ此後このち來きるなら首くびを洗あつて來きいてッ指
 で頬邊ほぺたを突つつ突つきやアがつたが此度このとき無心むしんに往いくと急度きゅうど斬きるせ乃公のら
 り餘程よほど上うへエだナ彼奴あいつよ脅迫おどめて金を握にぎつた日にやア三十さんじゅうか五十ごじゅうだ何
 にしろ相手あいては千二百石喜六せんにひゃくしやくきろくは滅法めつぽう界かい工く面めんと宜いしウうと金かねが取とれる
 仕事しごとだ乃公のらお掛合かあひよりやア義兄あにの鰻塚半治まづかはんぢを掛合かあひお遣やつて彼の賣
 ト者しやと喰合くあひしたら那方あのうが勝かつたろう両方りやうほう共とも大胆奴いったんぱんぬ等らだから一番いちばん大胆比
 較けあさせて見みてへナ、ヤア今夜こんやは歸かへらう……と新堀端しんぼりの小屋こやへ歸かへりま
 したが素よそより長五郎おちご嗜しやうな賭博たばこだから拾兩しゅうりょうの金かねを以もつてッ賭博たばこに係かる
 と忽たちちよ取とられちました鰻塚半次まづかはんぢの處ところへ往いうと思おもひましたすがボ

口くした汚れ腐た打粉でも往き難し仕事お出るのも馬鹿氣ますか
 ら考へて居ると山内の神教院と云ふれ寺に丁半が出来て居ますら
 是へ参りましたして少し計り質を置き算段をして往つたのもふんだくら
 りましたのが彼是モウ四ツ半九ツ時分今夜と五月廿八日兩國の川開
 きで御座います 長「アイ御免ヨ……」 爺「ハイお入來なさいまし……」
 長「モウ何ん時だニ爺さん」 爺「モウ彼是れ九ツ過で御座います先刻
 九時を打ました 長「熱いなア」 爺「ハイお熱う御座います毎年五月廿
 八日と熱ひと極つて居ります 長「愛嬌のねニ爺だなア今夜と兩國の
 川開さだなアマ蕎麥一杯呉んねニ」 爺「ハイく……サレ暖んなさ
 いまし」 長「オツと宜し……」 爺「モウ一杯呉んナ好味なア此蕎麥ア」 爺「
 、好味なくツちやア賣れませんかからあア」 長「一々愛嬌がねニな
 モウ一杯呉んナ」 爺「れ前さん大層腹が空つたやうだね」 長「ウソすつ

かり腹が減ちまつた…… 爺さん此先に赤飯だの漬染だの濁酒を賣つ
 てた夜明一の爺さんが此節出ねへが如何一たニ 爺「ハイ彼は出ませ
 ん窃盗の物を預つて其奴を質に置いたので窃盗に抱込まれ入牢にあ
 り牢死一ましたヨ」 長「ア然うかニ併一善之ねニや窃盗の上前を取つ
 たンだから此奴ア同罪に落たんだナ」 爺「マ然んな事で御座いませう
 長「何おしる夜更けて商賣を爲て居るのと随分難澁で餘まり宜い心
 持では有るゆへナ」 爺「何んでも四ツ過から以後來る奴は餘り良い者
 は御座いません大概窃盗と張て置けば間違ひと有ません」 長「乙う當
 附けるナ」 爺「ナニお前さんの事ぢやア有ませんが大概窃盗として置
 なければ稼業が出来ません」 長「オ、爺さんチヨイと團扇を貸して呉
 んねニ甚い蚊だなア……」 爺「ハイ茲は蚊の名所で御座いますから……」
 長「チヨイと團扇を貸して呉れ」 爺「ハイ……」 長「昨夜寐ないゆで眠
 いからトロリとやるから少し此椽臺へ寐かして呉き」 爺「れ前さんか

眠みあさるから四十八文蕎麥の代を下さいまし……長「宜いや今に遣るら 爺「宜いやアとせんお錢を下さいまし長「ケチな事を云ふ赤儘々五十計り 爺「拂はない方が餘ッ程ケチだ何卒拂つて下さいまし 長「エ、イ愚圖く云なはん如何かならア日本神國だ 爺「日本神國だつて如何もなりやアしないお錢を拂つて下さいまし 長「拂つて呉れると云つても一文もねへヨから如何もふんだくられて三文もねへや 爺「夫ぢやア錢がなくつて蕎麥ア喫つたんでがそか 長「グズく云あはん二三日内よ持て来らア人間は然う錢のねへ事計りありやアしねへ錢の出来る迄貸といて呉れ……」と甚い奴で蕎麥を三杯無錢喰ひ團扇を取上げて日本神國だと御詫を吐き其處へ寐ちまいました 爺「オイく今に山同心隠密が廻つて来るヨ……大胆奴だナ最う空尉を掻いて居る今に此様お奴は就縛ら色りやア宜い夜更けふ成て人の物を無錢喰やアがつて甚い事を爲やアおると獨言を云つ

て居る所へ若い男が参り 男「蕎麥屋さん一杯お呉れ 爺「ハイお前さんは日本神國とて被仰いますまいナ 男「ナ何んだへ日本神國とは爺「ハ、今茲に寐て居る男は蕎麥ア三杯喰やアがつて錢がねへから有時迄貸て呉れ日本神國だから如何か成るツて 男「ハ、申儀云つちやア往けあい利の細い夜鷹蕎麥を無錢喰ふ奴が有ものか、爺「有ものかツて現在無錢喰つて團扇を取上げ茲お寐て居ますの辛い奴も有もので 男「然うかへ何一膳お呉れ 爺「ハイく…… 男「折節通り掛る度に前處で喰へるが好味ナ 爺「へ、爺自慢氣で御座いますから 男「大層犬が吠るねへ 爺「ハイ近年の物騒で御座います邊へ被入いますか一昨日の晚廣徳寺前エ追劔が出ましたそらで夫ども侍が又素ッ刃拔でも爲たのでがせう 女「蕎麥屋さん御免なさい……と聲色を變へて飛込んで来たものが有からナヨイと見ると年頃十六七の娘で御召縮緬の着物に緋鹿の子唐繻子の帯を自墮落み締め洗

足で黄八丈の小さい包みをお脇に挿込み息を切りく 娘「蕎麥屋さん何卒ね願ひで御座いますか此近邊に駕籠屋が有るなら然う被仰て下さいましな 爺「姉さんお前さん犬に吠られたのかへ 娘「ハイ只今犬に追蒐けられ稍々逃げて参りましたが何卒駕籠を然う被仰て下さいまし御禮を致しますから 爺「お前さん何處からお出なさいました娘「ハイ妾と本郷のら参りまして是から千住へ参りますので 爺「エー千住の何處へお出なされる 娘「掃部宿迄参りますので 爺「夫ぢやア是迄お出なされる内に辻駕籠が有ましたらう 娘「イニ母が申すには辻駕籠へ乗ると得て間違ひが有ら辻駕籠へと乗るなど申ました夫もへ是まで歩行て参りましたので 爺「何しろ未だ蕎麥が十五六餘つて居ますから私が駕籠を頼みに往くとお客が来ても商賣をする事が出来ず廣徳寺前迄往かなければを駕籠屋はとせん誠にお氣の毒様だがドウモ然う云ふ譯には往きません 男「蕎麥屋さんく見りや

ア美しい娘さんで是から淋しい處を一人で掃部宿まで追放して遣り万一と途中に間違ひでも有るとお氣の毒だがお前蕎麥が餘つて居るから此娘さんに物仕舞を爲て貰い然うして駕籠屋へお連れ申て駕籠を詠い掃部宿迄駕籠で遣つたら間違ひも有るまいと思ふが如何なる蕎麥屋さん……ニ娘さん十五六餘つて居る蕎麥を皆ナ買て遣つて然うして駕籠屋へ連れてつてお貰ひなさいナ 娘「ハイ御深切に有難う御座います……蕎麥屋さん夫では妾が皆ナ買ひますから然うして下さいましナ 爺「夫りやア讀と歌で皆ナ賣れて仕舞へを私も其方が宜しうがす……ね前さん御深切に有難うがとヤア然う致ませう 男「蕎麥屋さん然うしてお遣り……娘さん然うしてね貰ひあさい 娘「ハイ御深切に有難う存じます 爺「前さんは戀人のやうだねへ 男「俺と三味線弾きで今夜お客さまに連れられ天神の松葉屋エ往つて高臺で兩國の花火を見やうてエので其處へ往て、今お座敷が引けて歸

る所サ 爺「何處へね歸んなさるんではがす 男「本所の達磨横町へ歸へ
 るので 爺「然うで御座いますか道をお氣を注ぎなさいましヨ貴郎有
 難う御座いました 男「左様なら……」と三味線を小脇お抱へ小田原提
 灯を點け出て往つた男「年頃二十二三で御座います 爺「サ娘さん一
 所お出なさいまし私の家と奥の原だから荷箱を家へ置いて私が送
 つて上げませう夜が更けて居るから急度駕籠が出来るか出来あいか
 知れぬへから兎も角私と一緒ににお出なさい…… 日本神國野郎奴辛い
 事を爲やアぶる團扇まで取上げやアぶつて」と團扇を強奪り荷箱を引
 ツ擔ぎ娘を連れて奥の原の我が家へ歸ると云ふ一寸一服



第六席

春錦亭柳櫻口演 酒井昇造速記

娘心の一筋と申て若い娘をね持なすつて夫を持たせん内は親御さん
 と誠お御心配なもので石のカロートへ入れて置ましてを脱出すのが
 女で而て視ると男子より女の方が思ひ切つた事を致しますので何うを
 親御へ苦勞を掛ける様な事が巨多も有ます 仁「サア娘さん此方へお
 這入んなさいまし草が生て居りましても蛇は居ませんニ晝間茲で兒
 童等が盃を取つたり何んる悪戯ア爲て居り升から蛇杯と居りません
 溝もあいから私に尾てお出なさいまし…… 婆アさんや今歸つたヨ
 婆「オヤ今夜は大層早かつたサ 仁「ア、今お客様に惣仕舞を爲て貰つ
 たのだ…… 娘さん不潔う御座い升ヨサ此方へ…… 娘「御免なさいま
 し…… 婆「オヤ…… 爺さんマ美しい娘さんだが何處からニ 仁「マ聞
 きな婆さん今お前此娘さんが犬に吠られて俺の見世へ逃込んで入れ

来あすつたんだ千住の掃部宿まで往きてへから駕籠を詔へて呉れど
 云とつしやるんだがモ一是れ丑刻だ何處へ行たつて駕籠と有りへが
 蕎麥を皆な買て下すつたから寧その事俺が此娘さんを千住掃部宿迄
 送てつて進げやうかと思ふ 婆「左様かへ……貴嬢マ此方へお昇んか
 さいまし足が汚れて居ませんか 仁「雑巾を能く絞つてお進げ申さ
 娘「種々世話さま有難う御座い升…… 婆「此方へ不潔う御座いま
 仁「此奥の原には人家が三軒斗りさやア御座いません其内二軒と穴
 店で蕎麥屋の仁助の家僅々一軒住居つて居りますか家と云つてもウ
 一と云つた限りすも何も御座いません甚々不潔いから娘とッツと瓜
 立て上へ昇りました 婆「サ敷紙を敷いて進げますから此上へお坐ん
 なさいまし少し煙ウ御座いませうお蒸は蚊の巢だからこれで少しは
 蚊も驚させう 娘「アノお婆さんへお願ひで御座います少し行燈
 をれ貸しなとつて下さいまし 婆「ハイ」と反古張りの行燈に一本

燈心でげすから薄ッ鬩いから下皿の油を絞つて燈心を殖したので少
 しと明るく成ました娘ハ黄八丈の小風呂敷を解き紫の服紗に包んで
 有ましぬ胴巻の中から切餅を二箇取出しましぬ是は金包みの外形が
 切餅に似て居るから切餅と云ふので其一包を解き升と小粒でサグク
 と云ふ其内二両鼻紙の上へ載まして前へ押遣り 娘「老爺さん 仁ハ
 イ 娘「誠に輕少で御座い升が是は蕎麥の代と此處迄送つて下さいま
 した御禮ですが是で宜しう御座い升かチ 仁「イヤ是と有難ふ存じま
 す…… 婆アさんや娘さんが金子を下すつたマア此様に澤山下すつた
 から神棚へ上て置きな 婆「娘さん誠に有難う御座います…… 娘「イ
 エ輕少で御座い升…… 然んから何卒お願ひで御座い升が…… 仁ハ
 イ只今私は少し腹が空たから御飯を喫べて直ぐにお送り申まそ娘
 さんね腹が空なさりやアしあいかれ前さんが物仕舞を爲て下さつ
 たんだお蕎麥を上げませう 娘「イエ妾アね蕎麥と嫌ひで御座いま

と爺「ア、ね嫌ひか、夫じやア詮方がない爺の蕎麥と少し自慢氣で御座いますかね嫌ひぢやア詮方がとほせん 娘「イエ最う羨しやア夜鷹蕎麥は嫌ひで御座いますので 仁「ハ、ハ、ハ、と色と如何云ふ理由で夜鷹蕎麥がお嫌ひなんでげす 娘「だつてアノ天水桶の水を夜鷹蕎麥お入れるそうで 仁「ハ、ハ、ハ、申戯被仰ちやア不可い姉さん方が夜鷹蕎麥をね喫べなさらんのは其様な悪い事を云ふからだ何程夜鷹蕎麥だつて天水桶の水を入れて子子をマシに遣ふ杯と素人が悪口を云ひますかそとで女中と夜鷹蕎麥を喫らんでげせうぢやア私か茶漬を喫べて直ぐお送つて進げませう 婆「老爺さん……老爺さんや 仁「何んだ 婆「是のらお前掃部宿迄と云つては往けを往く程道が淋しくなるヨ夫にまア彼の娘さん大層金子を持って居る容子彼様美しい娘さんに年寄のお前と二人で往つて万一然うでもない途中に間違ひでも有ると取返しが出来ませんヨ最う是れ丑刻過だ夜を短いから暫時に

夜お明けるヨ吉原歸りの人がチラツツ時分に彼のね娘お送つて往けば間違ひないのらモ一霎時經過て白夕明けに送つてお進な其方が安泰だヨ 仁「違エねへ然うだナ俺ア其處へ氣が注あかつた……娘さん今婆アの申にと是から前途と往けば往く程淋しい所でヒヨツと然うでも無いお見受け申せば金子を持つてお在なざる御容子私は斯様ナ老人だし途中お間違ひでも有ると取返しの出来ません夜短の事もへ直にモ一夜が明けますから白く明けお成つて送つて進げませうね前さんマ少し横あねあんなさいまし 娘「然んなら何卒夜の明け無い内に……仁「ハイ白く明けに送つて進れを安泰だマ少し横におあんなさいまし私もトロリと致します……婆アさんやモ一些と蚊燻しをして蚊を拂ふやうにして娘さんの枕元へ置いて進げナ二ツ折の屏風で能く囲つて……婆「ア然う爲ませう…… 娘「有難う御座います……」と敷紙の上へ横に成ました枕元へ蚊燻を仕掛け二ツ折の屏風で枕元を囲つ

て呉れました仁助とマン売へ醬油を掛けてお茶漬を喰ひ婆アさんは
 残つた醬麥を喫べ 仁「少し横になろう……」と云ふ頃は彼是モ一丑刻
 半餘程廻つた時分で彼娘は枕が汚穢いから鼻紙を載け小形扇子で蚊
 を拂ひながらグー……グツと熟睡た容子でげを婆アが低聲にて 婆
 爺さん……爺さん 仁「何んだ 婆「彼の娘は大層金子持て居る子
 然うヨ斯う云ふ娘を持たしつた親御は心配だろろうノ必定跡ハ騒ぎだ
 ろうアアア氣の毒だノお前と俺と子が無エからマ、苦勞が少ねへん
 だ只貧乏丈けがね荷物あんだ 婆「エ、爺さんお前も妾も取る年だ此
 奥の原に何日か何時迄も夜鷹蕎麥屋をして居て二人とも死んだ日に
 やア誠に詰らあいちやアないか金子さへ有れば嗜ナ事も出来るから
 責めての事に府中へ歸つて蕎麥屋の見世でを出して死ぬ臨終の際に
 少し樂をして死にたいぢやアあいか 仁「俺を然う思ふけれども肝腎
 の金子が無へから詮方がねエマ、其様も愚痴を云ひなはんナ 婆「彼

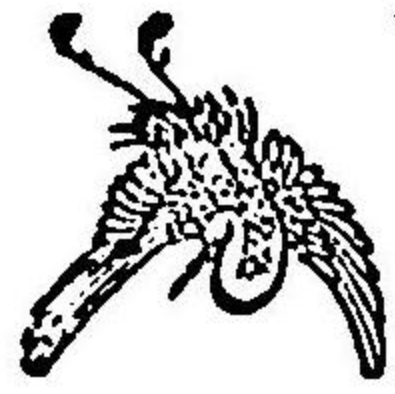
の娘も持て居る金子を……慾しいぢやアないかねへ 仁「慾しいたの
 て他人の持て居る金子と石か瓦も同じ事で何んもならんワ先刻二
 兩貫たのら先是で當分は安泰だ 婆「ダガね爺さん小の虫を殺して六
 の虫を助けると云ふ往時の譬も有るから彼娘を殺して仕舞へば彼金
 子は手附を百兩有るんだヨ五十兩包が二箇有つたやうと思ふが先刻
 の二兩を補すと百兩に纏まるから彼娘を殺して彼金子を此方へ取た
 ら如何だろう 仁「馬鹿ナ言を云はつしやるナ滅方界もねへ……申戯
 にも其様な馬鹿ナ言を……婆「アモ爺さん何時死んだツて同玄事だ良
 刻御處刑に成つたツて惜しくもない命だお前が決行なければ妾が彼
 娘を殺して彼金子を奪るヨオ鬼になつて仕舞ひ 仁「イヤ……(頭を
 振り其様な道理の違つた事が出来るものか 婆「チヨツ(舌打)お前と何
 たる因果で然う正直もんだなア……餘り正直なのと愚純の内だヨ少
 しはコホウカを用ひなければ好い金子は儲からんヨ早之眠を醒さな

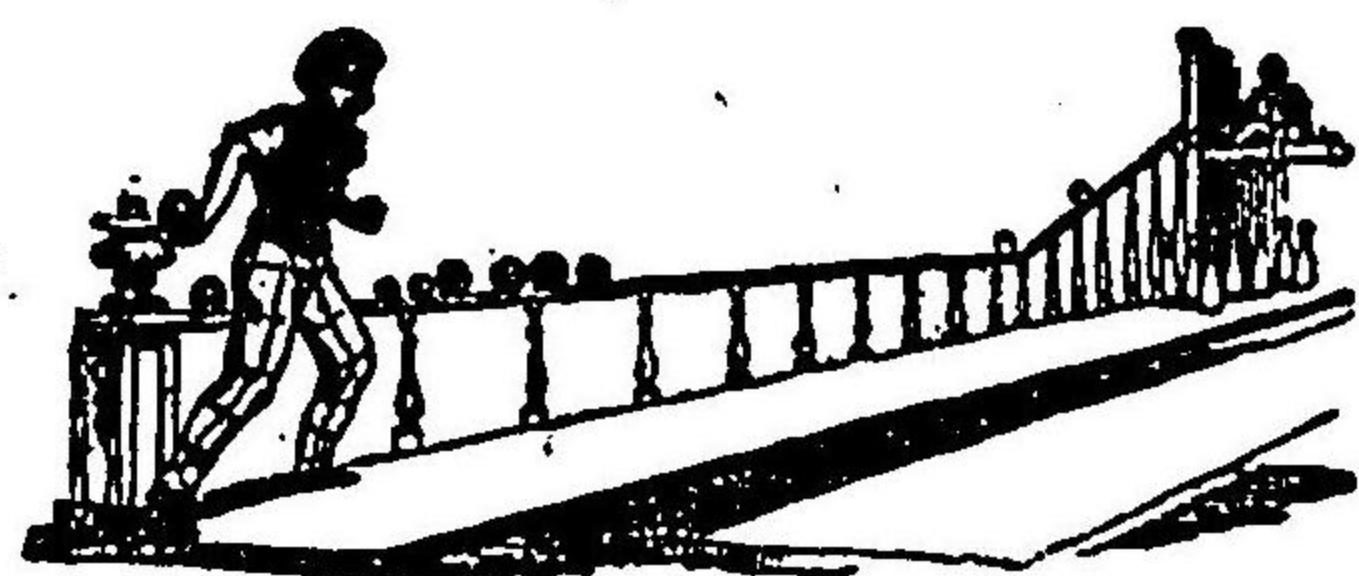
いうちに……お前が否なら妾が殺して仕舞ふヨ爺さん能く考へて御覧
 仁「婆さん嗚呼道ならない事だか鬼になるかナ 婆「殺ッてれ仕舞
 ひく」と婦人が度胸を据へると男子より可怖もんでズイと立上り粉
 箱の中から研たての蕎麥切り庖丁を取出して持て参り 婆「爺さん
 コレで彼娘を殺してお仕舞ひヨ…… 仁「ア罪だけれども鬼も成ら
 う 婆「早くれ爲く」と云はれ仁助と蕎麥切り庖丁を提げてブルク
 震へながら腹の内で念佛を唱へ二ツ折の屏風の中へ這入る娘はクウ
 く」と寝て居ます上へ跨り娘の喉へ庖丁を當て掛寄せました手が引
 て 仁「ハア…… 婆「止うくア、罪だ 婆「何んだおへお前は本筋
 に意久地が無いねへ如何したんだ 仁「夫れだつて俺にやア出来ねへ
 と愚圖くして居る仁助の手を取り無理に引張つて参り仁助と素よ
 り殺す氣は無いが婆さんと二人で娘の上へ跨り仁助は念佛を申あが
 ら上を向ひて居る後ろに居ました婆が夫仁助の手へ自分の手を掛け

蕎麥切り庖丁を娘の喉へ當がい念佛諸共薬研下しにアツーリ二人の
 力でタツた一突で息が絶へました枕元ありました黄八丈の小包を小
 脇に掻ひ込んで婆さんは此方へ参る仁助と力なげに其處へ庖丁を投
 出し 仁「南無阿彌陀佛……」 婆「オイ爺さん見なサ此通り
 是が五十両先刻の二両の金子を入れると是が又五十両都合百両にあ
 るヨ」とコンク」咄をして居る所へ誰やら知らぬ突然り裏口をガラリ
 開けて這入て来た男が有ますのら仁助を婆さんも驚きあがらヒヨイ
 と此方を見返へる途端 男「オ、爺やイ婆ア汝等とまア滅方界もね
 へ事を爲やアがるナ 仁「ヤ、れ前と先刻山下で私共の蕎麥を喰んか
 すつた…… 男「然らヨ日本神國だ……」と突然り未だ手の附ない五十
 両の金子を取り掛る仁助は周章で四十八両の金子を跨間へ浚ひ込
 み両手で押へキヨロくして居ます 男「サ婆ア爺イ汝等も首を資本
 あして爲た仕事なら悉皆持てくんだが夫も氣の毒だに依て手付か

ずの五十兩は乃公が持て往く……何んで二人の面ア見やアがつて、サ
 ア何んとでも云つて見る大胆畜生だ 仁「オ、貴耶さんの方が餘ッ程
 大胆やと呆氣に取れて居ます内に彼男は懐へ五十兩の金を入れ裏口
 からブーイと出て往つちました老人夫婦は骨を折て半分持て往
 りれ茫然として 仁「彼奴は何んだろ 婆「何んだか解らない……が
 何しろ茲にと居られないから夜の明けない内よ娘の死骸を……」と家
 の傍へ古井戸が有まして勿論水もあく草が生て居ます此中へ娘の死
 骸を浚ひ込み上から泥や塵を入れ見へないやう致し夜の明けない
 内に仁助夫婦は奥の原を立去りました長五郎は五十兩の金子を懐中
 へ納れて薪堀端の小屋へ歸り 長占たりと其翌日質受けを致まして
 薩摩の單物お細の羽織博多の帯を締め銀鎖りの煙草入を提げばら緒
 の雪駄に半沓の白足袋を穿き藤の笠を冠り龍泉寺町の梶井左膳の所
 へ往き座光寺の一條を掛合つて貰とうと鍛塚半次と異名を取りまし

た左官で御座いますか鍛を手に取らん手よ鍛が付んど云ふので鍛塚
 半次と云ふ此半次の所へ長五郎が座光寺の一條を依頼に参ると云ふ
 ナヨイと休息致します……





第七席

春錦亭柳櫻口演
酒井昇造速記

九八 (男 人 五 本 旗)

へイエー前章申上げました通り若娘を持つた親御さんは亭主を持たして仕舞てさへも心配です娠妊お成つたと云つても身二ツになる迄はどふの首尾好く安産をさせたいと親御は苦勞をする其親の慈悲と誠み有難いもので悪く致すと自分一人で生長したやうに思ひ親へ悪体を吐いたり或は親の云條に背いたり致します私達も夫だが、實に親を大切に致さなければ成ません親御の慈悲と何處の親でも何處へ参りまして我子は可愛い是は最う極つて居ます 亭主「ナニ喚アどんや見世へ誰か来たぢやアないの 内儀「ハイ、アノ廣徳寺前の小間物屋の市さんが来ましたので 亭主「何んだエ 内儀「ナニと旦那さまよれ咄し申度い事が有ると云つて見世へ参りました 亭主「茲へ呼びナ 内

ハイ……市さんや此方へお這入り市「ハイ今日は……只今お見世で番頭さんに伺ひました。が昨晚御當家のお嬢さんが……」市「イヤ其事で昨夜から彼方此方へ人を出して今番頭が掃部宿から歸つて來たが其家へを往かんでエ事だ、エ、掃部宿の樽屋の家へ探しに遣つたが來ないト云、市「へ、へ、ナ何んでげす其樽屋と云ふのと、市「實と千住掃部宿の樽屋の子息を當家へ預つて置た徳といふ者を、市「ハイ、徳とんが如何しました、市「お前だのら咄すが内のお花と徳と何時しか好情交に成つて居たそふだ予は親馬鹿で其様な事を知らんから亭主を持たせやうと云ふので見合ひを濟ませ近々婚禮と定まつた所が久兵衛も兎や角云ふから徳と暇ア出した夫もへ娘が徳の所へ往くと云ふので金子百兩盗み出して此處へ娘心の一筋で逃げて往つたかと思つたよまだ來ないと云ふのら往つた先が確と解らんので今占を見て貴ふの御圖を取るのと家内中騒いで居る所さ、市「エ、私は其事に付

て此方へ參堂ました……御内儀さんへ此櫛と御當家の嬢さんに此品と笄を取揃へて差上げたのでげせう私の代物を御當家へ賣りましたのだから儘に覺へがおります此品で御坐いませうナ、内「市さん此品は娘が慾しいと云ふから妾の買つて遣つたんだが如何してれ前さんの手に……市「イエ今朝程の事で御坐います阿部川町に粉屋太兵衛と云ふ者が有まして其粉屋の若い者が私の所へ参りまして叔母さんが安藝様お勤めて居ります處から少し私が娼妓買を致し主人エ内々の借金が出來夫を發覺と主人方を失愛るから叔母の所へ往つて無心を云ひましたら金子と無いから此櫛を遣る年を老て不用の代物馬瓜ぢやア無いのら此品で如何か算段して女郎買ひの借金を拭へど叔母さんら貰つて参りましたと申て此櫛を出しましたから見ると私が御當家へれ上げ申た代物もへ体能く他所へ價を貴く賣つて遣るからと申て置いて往かせ私は直々に御當家へ参つたんでげそが御當家でお

買ひなすつた櫛が出て参れを是等が手掛りふなりやア致しませんか
 亭「イヤ夫れと市さん宜い手掛りだ其男を取調べたら知れない事も
 有まい 市「夫ぢやア如何か誰方でも宜しうがすからお若衆御一緒に
 …… 齋頭を私と一緒に拙宅迄れ出さすつて大方早晚お其藤吉と云ふ
 男が参りませう其男を捕まへて調べましたら嬢さんのね出なすつた
 先方が解りませう 亭「夫ぢやア如何か頼み申します… ナニ文吉
 やお前ナ此市さんと一緒に往つて… 齋頭御苦勞あがらお前最う一
 遍小間物屋の市さんと一緒に往つてお呉れナ 齋「へい、宜うがす
 ぢやア旦那一緒に参りやせう 市「齋頭誠に御苦勞さまで… 夫ぢや
 アお内儀さん左様なら… 内「何卒ア何分共お頼み申します 市「エ
 、宜うがす…」と若衆一人に齋頭と小間物屋市兵衛さんとで廣徳寺
 前の我宅へ歸りました齋頭と文吉と云ふ若い者二人と奥へ隠れて店
 りさすと正午少々廻つた時分現今あれを一時頃彼の藤吉と云ふ男が

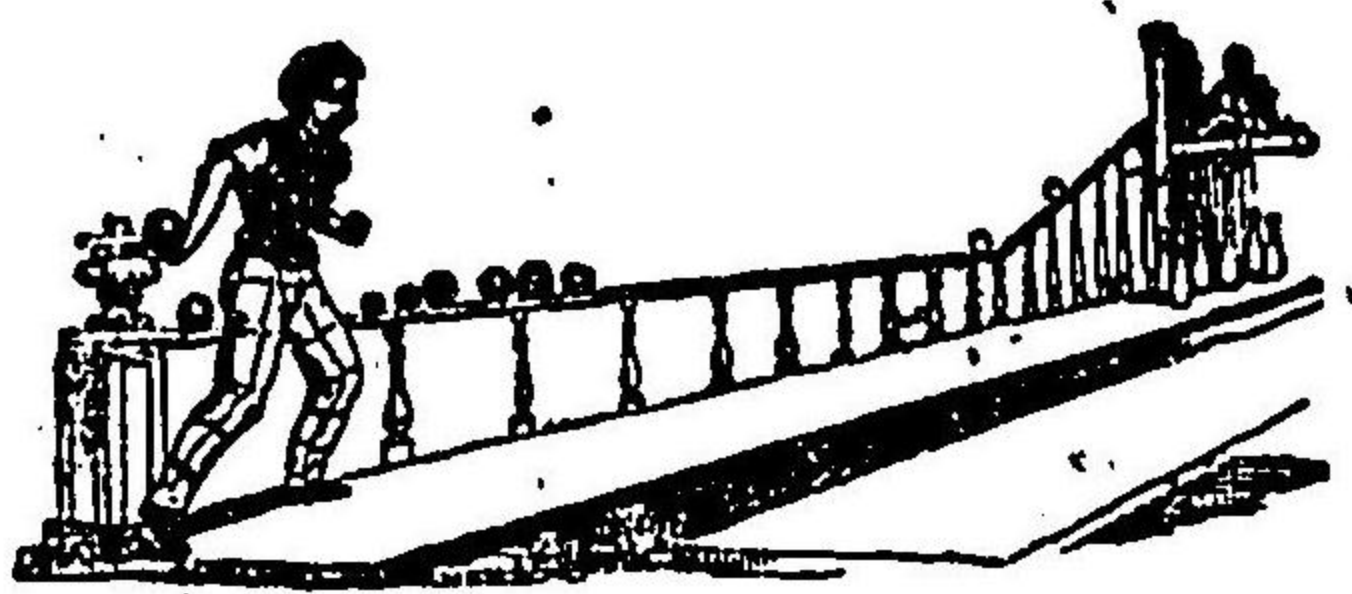
参り 藤「先程は… 市「イヤ藤吉さんおサアね昇りあさい 藤「へい
 大死に如何も種々有難う存ぞました… 如何で御座いますナ何の位
 になりませう 市「藤吉さん彼品何かへ全く安藝さまに勤て居るれ前
 さんの叔母さんに貰つて来たのや 藤「へい儘かに叔母さんから貰
 つて参りませうたので 市「へい、然うかへ… マガ藤吉さん實ア彼品
 ア予か他家へ賣つた櫛だ彼れは本郷二丁目の柏屋といふ質屋さんへ
 賣つたんだ其家の嬢さんのお花さんへ上げたのが一昨年のもで然か
 も彼の櫛と筭を一緒に上げた其品をお前さんが宅へ持なすつたが
 成程廣い江戸だから似た代物も腐る程有ませうが賣た先の知れて居
 る代物だがれ前全く安藝さまお勤めて居る叔母さんに貰つて来たの
 かイ 藤「へい、サ左様で御座います 市「ふ、ウ… (振返り) サ文吉
 さん齋頭此人でげす二人は藤吉の後へ廻つて来て 齋「お前と何の阿
 部川間の粉屋の若衆か 藤「へい… 貴郎と 齋「俺がれ店の嬢さんが

昨夜金子を百兩と櫛笄を持って情夫の所へ往くといふので夜の子刻過丑刻時分に家出をした其嬢さんの行方が今に知れぬ今朝乃公ア千住掃部宿の樽屋でエ家へ探しに往つたが大切なお店の娘ッ子だから胡乱に思ふなら家探しを爲るてエから二階から椽の下まで探しても知れぬ間を悪く歸つて来たが本統にお前の叔母が安藝さまへ奉公して居るあら一緒に往つて聞て見やう本統に貰つたんだか何んだか：
 子文吉さん 文「エ、宜うがす私も往させう此人の叔母に逢てお前さん健に此櫛を甥に遣んあすつたかニ、遣りましたと云へば夫で宜い一緒に往う 藤「エ、夫が其何んで御座いまして往かせないのでへ
 エ 藤「何故往けぬんだ 藤「ナ何んで御座いますエ、其安藝さまへ参りました所が其エ、叔母さんに會うてエ譯には参りません 藤「何故籠棒奴エ櫛を貰つて来やアがつて甥の叔母と會へねエてエ事ア有るゆへ此野郎虚言を吐さやアがるナ 藤「イエ本統で貰つて来ました

ので 藤「貰つたら一緒に往けか如何だ 藤「イエ、全くは其エ、オ叔母さんお貰つたのぢやア無いのでげす 藤「何を……貰つたのぢやアねエ此野郎と怪しいぞ此奴を毆打さやア嬢さんの行衛が知れやす大胆野郎だ此ノ畜生お花さんを如何か爲やアが又たナ 藤「イエ花さんなんヲ其樹な女中と知りませんへイ 藤「知らあいたッて此櫛と如何したんだ、イヤサ此櫛と何處から持て来たんだヨ 藤「へ、へイ左様でげす、ヒ拾つたんです 藤「何に拾つた……安藝様に勤めて居る叔母さんに貰つたてエぢやアねへか 藤「イエ夫はウ、虚言でげす全くと拾つたんで 藤「イヤ何處で拾つた何處で拾つたんだヨ 藤「左様でげす……へイ…… 藤「此野郎愚圖くしやアがるナ盗ッ人野郎奴、サ正直に云へ 藤「へイ夫が其何んでげす全くと其門跡前で拾ひました 藤「門跡前……門跡前なら遠くもねへら此奴と一緒に連れて往さやせう當家の旦那御苦勞序に引張つて一緒に往つて下さいと逃げら

れないやうに藤吉の帯へ手拭を確り結び付け其先を蔦頭が押へ小間物屋の旦那と文吉と三人付いて藤吉を門跡前迄連れて参り「サ何處で拾つた 藤「ハイ、何處おしませう 蔦「何處にさせうと……怪しい野郎だ此ノ畜生と氣の短い蔦頭もへ突然り藤吉を二ツ三ツ毆飛をす内お周圀りは大變ナ人立で 甲「泥棒だ 乙「何に巾着切りだと種々ナ言を云つて居ます 男「ハイ御免ヨ」と見物を搔分け 男「蔦頭何んでげす 蔦「イエ此野郎は阿部川町の粉屋の若者だてエが大胆野郎で小哥も大切ナれ店の嬢さんが大金と櫛笄を持って昨夜家出をしたらんでげす所が此野郎奴お嬢さんの櫛笄を持って來たあら段々聞くど安慈様に勤て居る叔母さんに貰つたてエ口振りがドウモ訝しいから種々に調べると門跡前で拾つたてエから此處へ連れて來て何處で拾つたと責めると何處おしませう何んて胡乱ナ言を云ふら二ツ三ツ毆り付けたんで 男「イヤ」 蔦頭貴郎は素人だから口計り多くなり騒

立つ計りだから予が調べて進げやう 蔦「ハイ、ね前さんえ何んで 男「予と御用聞でがす 蔦「然うかい、ぢやア本職だ……此泥棒野郎奴大胆事を爲やアがつて……親分宜敷お頼ノ申ます 男「ア宜がすと直ぐに門跡横町の自身番へ連れて参り跡から見物がアロ」三人も共に尾て参りました其處は稼業だから箒尻を出し傍に硯箱を置き 役「サ有体に云つて仕舞へ種々舊惡の有る奴だ疾から御上の御耳に這入てる一度や二度ぢやア有るめへ放火人殺し矢尻も有だるう 藤「ド如何致まして全く左様な覺へど御座いません 役「陳じる……体に申上げて仕舞へ此櫛は何處から持て來たナニカ汝此人の御店の嬢さんを昨夜何處で輪姦を取り雜物を強奪つて娘を殺し死骸を川へでも投り込んだか 藤「ド如何致まして全く然う云ふ譯では有ません 役「申上げろイ……」と箒尻で打たれ當人はキマト」爲あがら 藤「ハイ」申上げます」 役「サ早く有体申上ちませへ 藤「へエ實之奥の原の夜



蕎麥賣の仁助と云ふ者の所へ毎朝蕎麥粉を持って参る今朝も例日の通りマメへ蕎麥粉を入れて持て参りましたら爺婆の居ません内が空虚で御座いますから黙つて粉を置いて来る譯も往きませんからヒヨイヒヨイを擔いで出に掛るとヒカリ光つた物が有りましたから見るに彼の櫛で誰を居ませんから……チヨイと洒落に袂へ入れて参りましたので 役「悪い洒落を爲やアがる洒落に袂へ櫛を入れて来たてエのか 藤「へい全く洒落に遣りましたので私が何も娘を殺して取つたんぢやア有ません實事で御座います若し虚言だと思召なら往つて聞いて御覽さいまし直ぐに解りますら 役「聞けッて誰に聞くんた藤「蕎麥屋へ参れを解ります全く虚言では御座いませぬ 役「ソレ……是から細付に致して藤吉を連れ三人付いて御用聞が一人蕎麥屋仁助方へ参り段々取調べますと薄縁が一枚血だらけ成て居て二ツ折の屏風にも血が跳いて居て爺婆が居りません土間へも血が垂

れて居りますから 役「ハテナ……」と云ふので御用聞が血の跡を慕つて段々往つて見ると古井戸に血が付いて居ますから 役「此中が怪しい……」と素より水も御座いませぬ古井戸だから中へ這入泥や塵を取除けると娘の生首に胴壳が出ましたから實に驚きました乃で藤吉は入牢に相成ました是でがすから迂濶り物は拾へませぬ當今物を拾へば直ぐに巡查方へ届けて出す後日夫れが露見致ますと頼だ難に遭ひます従前も矢張同玄事で藤吉は櫛を拾つた斗りに入牢と相成ました扱雪踏直しの長五郎は五十兩の金子にて身仕度及び是より梶井左衛門へ掛合の一條を頼む爲め鍛塚半次の所へ参ると云ふチユイと休息致します



第八席

春錦亭柳梅口演
酒井昇造速記

へイエ、新堀端の小屋者雪踏直しの長五郎は先達てお話申ました柳の稻荷の向奥の原の蕎麥屋仁助方にて五十兩の金を奪つて新堀端の小屋へ歸り其翌日質受けを致し陸戸飛白の單物に紺献上の博多帯緋の羽織ハラ緒の引詰の雪駄白の半沓の足袋を穿き藤の笠を冠り銀鎖の煙州入を提げチョツと小粋な打扮で年輩と三十五六座光寺の一條で大恩寺前の梶井左膳は勿々彼奴に及ばんから兄貴分の鍛塚半次に頼もうと巢鴨傾城ヶ窪へ出掛けて参りましたのが五月七日でげす鍛塚半次の家へ参つて見ると九尺二間の詫住居半次は博奕に取られ今戸焼の火鉢へ炭團をさらひ込み煙管の雁首で炭團の頭ア毆ちがら叭煙州入から煙州の粉を撈ひ出して喫ながら愚痴を云ても傍に半次の女房が居りました此者は悪婆のおりうと云ふ下ッ腹ふ毛の無い

奴で山に千年海も千年里に千年以上三千年の効を経たと云ふ甚い婦
 人で、半次さんお前まア然う遣て寐て斗り居なはるが申戯じや
 アない借金だらけで詮方があいのに如何か出来ないの 半「静に爲ろ
 イ人間七轉八起だ 半「申戯云あはんナ七轉八起てエのハ世間の人
 の云ふ事だお前杯は七轉十轉で年中博奕にふんだくられて斗り居る
 ぢやアあいか見ねへ妾の着物を遂に襟肩の開た着物を着た事アねへ
 ヤ 半「喧しい静に爲ろイ嗜た人を亭主に持てば喚アの苦しむのは當
 然だ 半「申戯云あはんナ 半「静あ爲ろイ早晩に如何かあらアと云
 つて居る處へ門口から 長「エ、姐さん此間と…… 半「誰だへ 長
 御免なせへと笠を脱て家に這入るを見て 半「ヤー長あイ 長「姐さん
 此間と…… 半「オヤ長さんお前大層都合が宜いノウ 長「ハ、何
 都合の宜い事もねへが宜い塩梅に少し計り賭博で儲けたんだ 半「う
 然うか宜い賭博が有たら宅の良人も一緒に連れてッて呉んナ見ねへ

年中此通りだ 長「ア、兄貴泄ねへあ 半「起たつて詮方がねへや一杯
 飲もうか汝豪勢都合が宜いナ些と計り貸しねへ 長「何に貸す程勝も
 爲ねへが姐さん何か一トッ然う云つてくんねへお酒の極上等奴を然
 う云つてナ水貝か何かい出来るだろウ姐さん如何だエ 長「い
 さん御馳走だあア 長「ぢやア姐さん願へだが然う云つて来てお呉
 んなせニ……二分れ前お土産だ夫色から此二分で鰻とお酒と鯉が見
 へるからお刺身に水貝か何かを見繕つて来て呉んねエ 半「ぢやア
 妾が然う云つて来てやう一両の金は妾が預て置くヨ 長「姐さん何家然
 う云つて来てお呉んなせエれりうと長五郎の渡したる金を熟々見て
 りう「ム、ウ……長公此金ア博奕で勝たんぢやア有めへ 長「ナニ賭博
 で勝たのヨ外に詮方がねへぢやアないか 半「申戯云なさんお宅の
 良人を一緒に連れてッて呉んなお前何處かで強盗を爲すノウ 長「仕
 事てエのは 半「矢尻を切たろウ 長「申戯云ちやア不可へ然んな大

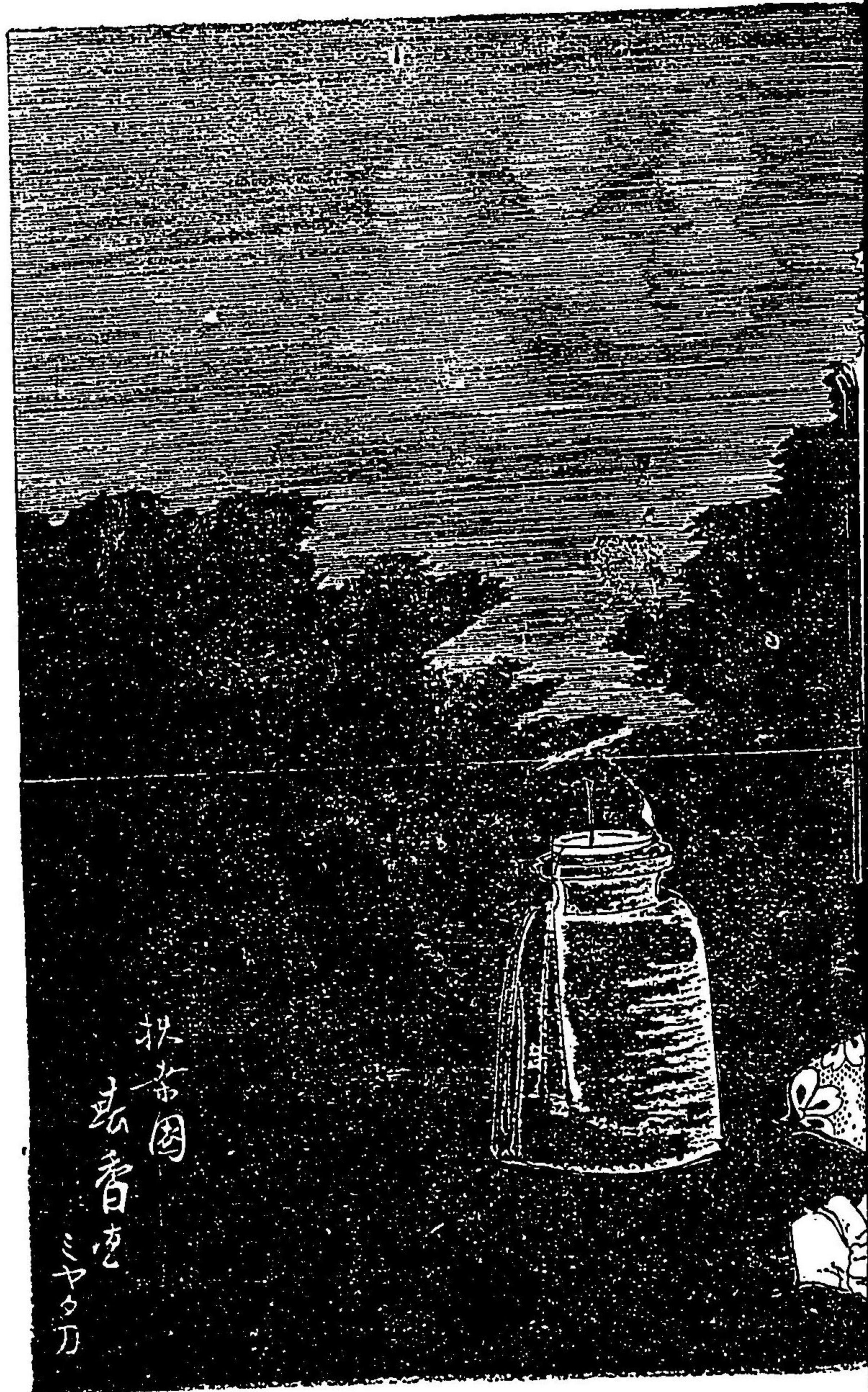
旦那事が出来るものか　りう「イヤ此一両の金を小粒金で出したが他所へ往つたら然う云ひナ妾の前ぢやア其言ア通らねへ　長「何故　りう」何故だつて此金は盆越の上で丁半くど云つて取遣りを爲た金ぢやアねへ封金だチヤンと倉庫へ仕舞て置た金だ盆の上で取り遣りを爲た金なら少しと手摺れて居るが此金ア少とも手摺れた所がねへ封を切た儘の金だお前何處で矢尻を切たんだ夫とせ人を殺して持て来たか宜い口が有たら宅の良人も連れてつて呉んナ　長「コゝ姐さんアお前と眼が高エ　りう「駕入たろうナ　長「コウ姐さん然んなら咄すのま兄貴れ聞なせへまし何んどまア世の中には大胆な奴を有ぢやアねへか此間山内の博奕で悉皆りふんだくられ然かも五月廿八日の晩だ懐には三文も無エが腹が空て耐らねエから山下の夜明しの蕎麥やへ這入て錢は無へが然かを蕎麥ア三杯喰つて錢が無へら貸して呉れろと云ふと呑齋の老爺ヨ貸すの貸ねへのと愚圖」云やアがつた半

そりやアお前蕎麥三杯喰つて貸して呉れてエ方が餘ッ程吝嗇だア長ハ、云やア然んかものだ何しろ眠いから床机臺の上へ乃公が寐て居ると頻りお犬が吠るから不思議だと思つて居る處へ年頃十六七お成る娘が躑躅で逃げ込んで来て云ふにと千住の掃部宿まで往きたいから駕籠を一丁然う被仰て下さいましと云ふ其傍に黒の羽織を着て三味線を風呂敷あ包んで小脇に抱ひ銅の小田原提灯を提げて居たが多分彼奴と戀人だ落談家だか三味線弾だか解らねへが寄席へでせ出た歸へりだらう其戀人の居る處へ娘が来て掃部宿迄往き度いと云ふ戀人が口を添へて蕎麥を惣仕舞にしてお呉んなさりやア駕籠屋へお連れ申と云ふので蕎麥屋が娘を連れて往く三味線弾が蕎麥屋さん此娘を然うしてお遣んなさいッて歸つた跡を乃公が尾て往つたスルと柳の稻荷の脇で奥の原と云ふ所の汚穢家ヨ見て居ると何んどまア滅方界もねへ事をするぢやアねへの其娘を蕎麥切庖丁で老爺婆ア二人

掛りて薬研下しに斬りやアがつて多方親の金子を盗んで来たんだろ
 う百兩の金子を取る處を裏口で見て居たから突然裏口の戸を蹴放
 し中へ這入て五十兩の金子をふんだくつて跡の金子も一所に持て來
 やうかと思つたが夫れぢやア餘り残酷いから五十兩で堪忍して遣つ
 たが何んど姐さん世の中に大胆奴も有るもんです其娘の持て來
 た金子の内五十兩の金を引渡つて來て質請けを爲て此方へ來たんだ
 が何んどまア世の中よと残酷い事をする奴も有るものでとねエ
 フ、長公大胆競べをするとお前の方が餘ッ程大胆や人が命を資本
 に取つた金子を半分持て來りやアお前の方が大胆ぢやアねへか 長
 云やア然んぢものだが可哀想なのは彼娘だ、マカヲ手摺れねへのヨ全
 くは賭博場から持て來たのぢやアねエ何しろ殿や酒を然う云つて來
 てれ呉んぢせへナ りう「ぢやア妾と往て來るヨ長さん寐轉んで居ね
 エと云捨出て行く 半「長ヤイ汝家の奴の前で滅多ナ事を饒舌んぢと

んなヨ 長「何故…… 半「イヤ残酷いアだ乃公も脊負て立ねへ程惡事
 を働いて居るが彼ン畜生よは難敵のら彼奴の前で滅多な事を饒舌ン
 なさんぢヨ 長「マカヲ今日少しお前に相談有て來たんだけれども
 乃公だつて姐公の前ぢやア一大事と饒舌らねへ 半「何んだエ乃公に
 頼みてエと云ふのこと 長「エウ兄貴他ぢやアねへが本所荒井町お座光
 寺源三郎といふ千二百石の旗本が有る彼家ア乃公の親父の出入をし
 て居た屋敷だ所が乃公もトウく小屋へ落ちまい親父も母親も死ん
 だから今ぢやア多方他の左官が這入るも知れねへが其座光寺の殿様
 が本所二ツ目の小屋頭喜六の娘かこよと云ふ女太夫だ是を乃公に取
 持て呉れてエから乃公も種々心配爲て尻尾を持上て遣た處が勿論乃
 公の無心も烈しい殿様に五兩ねよよに三兩と互ひ違分に無心を云ひ
 稼業をしないて居たから罪もねへが乃公の無心を蒼蠅のつて如何云
 ふ仕掛か知らねへがおこよを屋敷へ入れたんだ當時座光寺源三郎千

二百石の奥さまに成りまッた 半一ム、ウ…… 長マ聞ねへ乃公も餘り瀧に障るから本所の座光寺の屋敷の周圍り計り流して居ると五月の霽節句に座光寺の表門の筋向ふの煙艸屋で仕事を爲て居ると門が開いて緞子張切棒の駕籠が一挺出て女が三人若党の一人仲間が二人釣臺へ油たんと掛たのを擔いで出たが駕籠の中に居た女がドウモおこよのやうに思これたから跡を尾て往くと大恩寺前の掘井左膳と云ふ賣卜者の門口へ駕籠を入れた何が出るかと思つて居るとおこよだ生れ變つた打粉で出たから餘り瀧に障つたから其左膳と云ふ易者の玄關へ係り胡坐を掻いて談判をしたが其左膳てエ奴は乃公から見ると一階も二階も上の悪党で勿々難敵エ足洗ひ金十兩遣したが足洗ひ金てエ事迄知て居る奴だ勿論喜六から聞て居るだろうけれど乃公が往けを十兩か二十兩で追拂われる兄貴が掛合に往つて呉れを如何間違ても百兩や二百兩の金子ハ屹度取れるんだが兄貴如何か掛合



扶桑園
毒香堂
ミヤタ



に往つて呉をねへか其代り幾許も成ても山分けだ百兩にあれば五十
 兩宛二百兩取れよを百兩呉んねえお前に百兩出す 半「然うか、デヤア
 往つて遣らう何しる此事が表向きに成た日にやア千二百石の家に拘
 くる事だから此奴ア首根ツ子を押し金子が取れるナ 長「併し其棍
 井左膳と云ふ奴は年輩四十三四の白髪交りの合相で眼の細い鼻の高
 エ餘ッ程大胆不敵奴だヨ乃公を脅迫やアがつたから確乎掛合て呉ん
 ナ 半「へン筧棒めエ先方が何様ナ悪黨だつて木刀だつてピツともす
 るんぢやアねへや 長「其度胸の有るから此相談を兄貴の所へ持越ん
 だんだ 半「併し家の奴が歸つたら必也暖にも其事を出しちやア不可
 へヨ 長「何に云やア為ねへ 半「家の奴ア勿々大變もんだ 長「然うか
 …… 半「然うらつて第一間男を爲て居らア 長「兄貴に前知つて居るの
 ろ 半「ッソ知つて居る 長「知つて居るなら離嫁を爲て仕舞は宜いの
 ろ 半「イヤ、ソユだ綱打場綱打場とは昔し深川にて百文にて情を賣り

し俗に鉄砲店と云ふ長屋を云ふのら引張つて来た女で到底媒灼人が這入つて持た娘アぢやあし長家を敲いて居た女を引拂つて連れて来て娘アを爲て居るんだから表向に成ると乃公が喰ひ込む間男を爲て居るのはちやんと知れちやア居るけれど離縁を爲た爲めに乃公の悪事を饒舌られた日にやア乃公の素ッ首が無くなる矢尻を切たのも人殺しも彼奴は皆ナ知つて居る夫へ據なく刺刀を懐へ入れて寐るやうなものだが噂アに持つて居るんだ世の中に彼様な女と少ねエ大變者だ

長「然うか何様ナ事をするんだへ 半「マ聞きやア彼奴と子殺しが三人湯屋の板の間が敷知れず放火が六ヶ所有る 長「ホー大變者だナア 半「乃公にと逆も出来ねへ尤も男子の悪黨と婦人の悪黨と比較ると婦人の方が遙る悪事と上のもんだ男子は勿々彼様な思ひ切た悪い事は出来ねへア聞きやア其子殺してエのと乃公ア以前芝の大門に居た時よ彼奴の町内から三兩付て棄子を貰つたからありや汝乳

も出ねへのに赤ン坊を貰つて如何するんだ仕様が有るめへと云ふと宜いから黙つてお在メクリの資本が出来た細工は流々仕揚を御覽てエから何をするかと思つて居ると十日計り貰ひ乳をして方々抱いて歩行くから不思議な事だ夫でも婦人だ男子と違つて子凡惱たなど思つて居る内に十四日程経過と其赤ン坊の眼の腫れて顔が眞ッ赤にムクンで来てブツ／＼何か出来て居る彼亞魔奴赤ン坊の頭へ西木綿の片帛を冠せて疱瘡だ／＼てエから乃公も疱瘡だと思つて居たスルと或晩此小兒は壽命が有るのら殺して仕舞ナけをむならねへと斯う云ふから汝殘酷事をするな半さん黙つてれ居て何をするかと思つてると夜の玉刻過に赤ン坊を抱き起しヒイ／＼泣て居る面エ酒を吹掛けるとナヨイ／＼松葉で顔を突ツ突くゝら終にと本當に聲を出ない酒を吹掛けちやア火入へ火を入れて蒲團を被らせ其中へ小兒を入れちやア又出して酒を吹掛けトウ／＼酒蒸にして松葉で突殺しちまい疱

瘡で死んだと誤魔化し葬式を出しちまつたア、悪い事を爲やアがると思つたけれども嫌アの悪事も人に云ふ譯にも往かき黙つて居ると間もなく大門を移轉して八丁堀の玉子屋新道へ往つたスルと此度と四才斗りに成る男の小兒を貰やアがつたから最う止して呉れと云ふのを聞かば此奴と金五兩付けて貰ひ此子と跡取りにするつて可愛がるのらヤレ嬉しやと思つて一月計り経ど何んだか又顔がムクンで来たからア、又酒蒸に爲たんぢやアねへかてエと何此兒と胎毒が深いから此通りヒヨムキへこのつばを張て置くヨと膏藥が張てゐるから本統かと思つて居る内二三日経どトウ〜其小兒も死んだからお柳やい汝また松葉で突つ突いたんぢやアねへか馬鹿ナ事を云ひなはんあ是を見なとヒヨムキに張つて有つた膏藥を引ッ剥くと黒いものゝホツナリ見ゆるのら何んだいと聞いたら活して置ても爲やうがねへからヒヨムキへ木綿釘を打込と其上へ膏藥を張といたんだてニから乃

公ア驚愕りしてしまつた葬式を出して其處に十日計り居たが今度は本所の達廣横町へ移轉したお柳やイ無心の小兒を殺すのと止して呉れ思ひ出して身毛がよたつと云ふと到底此方らは御年貢を納める身体湯屋の板の間は敷知れぬ放火も數度も有るからと平氣な成て五才に成る女の小兒を貰やアつたから此兒計りと殺して呉んなとんな何大丈夫だヨ殺しやア爲ないど一年計り可愛いがつて居たから恰もまア六才計りに成つたのヨ今度は殺しやア爲めへと思つてる内に借金だらけで達廣横町にも居られぬへのヨ半さん茲には最う居られぬへから何處かへ越うと云ふので乃で巢鴨傾城ヶ窪の此處へ店を借りて来たんだ引越時に荷物と晝間此處へ遣して置き夜チヨツとした品物を小風呂敷に包み乃公おひッ脊負ひお柳は女の小兒を抱ひて吾妻橋へ係り丁度中程まで來るとお柳が一足先へ往つて呉れと云ふから何の氣なしに二三間西方へ來るとドブールと云ふ水の音ヨ何んだ知ら

身投げおやアねへかと思ひながら振向ひて見るとお柳が手ぶらで居る。おられ柳ヤイ彼の小兒は如何した川へ投り込んで仕舞たヨ、エイ滅方界もねへ黙つてお在ヨ連れてつたつて詮方がない親身の小兒だつて邪亡になる時にやア遺棄する事も有り殺す事も有るけれども妾ア三人の内一番可哀想だと思つたのと此小兒は差上たら阿母ちゃん御免よと云つたのを面倒臭いから投り込んで仕舞たと云ふ何んぞまア長五郎鬼にも出来ねへ悪事を働之のが彼の悪魔だ夫と云へば彼奴ア云とぞと知れた磔刑だ長い臺へ素ッ首を載けて御年貢を納る身分だの最う些と装婆に居なければ不都合だから黙つて居るが今離縁をすれを夫婦で互ひに血で血を洗ひ合ふ譯だから我慢を爲て居るが長公實に大變もんだヨ必ず彼奴の前で座光寺の咄しをするんぢやアあいヨ虚言なら今夜泊て見ねへ寐られやア爲ねへ夜の八ッ過から悪魔ア寐ては居ないヨ床の上へ坐りやアがつて朱羅宇の煙管を振り廻し此

畜生くも云て膝の廻りを叩いて居る。おら段々聞けば殺した小兒が三人傍へ来て蒼蠅くつてく詮方がねへから煙管で追拂つて居るんだと云ふ何んぞまア大變もんぢやアないか恐しい畜生だヨ 長兄哥乃公ア聞て悚とした成程大變お婦人だなア兄哥如何かして彼の噂アを追出して仕舞ねへな 半「早晩に如何かするが大工の源太郎と云ふ二十一二に成る青二才と密通て居るのだと咄をして居る處へお柳が歸て参り 柳「長さん今暇は来るヨ酒は持て来た 長「オ、姐さん熱ひのよ御苦勞でした有難う…… 柳「れ前今何か良人と妾の噂をして居たノ 長「何お噂も何も爲やアしねへ 柳「爲ねへ事が有るものか妾が小供を殺したノ湯屋の板の間から放水の一條を咄したろうね前に 長「串戲云ひなさんナ何も聞たやア爲ねへ 柳「お前今夜乃公の處へ泊らねへか良人と賭博を打に出て往ちまうから一緒に寐な夜の八ッ過に成ると余ッ程面白いヨ死んだ小兒が妾の膝の傍へ三人這て来る

日妾と色あならねへか 長「ハア、夫れは忍入る御免あせい 柳「マコ
くするとヒヨメキへ五寸釘を打込む 長「申藏云ちやア往けねへ
マお爛をれ付けあせへ 柳「長公些と計り金エ借て呉んあ 長「ナニ貸
程有るものか其内殿もお刺身も参りましたから飲食を爲ながら四方
山の岫を致しお柳も十二分に酔ひ 柳「長さん妾ア遊びに往くから
：ど着物を着替て出て往く 半「見ねへ長公亞魔と二分の金エ持て情
夫の源太郎の所へ遊びま往くんだが悪くい畜生だなア 長「兄哥本統
に呆れちまうナ就ては大恩寺前の梶井左膳へ何家一回掛合て呉れね
へか 半「オツと承知併し今日は往けねへから明日の事にしろよど其
日と酒を飲んで長五郎と半次と一緒お寐て仕舞ひ翌朝設塚半次が梶
井左膳方へ談判に参ると云ふ一寸と休息を致します

第九席

春錦亭柳櫻口演
酒井昇造速記

エ、鰻塚半次は丁度五月の八日熱い日に單物を質受け致しまして長
五郎の紹の羽織を借り帯を締め笠を冠り小氣体の利た打扮で銀鎖り
の煙州入を提げ梶井左膳方へ参りましたが登時滅方界に流行致しま
した梶井左膳と云ふ賣卜者は上手だ見通玄だと言はれて居りました
勿論當今は九星が大層流行致し占考の方は些と押されたやうだが易
は只判談の任やうに寄るもので元當る爲めの易で御座います往時兩
國に平澤左内と云ふ登時名人と謂はれた易者が有りました或朝左内
先生が朝湯に往き家には妻君と内弟子の居ります處へ侍が一人参り
まして 侍「頼むく 内弟子「へい入らつしやいまし 侍「エ、平澤左内
先生と云ふ易者は當家かナ 内弟子「へいく拙宅で御座います 侍「左
内先生はお宅かナ 内弟子「へい私が左内をげす此内弟子も可也能と見

ますから私が左内だと虚言を吐きました 侍「イヤ是は平澤左内先生何卒一笠占て貰ひ度い 内弟子」サ此方へお昇りささい、マお茶ア召上りまし……エ、何んで御座いますかお身の上でも…… 侍「イヤく身の上では御座らんが此度拙者方の庭へ筈が生へましたが是は天より授つて手前の庭へ生へた筈か夫ども隣の庭から蔓つて出ました筈か是を占て貰ひ度い 内弟子」「イヤ畏りました……と筈竹を取揚げ頼へ押當て乾元亨利貞と算木を表裏轉換し易書を繕き能く閲まして 内弟子」且那さま是は隣家の庭から尊公のお庭へ蔓て出ましたので天から授つて出た筈では御座いません澤山威と云ふ易が立ました變爻致しましたも矢張り隣家の庭から尊公のお庭へ蔓て出ました筈で御座います 侍「ム、ウ、されば我等へ天から授つた筈では御座らんか 内弟子」御意に御座います 侍「左やうか……侍の面体俄に變り尋常事ならぬ容子に御座います 侍「見料は 内弟子」百文で御座います 侍「ウン……見料を拂ひ大小を

掴み差しにして左内の宅から歸らうとする途端に左内先生がブラハと手拭を提げ歸つて参り門口で出合ひましたが人相も能く観ますから侍の顔を見て 左「お入來ささいました何んで御座いますか私が左内……侍「オ、お前が左内先生か 左「イヤ 侍「お宅のは 左「イヤ彼は私の弟子で御座います是を聞いて内弟子は面目かいから裏日へ逃げ出しました 左「サ此方へお昇んささいました又占損さひでも有りますと不可せん何んで御座います 侍「實はコンく筈の一條で來ました 左「ム、ウ弟子は隣家の庭から尊公のお庭へ蔓つて出たと申上りましたか 侍「左様 左「宜しい占直しませう……と筈竹を取り算木を表裏轉換し易書を能く調べまして 左「是は占損ひで隣家の庭から蔓つて出ました筈では御座いません天然尊公に授かつた筈で御座いますから尊公はお屋敷へ歸て切捨やうと云ふ思召で御座いませうが夫は罪だ竹に養育てお遣りささい尊公に授かつた筈で御座いますから 侍「

ム、ウ、屹度左様か 左「御意に御座います 侍ア、夫れは有難いお前の云ふ通り屋敷へ歸つて彼の首を切て仕舞ふ所存で有たがア、有難い見料は…… 左「イエ見料は戴きました又入らッしやいました茲で侍は色を直してア、イと歸りました跡で 左「秀エノ秀や 秀「へイ…… 左「汝は最う賣卜者は廢る汝のやうか易者が有ると人が死んで家が潰れる大變も騒動が出来る所だつた賣卜者は廢て呉れ 秀「ナ何故でげす 左「汝われは筈ぢやアあいぞ 秀「へイ…… 午勞で御座います 左「馬鹿ア云へ筈位で武士が此左内の所へ占て貫ひに来るものか 彼の侍は左内は得來と云ふのを聞て茲へ來たんだ筈ではあいぞ 秀「へエー何んで御座います 左「其處が口訣だ彼の人の細君は隣家の亭主と姦通に及んで居る間男を爲て細君が妊娠に成り然も五月だ所が彼の人ば世間の風聞斗り聞て一所寮を爲た所を見あいから疑ひの餘り予の所へ來たんだ腹の子は間男の胤だ夫が表向に成ると家に拘は

るに付て腹の子を筈に視へて來たんだ夫を汝のやうに云ふと彼の人は我女房を斬て仕舞ひ腹の子は間所から間所へ往く隣家の亭主も斬るだらう是に於て家が二軒潰れる予のやうに云て安心させて歸せば其内に異見をするものが有て間男も廢ひされば人が三人助り家が二軒潰れず安泰に治る斯う云ふ譯のものだから易者は六ヶ敷いものだ汝の様も奴は易者を廢めると云つたてへますッテ見ると易は必ず當るに違ひ御座いません只判断の仕様のみでげす彼の梶井左膳も判断の仕様が宜いと思ひて大層に流行ました諸方から皆占て貫ひに参ります 半「へイお願申します 女房「ドレオヤ御入來あさいませ何んで御座いますエ 半「へイ小哥は芝から参りましたが先生に一筈占てお貫ひ申したう御座エますが何卒宜しく願ひます 女房「オヤ左様で御座いますか夫は誠にお氣の毒さまで良人は湯治に参りまして當月内は歸りません來月の中旬でなければ戻りますまい誠にお氣の毒

さま如何か其節又お入來を願ひます。半「へニ先生は湯治に往らつしやいましたか。女房「ハイ箱根から伊豆の方へ参りました誠にお氣の毒さまで。半「左様でげすかへ折角芝の源助町から参りましたのには是が近い所から宜いが芝から大恩寺前まで暑氣を耐へて参りましたのに左様でげすかへ頓だ事をした折角先生に占てお貴ひ申さうと思つて來たのに。女房「まア一服召上りまし。半「御内室さん何卒便所を拜借致したうがす。女房「まアお暑氣から羽織を脱て些と涼んで入らッしやいまし……初やお茶をお上げ申しさ是从から鍛塚半次が便所へ這入りコン／＼に仕やうと能く地理を見て便所を出まして。半「お女中さんお願へで御座いますか。半「ヨイと此手拭を水でお絞ンあすつて下さいまし。女房「貴郎お湯が宜う御座いませう。長「ナニ水で宜しう御座います。へイこれは有難う御座いましたいづれ又先生がお歸りに成た頃参堂ませう。女房「何うも誠にお氣の毒さまで御座います。半「何

う致まして左様から……長「ヤイ今歸つた。長「オ、兄哥如何だ左様へ。奴は大胆野郎だらう。半「ナニ不在留守だ。長「何處へ往つたんだ。半「箱根へ湯治に往つた。伊豆の方へも廻るさうだ。來月の中旬であけりやア歸らんさうだ。長「然うだらう。彼ノ畜生奴座光寺の一件で金子を儲けたから左様かも知れね。此時梶井左膳は座光寺源三郎と一緒に箱根七湯から伊豆へ廻り遊んで來やうと源三郎は小普請入で工面が宜いから殿様に女太夫のおこと親父の喜六梶井左膳其外兩掛を擔ひた奴が二人以上五人で贅澤千万にも湯治に往つて居りますから留守でげす。半「長「ヤイ最う占ひを見るも引もねへや。長「如何しやうてエんだ。半「強盗に這入るんだ。何んでも家の容子は餘ッ程宜いやうだ。幾許有るか知らねへが餘ッ程工面が宜さうだ。留守を爲て居るのは噂アに下女と二人切りだ。他には猫も居あゝ容子縁側の雨戸のヤエンの下りる處へ紙ッ玉を押込んで外から開くやうにして來たか

ら長五郎晩に押込るか 長「ウソ…… 半「ぢやア其積りで一口飲もうと是から酒を飲んで兩人は晝寝を致し日が暮れて丁度四ツ過縁の下には短刀が仕舞て有りますからお互ひに長物を懐へ入れスツカリ仕度を致して出ましたがハヤハヤ雨が降て来た容子も家にある番傘を取出し半次と長五郎二人にて合傘で巢鴨傾城ヶ窪から近邊と云ふので根岸の後の方を廻つて参りました随分淋しい薄氣味の悪い所だが兩人とも盗ッ人だから別に氣味が悪いとも思ひませぬ笹の雪の所から御行の松の處へ出て金杉から龍泉寺助と來ましたが道が遠いから彼是夜の八ツ半過に成りました雨も止みました容子梶井左膳の庭の傍が笹敷に成つて居ますから笹を押分け庭へ這入りました 半「長ヤイ噂アと下女計りだ驚く事アねハヤ 長「ウソ好い天氣に成つたあア 半「然ラヨ是から面体解らんやうに深く頬冠りを致し鏡塚半次は豫て用意の長刀を抜き雨戸の溝へ刀尖を突込み雨戸をグイと

コヤ開けますと素よりやエンが下りずに居ましたからガツ／＼と開きました 女房「初や／＼起てお呉れ縁側で何か音がするやうだから起てお呉れ 半「長や汝は臺所の方へ廻つてゐ無闇に切殺お命は助がて遣れ 長「オツと承知だ…… 長五郎は臺所の方へ廻り半次はがテリと雨戸を開けて上へ昇り障子を開けて見ると蚊帳を釣つて細君が獨りで寐て居ます半次は刀にて蚊帳の釣手を切落しました 女房「アノー初や 半「エ、イ靜かに爲ろいと云ひながら刀尖へ蚊帳を突掛けてズーイとり取り 半「サア惡魔ア聲を立てると斬ちまうぞ靜かにしろい金子せへ取りやア要はねへんだサ金子エ出せ 女房「ハイ世及 半「靜かにしろい金子エ出せ 女房「ハイ只今出します 何卒御免下さいまし……」とブル／＼震へながら巾着に在りました鍵を取出して用簞笥の抽斗から金子を五十兩取出しまして 女房「此通り五十兩是れッ切さやア御座いませぬ何卒堪忍して下さいまし…… 半「馬

鹿ア云ふかヨ是ッばかりで足りるものか、汝の家にはウンと金子の有るのを見込んで来た仕事だ、サもつと出さねへか……と刀の平打で内儀さんの背中をピシヤリ〜打つ 女房「ア、ア…… 半」静かにしろいもつと出せ 女房「ハイ〜、モウ〜、是れ切で御座います……とまた〜、隠箱から五十兩都合百兩出しました 半「ヨシ〜、此金さへ取れば命は助けて遣る」 女房「ハイ〜……」其内台所の傍に蚊帳を釣て深て居ました下女のお初が内儀さんに呼ばれ氣が附いて見ますと何んだか座敷がガヤ〜、爲て居ますから密と蚊帳の中から出まして奥を覗いて見ますと頼冠りを爲た奴が抜刀を引ッ提げて、お内儀さんがブル〜、震へおがら箆筒の抽斗を開けて金子を出して居たから 初「コレは大變だ……と心得ましたから直に裏口へ出まして平素聞いてゐたものと見えて雨戸を開け 初「火事だア〜」と怒鳴つて薪雑木を以てボン〜、金盥を敲きました長五郎は後で此体を看て居ま

した素より斬る氣はあかつたが火事だといふは衆人が出て来ては一大事ですから突然り鞘を拂て一ト太刀浴せた 初「人殺し…… 長喧ましいヤイ……と到々二太刀でお初を斬倒した可哀想に下女のお初は慘酷らしく殺されました長五郎は血刀を提げて奥へ這入て参り 長「兄貴如何した 半「長公汝エ斬殺した 長「だッて火事だ〜」と想鳴りやアがつたから據かゝ斬ちまつた 半「ア、ア、不機事をした内儀さんはブル〜、震へおがらヒヨイと是五郎の顔を見て 女房「オヤ……お前は日外来た雪駄直しの長五郎と云ふ仁だ、半「ヤイ、嗚ア飛んで火に入る夏の虫てへのは此事だ……長「見知て居られちやア助ける譯にやア往かねへナ……カ見ろ、乃公は今日晝間占考を頼みに来た客人だ……(手拭を脱る) 女房「オヤ、お前さんは晝間お入来さすツた……と云ひかけ立上つて 女房「人殺し、半「喧ましいヤイ……と鏡塚半次が内儀さんに一ト太刀浴せる 女房「キヤツと云て倒れる内に

トウ／＼内儀さんを殺しまいました。ッコだから追刺や強盗に出會たら決して顔を見るもんぢやア御座いませんがツイ敵手の顔を見る氣に成りますすけれども其場合に至たら金子さへ還て仕舞へば一命に別條は有りません柳橋は夜分遠方寄席を歩行さますから何程御維新に成つて繁華だど云ても少しは淋しい處が有りますから不届き奴に出會はさいもんでもさいが其時は僅かき物でも還て此方は下を向き眼を眠て俯伏ちまいます 蓋賊「紙幣ウ出せ ○「紙幣も何にも私は落語家で寄席を歩行んで澤山は有りません有丈け懐中から取出して還ると先方も錢せへ取りやア要がさいから其錢を持って往らまいます命までは取りやア爲ません強盗とても然うで金子を出せと云たら詮方がさい金子を出して可及的先方の顔を見さいやうにして居るが宜しい先方も面体を匿したり或は鍋煤で面を眞ッ黒にして這入るのは矢張り一命が惜しいからでオヤお前は何んだ、杯と云へば殺される

に決て居ます今梶井左膳の女房がお前は雪駄直しの長五郎かど云はれ半次も察置かれません自分等の一命が惜しいから兩人を殺しました乃で二人は緩くりお湯を飲んで是から家財を残らず探しましたか着類へは決して手を付けません金子ばかり引ッ浚へたが百三十五兩之を懐中へ入れて 半「サア出掛けやう……と緩くり仕度をして今回は表から出ましたスルと斜對に鍛冶師が有ます二階には若い者が三人も五人も寐て居ます最前お初が火事だア／＼と金切聲で怒鳴た時に 甲「オヤ何處に火事が有るだらう半鐘が鳴ねヘナ……と小便が誑つて居ますから素ッ裸体で下りて参り雨戸をガスリと開けて外へ出で、諸方を見廻はし 甲「火事は何處だ……何んだ火事も何にもねヘヤ眞ッ黒だ未だ夜が明けねへもう一ト寐入り爲やう……と家へ引込らとす途端に長五郎半次の二人が梶井左膳方の表を開けて大業に出て來ました 甲「エ若し火事だど云ふが何處でがす 半「火元は茲だ

……と抜刀の平打で頬邊をビョヤリとやられ、甲「アッ……と飛込ん
 だが當人首を斬られたと思つて土間へ顛覆つて仕舞ひました此物音
 を聞付け若い者が五六人下りて来て見ますと素ッ裸体で細工場に倒
 れて居ます。乙「オヤ金太の野郎だ門を明ッ放して……誰が早く水を
 持て来い……」コソ氣又りしろイ金太…… 甲「ウ、ーン……」 丙「
 如何したんだ 甲「ハァー首がねね……オヤ附てる……」 丁「如何した
 んだ 甲「ハァー怖かつた抜刀で頬邊を歐りやアがつたア、驚いた侍
 が二人来た 乙「然うかど鍛冶職の事も朝早いから此儘起て細工に
 掛りました却説夜が明けると梶井左膳方が一圓に明け放して有ます
 ので怪しく思ひ近所の人が往て見ますと裏口に下女が斬倒されて居
 り奥には内儀さんが慘酷らしく殺されて居り箆笥の抽斗が開けッ廣
 けて裏口の雨戸が外れて居ましたから大騒ぎにありましたが龍泉寺
 町はお町奉行の係りでに御座いません上野の係りでげすからお町と

上野へと両訴へたから恐しく手数の係る處で檢死がお町から下りま
 して段々調べますと梶井左膳は湯治へ往て居ませんから幾許金高を
 取られたか其程は解りません地請人を呼んで調べたが知れません箱
 根から伊豆の方へ廻ると云ふから來月でなければ歸らんと云ふ何し
 る主人の左膳が居なければ解らんと云ふので地請人早飛脚を持ちま
 して箱根へ迎ひに遣りました左膳は女房と下女が殺されたと聞いて
 大に驚きまして江戸表へ歸り我宅へ來て見ますと大變で飯糰に致し
 て有りませぬ段々調べますと金高は百兩已上だけけれども然う申しては
 大變な身分調べに成ると思ひますら三十兩の金子を取られました
 他に紛失のものは御座いません意恨で殺されたやうに思ひますと申
 立せましたさて長五郎に鑊塚半次の二人は宅へ歸り百三十五兩の内
 長五郎に五十兩を遣り半次が八十五兩金子を取り酒を飲んで緩り沈
 着いて居ます所へ嗅アのお柳が立歸り是れが惡事露見の源因に相成

ますと云ふ、チヨイと一服……



第十席

春 鼎 亭 柳 櫻 口 演
酒 井 鼻 造 速 記

却説 鍔塚 半次は金子の牒符分けを致まして脇差は椽の下へ仕舞ひ單物は衣紋竹へ掛まして宅に在る單物と着替へ兩人は寝ましたが昨夜夜明しをしたから正氣あく眼て居ます處へ 柳「今歸たヨ……伯母さん良人は歸りましたかへ 婆「ハチ家に居あはるやうですヨ 柳「有難う御座います……と門口をガラリと開けて這入ると臺處に飲かけた酒や肴が押附けて有り衣紋竹に單物が掛つて居ますのを看ますと霧を吹いたやうに兩人の單物が血塗れに成て居ますから 柳「ア二人は昨夜何處かへ強盜に往きやアがったナ人を斬して來たナ……居間へ來て見ますと二人ながら熱く眠て居ますから密と長五郎と半次の懐中へ手を入れて試ますと腹掛の隠袋に金子が澤山這入て居ます蛇が蛙を呑んだやうに胴巻が膨んで居るは余程有る容子 柳「オイ半さん

半さんオイ、起ねへ。何時まで寐て居るんだ長公。長アイ……
 ……ハ、何うも熱い。ハ、柳起ねへ。半さんか起
 ヌ。半「ア、ア、オ、お柳か何處へ往てたんだ。柳「昨夜は源さんと
 二人で他所へ遊びに往たの。半「何にを……柳「源さんを連れて遊
 びに往たんだ。半「戲談云ふねへ何處の國に篋棒めエ亭主の側で間
 男を觸る奴が有るもんか虚言も方便だ子の前では何んとか虚言を吐
 て置け源太郎と遊んで今歸たとは餘り大業だ。柳「アハ、……宜いぢ
 やアあいか匿したッてお前知てるぢやアあいか乃公だッて命の洗濯
 だ翌が日御處刑に成るかも知れぬへ身分だから容血の好い若い者を
 抱て寐たッて宜いぢやアねへかお前はお前で嗜み事を爲さ……オイ
 長公起きねへナ……長「大姉さんか、ア、ア……柳「二人とも顔を洗
 ひナ。長「大姉はん昨夜は何處へ往たんだへ。柳「情夫と遊んで居たの
 ヌ。長「ハ、然うかい。柳「オイ半さん長公昨夜は何處へ往た何家へ

躍り込んだか知らねへが人を殺して来たナ。半「ナ何にを云やアがる
 馬鹿ア云ふねへ。柳「匿したッて往けるもんか乃公が探偵から二人と
 も直に揚ッちまふんだ見ねへ單物が血だらけに成て居らア何處でお
 前仕事をした懐の胴巻の中には蛇が蛙を呑んだやうに金子が澤山這
 入てる所を見ると最う髒符配けをして仕舞たナ、サ何人にも云ねへか
 ら三ツに分けて乃公に呉んか然うして半さんも間男をして居る噂ア
 を傍へ置いたら何んの事アねへ劔を抱いて寐るやうぢものだろるか
 ら離縁をして呉んか長「短は云はねへから。半「ウソ能く云た痰に離
 縁を爲やうと思て居たんだサ出て往けナオイ……離縁状もへッタン
 レも要もんか媒灼人の有る譯ぢやアあし素々り網打場から引ッ拂ッ
 て来た汝だ。柳「去状は要ねへから手切れを呉んか。半「何にを……
 柳「手切れの金子呉んか。半「へソ巫山戯切て居やアがる間男を爲て
 ヌて女の方から暇ア呉れろと云ふのに手切れの金子出す奴が有るも

不在中大に有難う御座エました…… 婆「オヤ半さんかへアノお内儀
 さんは如何したノお柳さんワ 半「エ、彼ノ畜生は放逐して仕舞エや
 した 婆「オヤ然うかイアノ何んだヨ昨日、正午時分に來てねへ錠が下
 りて居るから妾の家を通さして呉れッて裏傳ひにアノ蒲團だノ夜具
 だノ蚊帳だノ悉皆お柳さんが持て往きましたヨ 半「エ……宅の物を
 持て往きましたとへ 婆「ハアお内儀さんが持て往くのだから右ヤ左
 う云ふ譯にも往かず黙て居ました 半「酷い事を爲やアがる畜生だ磔
 刑奴エ何うしても大きに有難う……此末彼の悪魔が來ても通させね
 へで下せへ彼奴は最う離縁をして仕舞たんだから 婆「左様か子妾ア
 些ども知らあかつた 半「大きに有難う……と半次が家へ這入て見ま
 すと着替の單物から大した夜具蒲團ではあいが寐道具から蚊帳から
 大概持て往て仕舞ひました半次は牆に障てく仕様があいけれども
 何處へ往たか解りません夫れに自分にも悪事が有ますから忍耐をし

て仕舞ひました所へ 男「アイ御免ヨ半さんは在宅かエ 半「へい誰方
 へ 男「チョツと顔を貸してお呉れ……と云ふは御用聞の容子でげす
 から半次もソレと氣は附きました素知らぬ顔附さにて 半「へい何
 んで御座います 男「チョツと來てお呉れ 半「へい……と見廻はすと
 二三人居る容子是に於て半次は 半「ア、失策だ此奴ア拘引れるも
 ……と思ひましたさて半次は懷細で面体の解らんやうに頬冠りをさ
 せて番屋へ來り下調べが有て八町堀の大番屋へ連れて參りました半
 次が昇て見るとお柳はモ一先へ引致れて居ます問男先生の源太郎も
 拘留て居ますさてお組の旦那方が御兩名出張に成りまして御用箱を
 扣へ傍へ硯箱を置いてお着坐に成る御用聞が餞塚半次に女房のお柳
 源太郎の三人を旦那方の前へ引出しました 旦那「半次く面を擡げ
 ろ面ア上げるイ 半「へい…… 旦那「陳宏るナ有体に申せ其方は是れ
 ある柳が申上げるには長五郎と云ふ者と其方の單物が血塗れに相成

て居たど云ふ夫れは五月九日の事で有る、サ何處へ参て其方は悪事を働いたか有体に申せ如何ぢや 半「へい此亞魔が何んど申上げましたか知りませんが他所で喧嘩を致ました夫もゑ單物に血が…… 柳「オイ、半さん、モ一往けかい、ヨお前だつて脊負て立かい程悪事を働いてるからお役人へお手敷をかけかいやうに白状をしてお仕舞ひ夫れに本所荒井町の座光寺源三郎と云ふ千二百石の旗本の奥様に成たのは女太夫のおこよと云ふものだと長五郎が話をしてお居たのを妾は酒を買ひに往きながら戸外で容子を聞いて居たヨ、お前は彼の晩梶井左膳の處へ躍り込んで人殺しを爲たんだらうお役人さまから聞いたんだが下女と女房を殺したのはお前達二人だらう有体に云て仕舞ひねへ千二百石の奥様と偽つて女太夫のおこよが這入て…… 半「靜かにしろイ、コレヤイ汝はまア余計を言を饒舌りやアがる予が御處刑にある是は仕方がねへけれども千二百石の天下の諸侯お旗本の家へ

瑕瑾を附けるとは可憎い畜生だ…… エ、恐れながら半次申上げます、此奴が云ふまでの事ア有ません龍泉寺町の梶井左膳が湯治へ参りました留守を附け込んで強盗に這入たのは小哥と長五郎の二人で奪ひ取ました金高は百三十五兩誠にハヤ恐入りました此亞魔が饒舌れば悪事露見でげすから仕方がねへ悉皆申上げらまいませ座光寺藤十郎さまの若殿源三郎と云ふ方は本所二ツ目小屋頭喜六の娘女太夫おこよと云ふ者を屋敷へ入れました其合中を取持たは梶井左膳で所が天の憎む所か私が参りまして下女と喉アを殺しましたから云はずと知れた御處刑は覺悟でげすが恐れながら此亞魔にも脊負て立かい程の悪事が有ますから一々此婦人の悪事をお役人のお耳へ…… 柳「オイ、半さん、大きにお世話だヨ妾の悪事は妾から申上げるわ…… ハイ、お役人さまへ恐れながら申上げます妾は子殺しが三人有ます湯屋の板の間敷知れず放火が拾ヶ處から有ます妾の方が半さんより悪事は

一階も二階も上で御座います此奴は平の死罪其上長臺へ素ツ首が乗
 る獄門兇狀妾は磔刑の兇狀で御座います高もんで御座います到底御
 年貢を納める身体も有体に申して仕舞ひますが此處に居ます源太
 郎には何にも悪事は御座いません妾のやう者者に思ひ附れたのが此
 子の災難で何卒源坊ばかりは助けて下さいまし……源さんお前は頼
 だ者に思ひ附れて舞いたるう併し妾が御處刑に成たら思でも有るう
 が線香の一本も手向けて呉ん草葉の蔭で悦ぶからと云ひ放ちまし
 たので半次も役人も御用聞もお柳がベラ〜饒舌るので驚きました
 旦那「コレ半次長五郎は未新堀端に居るか 半「はい居ます 旦那「ソレ
 ……と云ふので是から半次を懐繩に致まして面体の解らんやうに頰
 冠りをさせ御用聞が六七人附いて茅場町の大番屋から新堀端の小屋
 へ長五郎を召捕に向ひました其見知人に鋤塚半次が連れられて参り
 ました如何さま源太郎には何にもお咎目は御座いますまいお柳は送

狀が附いて傳馬町の大牢へ送りに成る半次は見知人とあつて新堀端
 へ来るさて長五郎は半次に別れて小屋へ歸りましたが懐中が暖いか
 ら喚アにも手當をして 長「近々に足を洗う心算だ否でも有るうが素
 人に成るからと云ふと其處は情合で泣の泪で別れるのは否だと小屋
 者の娘が云ひましたらうが長五郎は身装は出来て居るし懐中は暖い
 しするから振切て新堀端を出ました彼處より藏前を出まして只今茅
 町へ係て来る此方は半次を懐繩に致し御用聞が附いて参り笠の下か
 らヒョイと見ると長五郎が来たので本来あらば 半「長五郎ヤイと云
 ふ處だけれども悪人同志にも義務が有ると見えてヒョイと腮で通知
 ました長五郎は之を見て吃驚り致しましたから他道へ曲ろうとする角
 に蕎麥店が有ます此間まで現に在りましたが今度市區改正で道幅が廣
 く成ましたから眞中頃に成ましたらう其蕎麥店へ驅込みました
 若者「入らッしやい 長「オ、若エ衆さんチョイと便所を貸して呉んね

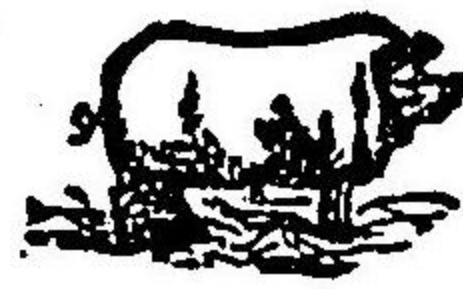
若「ハイ裏に御座います 長「有難う……天麩羅ア拵エといて呉ん
 か 若「ハイ」長五郎はズーイと裏へ這入りまして福井町へ抜ける
 曲ッ角の家の裏口へ参り 長「エ、お内儀さん今日は……」内儀「ハイ
 誰方で御座います 長「旦那は御在宅で御座いますか 内儀「イエ良人
 は出ました 長「オヤ然うで御座いますか久振りです 旦那にお目に懸ろ
 うと存じまして……」と云ひながら雪踏を持まして上へ昇て来るから
 内儀「誰公で御座いますか 長「イエ」孰れまたお話に参りますから
 宜しうと履物を穿て格子をガラリと開け 長「左様から旦那に宜しう
 被仰て……」内儀「オヤまあ思ふ人だ」裏口から履物を持って昇て表へ
 抜けてツちまつて蕎麥店の方では天麩羅を拵へて待て居ましたか何
 時までも出て来ない是れは其苦で疾に何處かへ往ちまいました半次
 は臆で通知で置いて新堀端の小屋へ来ましたが蟬脱の壳で御座いま
 す長五郎は直に是より三味線堀へ出まして毒蛇の口を遁れた心地致

し彼方此方を曲り車坂から千住の焼場へ参りましたト云ふのは矢張
 左官の藤吉と云ふ奴が骨がらみの瘡毒で焼場の臭氣を嗅ぐと瘡毒が
 肌ると聞いて宗恩寺と云ふお寺の外へ番屋見たやうな小屋を構造へ
 是に這入って坊頭に成り屍体を焼く臭氣を臭いだので此頃では病氣
 の方も大きに快いと云ふ話を長五郎が聞いて居ますから此處へ往て
 長「オ、藤公ヤイ 藤「オヤ長五郎さんお珍らしい骨揚げにしちやア
 大分遅い何んだイ 長「イヤ少し和主にお願エが有るんだ肯て呉ん
 ち時にまア如何だエ此頃容体わ 藤「乃公ア最う屍体を焼く臭氣を一
 年の余も嗅で居るから大きに快く成たが不思議もんだ手大抵を薬
 を飲んだって追ッ附ねへけれども屍体を焼く臭氣を嗅ぐのは余程瘡
 毒には能いと見へるさア 長「時に藤公お願エだが乃公を坊頭にして
 呉れねへか 藤「エ……」長「坊頭にして呉れてエのだ 藤「坊頭に……
 夫はまア如何云ふ譯で 長「頭部に毛が有らやア少し都合が不可んだ

から坊頭にして呉れる現金に一両出すから理髮床へ往たつて一両は取りやアしねへお願へだ頭を丸めて呉んか 藤「アハ、面白いな乃公が髭を剃る剃刀も有るからお前の鬚を除てやろう 長「門口をバめて置いて呉れ 藤「宜し……是から磨石へ當剃刀を磨ぎクルくと坊頭に致ました 長「ア、一宜い心持ちに成た…… 藤「大分坊頭ツ振りが宜いヨ 長「藤「や、お願エだが乃公の着て居る絹の羽織に薩摩の單物博多の帯まで残らず遣るからお前の着て居る鼠木綿の單物に法衣を乃公に呉れねへか 藤「ナ何んに爲さるんだエ 長「少し料見があるんだ些と仔細有て江戸にやア居られねへで他國へ往んだが此姿ぢやア逆も高飛は出来ねへんだから交易て呉れな價にしちやア十ヶ一もするもんでねへが…… 藤「成程夫は然うだが此鼠木綿の單物に法衣は予に取りちやア大切だ素ツ取替かエ 長「宜いぢやア、いか藤「宜いたつてヨ予が羽織を貰たつて着ちやア歩行けねへ 長「賣つ

ちめエねへ 藤「賣るのも手数が係るからモ一兩取替賃を呉んねへ長「慾張て居るナ、サ一両出すから…… 藤「チヤア取替へてやろう……ソラヨ 長「薩「廣ノ單物に絹の羽織に博多の帯で澤山ぢやアねへか次手に此煙草入も要ねへ銀鎖だか置いて往かア 藤「ハ、此奴ア有難いかア何處へ往んだエ 長「何處ツて往先は解らねへマ着て見やう……坊主ツ臭へか 藤「到底臭へヨ寝衣にも起依にも是れツ限だから蚤ヤ虱は負けて進らア 長「何んだエ是は禪かナニ帯だど……如何だエ乃公か法衣を着た處は似合ふけへ……序に其綱代の笠ア呉んねへナ藤「笠ア如何するんだ 長「少し量見が有て往く所が有るんだ夫れぢやアお前も随分壯健で 藤「長さん何にも御馳走をしねへで濟みやせん子 長「籠棒めエ焼揚て物が喰るものか壯健で居たらまた逢はうと長五郎は是だけの支度をして綱代の笠を冠り薙刀形の草履を穿いて面体を隠し日が暮れて居ますから直に江戸の地を立去らうとは思ひ

ましたが小梅に只々一人の妹が居ます阿父や阿母には脊負て立寄い程苦勞をかけて有ますから一ト目妹に會て江戸の地を立去らうと思ひ小梅の妹の處へ参ると云ふチヨイと休息を致します



第十一席

春錦亭柳櫻 口演
酒井昇造 速記

エ、前日申上げましたと茅場町の大番屋で鍛塚半次が離縁を致ました悪婆のお柳夫れにお柳の間男大工の源太郎を呼上げて漸々ね調べに成ますとお柳がツイ座光寺の一條を旦那方の面前で饒舌ましたから是より御探索又相成ました所全く身分違ひ小屋者喜六の娘こよを屋敷へ入れました不届に因ておこよも親父喜六も召捕られ入牢と相成り座光寺の屋敷へは宅番が付き源三郎殿は揚屋入と相成ました此方は長五郎を探索の爲め鍛塚半次に頼冠りを致させ御用聞が七八人附いて丁度今茅町まで参ると長五郎に出會ひましたから半次が臆で通知せましたソコは悪黨伴侶の義務で長五郎は吃驚致し蕎麥店の裏口から逃出し毒蛇の口を通れたる心持で千住の焼場又朋友が瘡毒をかいて焼場の臭氣を嗅ぐと梅毒が脱ると云ふのを聞いて宗恩寺

(焼場)の門前へ小屋見たやうなものを構造へ夫へ這入り麥飯に澤庵の
 香物で養生專一に致し髪を下して坊頭に成て居ます所へ長五郎が参
 りまして自分の着物と藤吉が着て居た單物から法衣杯と交換へ姿を
 變へて圓頂となり立去た所まで申上げて御座います是より長五郎の
 本所小梅の我姉の許へ尋ねて來ましたのは今江戸の地を立去ればモ
 一再び親同前の姉と會へるか會へないか其程も解らん親父や母親の
 死で仕舞つたし責めて姉に一ト眼會ひ而して江戸の地を立去らうと
 云ふ其心の同じ悪事を働いても何處かチヨツとお面白い所が有ます
 さて日が暮ましてから小梅へ参りました此姉の亭主と云ふの小池龍
 雲と云ふ外科醫者でげすが如何も下手だと思へて誠心流行ません夫
 れに手慰みを致し酒を飲ひ女郎を買たり杯致ますので如何しても家
 業が繁昌致せんが長五郎の爲めは何にせエ自分の姉婿で御座い
 ますから門口へイミチヨイと家内の容子を見ると何か義理有る兄貴

龍雲と姉とグズ云ひ合て居ますから迂濶り内へ這入れません密
 と覗いて見ますと 龍「サ、僅か半年か一年だ往つて呉れ亭主が苦し
 んで居るのを女房が余所眼に見るてエ法の有めエ予だッて都合が宜
 さやア汝に好い身装をさせて鰻を食せ劇場見物にも連れてツた事も
 有だろが知てる通り此頃の家業が閑暇で博奕に取られ詮方がな
 いから汝に予が頼むんだ肯て呉れ 女房「夫れだつてお前夫りやア無
 理ぢやアないか妾の四十近く成て如何して勤め奉公に往かれるもの
 かア子、耻入た譯ぢやアないかお前も衆人に先生とか小池龍雲さんと
 か云えられるお醫者ぢやアないか 龍「醫者だつて何だつてヨ食ちまつ
 て手も足も出ぬエ度々會ひにむ往かれる十里か十二里隔た八王子だ
 汝が八王子へ往つて少し稼いで呉れば汝の身体で三十兩あり五十
 兩なり出来るんだ少し思な奴でも忍耐して汝が其奴の首ツ玉へ抱付
 き何かチヨツと殺し文句でも云へばナニ半年や一年如何でもなるぢ

やアねエか、往て呉れ、往れねエか 女房「だつてね前情けさいぢやアないか此年に成て、若ければ夫りやア夫の爲めだから身を粉に碎いても如何でもするけれど、妾ア實に其様を眞以をするのが思だ若い時分から浮氣を去た事ハあし、縁有てお前さんの所へ嫁に来て斯う遣つて居るんですから夫ばかりは堪忍して下さいまし……龍「ム、ウ、ぢやア汝予の云ふ言を肯給へのか 女房「肯ないたつて肯たつてお前外に何か雇に出るとか何んとか云ふならば出もするけれど此年に成て知りもしない所へ往さお客の機嫌氣稜を……龍「篋棒めエ雇に出れば僅か一分ト二百夫斗りの金子ハ入ら給エ、茲に三十兩と五十兩の金子がなければ此處に居られ給エから亭主が女房に頼むんだ、夫とも他に情夫でも有るか、惚れてる亭主なら身を粉に碎いて動けるだろう 女房「お前さん其様な不實意をまア 龍「エイ喧ましいやイ……と突然足蹴にする 女房「アレお前其様な邪慳なを……と

云ふ内に女房の九番を掴んで引摺り引廻す 女房「アレまア其様な無理な事を……と云ふ折から門口をガラリと開けて 長「アイ御免なせニと云ひながら上へ昇り 長「まアく兄貴、姉さんくまアくね前が能くないと兩人の中へ割て入りました 姉「オヤ長五郎お出かエ 龍「長か、長「や兄さん誠ににお久し振りで…… 龍「何んだまア、妙な姿で乞食坊主が這入て来たと思つた、姉「長五郎やお前まア如何したんだ此姿ね 長「姉さん是よと種々譯のある事だ此様を、身装で這入て来たから、兄さん姉さん、定めてお驚きなさるだらうがこりやアまア急にやア云へ給エから跡で緩り咄をするが今小哥か當家へ這入らうと思ひ二人の喧嘩を聞て居やしたのが成程兄貴の云ふ處も尤だ、姉さんお前が不可い、亭主を助けるんだから身を粉に碎ても事をしなければなら給エ、姉「夫だつて長五郎此年令で 長「イヤ其處だお前が若ければ何も云へ給エで、亭主を助けおはるんだらう、が何しろ

小哥の姉で最う是四十に手が届いて居るから三十兩と云つても三十兩は買人も有りやアしない、殊に一年か半年往くから僅々五兩か七兩だが、兄貴も博奕に負けて困るだろう小哥もお前の知て居る通り博奕が嗜むで女郎を買ひ酒を飲うので親父に勘當され遂に小屋へ落たんだ、随分苦勞艱難をして居る、兄貴も醫者どい云ひ條苦勞人だ、何しろ兄さん金子さへ有れば宜う御座エやせう 龍 然うヨ金子さへあれば惘然うに女房を其様お處へ質に遣る譯のさいが眞に手も足も出ぬへからだ、長イや兄さん小哥だつて澤山も出来ぬへが兄貴に五十兩上げやせう、其代り何卒親同前の姉ご今后八王子とやらへ遣らないやうにしてお呉んなせへまし、其代りに乙五十兩と云ふ金子をお前の手へ渡すから、小哥も此様な姿をして来たの乙江戸に居られぬエから何んでも江戸の地を立去る料簡サ、若し召捕れりやア知ての通り素ッ首の糸へんだ、殊に寄ると再び姉さんお前に會ふ事も出

来まい此江戸へ歸る事も出来ぬへから途中で松原の肥しにゐるか夫とも召捕れお上の手に這入て命を無なすか知れぬへが是が最う姉さんお前の顔の見納め弟長五郎の顔の見納めと思つてお呉んなせエ子兄さん只タ一人の姉で御座エやすから何卒可愛がつて遣てお呉んなせエ、其代り今夜五十兩の金子を渡して江戸の地を立去りますから龍 然うか、ア、其奴ア氣の毒千萬ナ予も影ながら和主の悪い事をするのにも聞て居るし、予もお前と同じやうに博奕を賭んで、すつかり取れ苦し紛れに噂アを捕へ此様お無理を云つたが五十兩の金子が有りやア何處へも往ないで小池龍雲で居られるから夫ぢやア長五郎然うして呉んナ 姉 長五郎や夫ぢやア切望良人の困らんやうにしてお呉れ 長エ、宜うがす 龍 時に其金子は何處に預けて有んだ 長イや何處にも預けて有りやアしない、實ア小哥が種々悪事を働か手許に置ば其金子も博奕に取られるか召捕られりやア不正金で没収ちま

うから向島の長命寺の堤を曲りに掛る處の其下の松の木の間へ穴ア掘て澤山でも糸へが三百兩埋て有やす、今江戸の地を立去るに小哥が其金子を持って往か糸へと天下の寶を土中へ埋めて仕舞にやアなら糸へ、其三百兩の内苦しいと云ひさるから兄貴に五十兩姉さんに五十兩都合百兩置き小哥の二百兩持て江戸をタカブケに遠離る積りだ 龍「然うか、三百兩……姉さん……長五郎やあまへ夫れと眞實かエ 長「何んで同胞に嘘を吐くものかアね、此姿お成て江戸の地を立去るんだから堀ッ返して其金を持ち何國へ成とも往うと云んだ、サ兄さん一緒に往て下せいまし、ア姉公に五十兩、お前さんに五十兩都合百兩渡すから何卒姉に五十兩遣てお呉んさせエ、お前さん百兩悉皆取上げちまつてハ、不可いヨ 龍「馬鹿ア云ふな何んで其様な太エ事をするものか、予ッ位世の中に正直ものハ糸エ、長「アハハハ、餘り正直ぢやアなからう、何しろ堀ものを持て往かなくつちやアならぬエ、

内に出刃が有るかエ 龍「ア、有る肴屋が忘れて往つた大きなのが有る夫に耳こじりを差て居るから宜からう 長「成程夫れで堀れる、出刃で少し堀て跡の手で泥を搦い出せば僅か三尺か四尺斗り堀て金子を勘金の切へ包み瓶へ納れ埋て置たが稍う金子も世エ出る時節だ、金子でエやつハ何時までも土中に這入ると唸り出すと云ふが丁度三百兩世に出る時節ぢやア兄さん一緒に往う 姉「夫ぢやア長や良人を助けてお呉れ 龍「サ往かう 長「サ往さやせうと是より小梅から長命寺までゆく雜作の御座いません、夜分ハ淋しい向島、夏でハ有し川風に吹れ咄を爲さから三圃の花表を右に見て左りの方ハ隅田の流れ、西方ハ待乳山聖天の頂河沿の料理屋船宿の二階に燈火の點た處ハ一際景色が宜しい 龍「長や何處だ 長「エ、此處でげすと長命寺を曲て 長「此松の木の下サ 龍「如何も豪氣だなア三百兩埋て置くかんで 長「だからお前も博奔に勝さすつた時にハ少しア斯う云ふ搦梅

に用意をして置きなせエ緩急と云ふ時に金子が有りやア重寶、おければ此位不自由のさいから首の締エのに劣るの金子だ 龍「然うヨ此ン度乃公も眼が醒た乃公の爲めに、大切な女房汝にやア姉だ彼を女郎に賣るのも不便だと思つたが無エ袖の振れぬエから據さく彼様な無理な事を云つたがお前聞て無理な奴だと思つたらうが、マ長や堪忍して呉んナ 長「ナニ兄貴勿体紛エ謝罪れちやア困る、眞身の親のやうに思てるんぶから切望まア姉のお芳を可愛がッてやつてお呉んなさいまし、サ茲で御座います 龍「此處……成程こりやア知れ給へや通行路だナ 長「斯う云ふ所へ埋て置さくちやア不可エんで、此松の脇なんでげす 龍「然うか 長「掘るがら兄貴手を貸して下せエ、と懷中より手拭へくるんだ出刃を取り出し長五郎がヒヨイ／＼掘て居ます 龍「長ヤ些と手傳うか 長「兄貴耳こじりで掘てお呉んさせエ、龍「ウン宜し……と二人で掘ましたから別に骨も折ません雖て二尺四五

寸三尺斗り堀り長五郎の穴の中へ這入り泥を搦出しさから 長「兄貴前後へ氣を注てお呉んさせエ、人に見られると大變だから 龍「ナニ人ツ子一人通りやアしねへが、時々火が見へるナ 長「彼奴ア狐火だ、龍「然うか、モ一餘ッ程掘れたナア 長「モ一些と掘なくツちやア不可エんだ、兄貴御苦勞ながらお前さん些と代て掘てお呉んさせいな 龍「じやア予が掘てやろう、長「肌をお脱なせエ 龍「裸体に成て單物の傍へ斯うやつて置き禪一筋が宜い 長「其方が威勢が好いや、土塊が眼へ這入ると不可エから氣をお附なせエ 龍「アイヨ 長「坊主頭で不可へから頬つ冠をしなせエ、龍「ウン、と龍雲は越中禪一筋で素ッ裸体に成り單物は此方へ置き頬冠をして穴へ這入て土塊を搦出し尙耳こじりで堀り身体の這入れる丈掘ました、頓て三尺餘も泥を搦出して 龍「長ヤ未だ瓶へ手が當ら給へナ 長「然うかい、小哥が深く掘て置たと見へる……併し此様に深かア給へ答だ 龍「薄やアし給へか

長「イヤ、違やアしねへ、龍雲は穴を掘ながら乳より下の穴の中へ這入て俯向て居ます。長「兄貴、龍「エ、と上を向く處を出刃を振上げて龍雲の眼と鼻の間をウーロンと殴る。龍「人殺しい。長「嘘ましいやいと出刃を持って上からズブリ突た。龍「アッ……と俯向た處より顔を突き悶掻き廻て這上ろうとする所を胸の邊を突きましたから弱る奴を穴ン中へ押込み出刃で逐々龍雲を滅茶々にしちまいました。幸ひ穴へ入れて有ますから長五郎の死んだと思ひましてグイと押込んだが如何あも未だ穴が浅いので首が這入りません、周囲へ土塊が挿出して有るから之を龍雲の死體の上へ滅茶々々お堆積て余程堆く成ました。長「尿坊主め、親同前の姉お無理お言を云やアがッて、背イ事をする、サ斯うやつて置きやア姉の安泰だ、ドレ往らる……此方のお芳ガ、芳「大方早晚に夫が長五郎を連れて五十兩の金子を持って歸て来るだろう、然うしたら、妾も八王子とやらへ往て可思な真似をし

ないでも宜し、噫長五郎の感心を心掛ぶが如何して彼のアに成たろう、姿を變へ出家の打扮で法衣を着て來たが、ア、困たものだ……」と弟の事を案じて居ますと門をがらりと開け、長「姉さん、芳「オヤ長五郎お歸りかへ彼の宅の良人は如何したエ。長「早晚お歸りやせう、酒が有るかエ姉さん。芳「ア、良人が飲だのが少し有るヨ、長「何にも食物はなからうと思て蕎麥店へ錢を拂て蕎麥と酒を二本ばかり誂へて來たから早晚に持て來やすだろう。芳「夫は宜いが、良人エ如何したエ。長「マ宜いや久振りだ是が一生の訣別だ今夜の一口口飲やせう、姉さん今夜泊るヨ然うして明日の朝早く小哥の出掛るから。芳「だッて長やお前妾の宅に蚊帳がないから毎晩蚊燻をしてお寝るんだが……長「ナニト晩位蚊帳が無へたッて大切な姉さんと並枕で寐るなア久振りだモウ是が生涯姉さんと寝納めだ、姉さんマ一口口飲つて小哥に盞をお呉んなさいまし。芳「思だ子、如何したんだ

ヨ、ア来たヨ蕎麥屋さん御苦勞 男「へエお待遠うさま……長「錢はやつて有るヨ 男「へエ戴いてごわす 長「お酒も来たナ、サ姉さん一口飲やせう、と是から同胞で蕎麥屋のお酒にお蕎麥に香物で久振にて阿父や母親の昔話を致し 芳「往時神田の白壁町に左衛長右衛門で阿氣さんが隆盛の時分おア、やつて花會參會仲直に入費を出して衆人に左衛長右衛門さんと謂れて流行たが如何して同胞は此様に運が悪いだろう、お前の身分違ひの小屋へ墮るし妾のア、云う邪慳を亭主を持と云ふ妾は別に親不孝も爲さぬが因縁が悪いのか、如何して此様に成たろう子、長「アハ、姉さん是の仕方が悪い、浮世は如何あるものか愚痴を云たつて進附ねエ、何ある姉さん自今身体を大切にしてくれ呉んなさい、小哥ア當分と云ひてへが、モウ生涯江戸の地の踏れぬからお前の顔も見られぬエ、サ少しだが姉さん茲に金子が拾兩有る、悉皆で置いて往てへが小哥も是から旅の空で他國へ出

れば錢金が頼依何か旨エ仕事があくツちやア金子の手に這入ら給へ小哥の懐にも二拾兩ばかり有るが之を小遣おしてお呉んなせエ拾兩置いて往くから…… 芳「長ヤ誠に有難う、早晩に良人が五十兩……長「ナニ兄貴の歸ちやア來ぬエ 芳「エ、歸て來おいてエのハ 長「イヤなアに歸らぬへ、お前の是から人仕事でもしあすツたが何にかして何卒ア困らないやうにお前一人で生計てお呉んなさい然うして時々阿父さんや阿母さんの寺参りをしてお呉れ小哥もモシ是がお前の顔の見納めだから切望姉さん逆さまながら長五郎と俗名を認て阿父や母親の位牌と一緒に線香の一本も献てお呉んなせエまし 芳「思だよ、ね前如何したんだ、良人が歸らぬの如何云ふ理由なんだヨ 長「姉さんお前が聞いたら必定小哥を恨むだらうけれど彼坊主が居ちやアお前の生涯樂が出来ぬへ拾兩の金子を置いてツても二日か三日で消費ちまうの知れて居る、悪い者の處へお前の娘に來たん

(旗本五人男)

だ、夫ゆへ彼坊主の小哥が向島でコレをして息の音を止めて土塊を掛て殺しちまつたヨ 芳「エー……とお芳の吃驚する 長「イヤ姉さん吃驚しなとるだろうけれど彼奴が居た日にやアお前の五十近く成て殊に寄れば淫賣にでも出さければならんやうな事に成行くと確認が附たから殺ちまつたんだ 芳「夫の本統に然うだよ、妾を捕まへて宿場女郎になれノヤレ斯う云ふ旦那を取れノと云ふから誠に不實意な仁だ噫思だと思ひながら縁有て一旦夫婦に成たこと、断念て今まで暮して来たが、何にしる長ヤ大變な事をおしだ子 長「マ姉さん堪忍してお呉れ、必定憎からうが此事が露見をすれば小哥の御處刑だ、マ姉さん諦めてね呉んささい 芳「然うかい、……併し悪い人との云ひながら永年連添て居た亭主を殺されたと聞きやア餘り妾だつて好い心持でないヨ 長「夫の姉御情合だ、道理だ……お芳の立て佛壇へ御燈明と線香を供へ、我亭主を殺したのの現在の弟で亭主

(旗本五人男)

も悪い人と思ひながら餘り好い心持でない、是から同胞でお酒を飲み蕎麥を喫べ(此晩の七月の上旬)一寐入眠と如何にも夜が短かいから忽ち夜明けと成ました姉は先さへ起き 芳「長ヤお前寐てお在妾は是から御飯を炊て芽出度ね前の首途を祝て進るから 長「イヤ、其様に手間を取ちやア居られねへ、姉さん小哥ア戶外へ出て井飯を喰ても宜いから直に出掛るヨ 芳「然うかエ、お前是から何方へ往く心算だよ 長「何處へ往くつて目途をし、行當り釜と共に草枕てエ奴で、足の向いた方へ往くから其先の分らぬへ、マ御免なせエ……と支度をして麻の法衣を引ッ掛けながら 長「モ一是が姉の顔の見納めか……左様あら、と門口へ手を掛ける途端誰やら門の戸をガラリと開け 男「御用 長「エ、と長五郎もお芳も吃驚する 小僧「へエ、酒屋で御座います、お酒は宜しう御座いますか 長「エ、酒屋の御用かア、一驚いた、身に觸りが有ますら酒屋の御用と云ふ聲を聞いて

も悚然とする、さて長五郎の姉に訣別て江戸の地を立去ると云ふ子
ヨイと一ト息……



第十二席

春錦亭柳櫻口演
酒井昇造速記

エ、長五郎は姉に訣別を告て江戸の地を立去り五街道の内
道が一番宜ろしと身延山へ参詣を致し早船で東海道岩淵へ下り夫よ
り此姿で高野へ参詣をして彼地此地を遍歴うと云ふ料簡、到底江戸
には居られません身の上だのら、丁度江戸から六里隔た府中へ来ま
したのには彼是モ一正午少し過に成て腹も空たし府中の棒端へ這入ま
すと蕎麥、餛飩として有る紙片がビラ／＼下て居る家は反面を見暗
して涼しそうでげすから此家へ這入り長五郎が腰をかける、と爺さ
んが帳場に居て婆さんに小女を一人使て居ます 長「オイ、爺さん冷
で宜から上等酒を一合呉んか 爺「ハイ 長「蕎麥ア出来るかエ 爺「ハ
イ 長「ぢやアあんだ、冷てエ水を打かけて生鶏卵を一個呉んか、有
るだらうか 爺「ハイ御座います、長五郎は草鞋を脱り胡座を掻て往

來の見へあいやうに反圖の方を向て肌を脱ぎ賤しい筋ぼりの刺墨を
 顯わして竹藪麥へ冷エ水をかけさせ生玉子を二三個貫ひ酒を取寄せ
 冷水へ突込んで酒を冷たくしちやア飲んで居ます 長「御飯ア有るだ
 らうナ、下女「ハイ御座います 長「何うか有るか肴ア 下女「鮎にスチ
 で御座います 長「然うか、ちやア鯛にスチで宜いや、香物を持って來
 て呉んナ 下女「ハイ……長五郎はお酒を飲み御飯を喫ちまい、お酒
 の五合も飲んだと見へて宜心持に酔ひました 長「姉さん少し茲へ横
 にありてエが勘定わ幾らだエ 下女「ハイ、長「若干だ、知らねへが此
 金を持ってツて拂て呉んか 下女「ハイ、有難う御座います、長五郎は
 金子を出して拂を濟ませ 長「チヨイと枕を一個貸して呉んねナ、
 素敵に酔たんで步行けねへ 下女「ハイ、と枕を持って來るを取て長五
 郎は椽臺の上へ横にあり宜い心持そうに高敷で眠ちまいます内に、
 最う彼是暮方に成ました 下女「ね客さんエ……お客さんエ、若しお

客さん……長「ウソ、く、アア…… 下女「最う日が暮ますヨ、貴
 僧先刻からお起し申ても能く休みおすつて在しやいます、日が暮
 ますと蚊が出ますから 長「オ、然うか大層に能く寐た、オ、く、大
 層蚊に喰れたア、好心得だ、オイ姉さん今帳場に居おすつた爺さん
 は親方かへ 下女「ハイ旦那で御座います 長「然うか、チヨツとお目
 に懸りたいと然う云て呉んねエ 下女「ハイ、貴僧は誰方で 長「マア
 能から亭主に會やア分るんだチヨイと坊主がお目に掛りたいと然う
 云て呉んねエ 下女「ハイく……旦那さまへ 爺「何んだ 下女「アノ
 お酒をお上んおさつて今まで能く寐てお在おすつたお客さまが旦那
 にチヨイとお目に懸りたいと被仰います 爺「ウン彼何か勘定はお拂
 ひおすつたか 下女「ハイ御勘定は戴きました 爺「おやア貸して呉れ
 てエんでも有めエ何んだらふ……兎に角お目に懸ろう此方へお連れ
 申すが宜い 下女「ハイ、サア御出家さん旦那がね目に掛ると被仰い

ますから此方へ 長「ア、然うか、じやアまア何だ其方へ往う 下女
サ此方へ入らつしやいまし、旦那さまへ御出家さまが入らしやいま
した 爺「サ此方へ、今日は有難う御座いました……エ、何御用で

長「オイ爺さん久し振りだねエ 爺「ハイ……お見外れ申ました、が
誰方さまで 長「へ、へ、而かも去年の五月廿八日の晩だ 爺「ハイ……

：「去年の五月廿八日、ス……ナ何でげす 長「上野の山下でお前が蕎
麥を賣て居たろう 爺「へい、ド如何して貴僧夫を御存ぞで 長「忘れ

もしねエ五月廿八日の晩博奕に全敗れお前の處へ蕎麥ア喰ひに往た
其時に腹が空て而かも蕎麥ア三杯喰て錢か三文もねエから貸して呉

れると云たらお前が貸す事ア出来ねエ此夜の短いのに、蚊に喰れて商
ひをして居る者が無残喰れてたまるもんかど譴責を喰した其時に乃

公が日本は神國だ如何かあると云たらお前大層怒たろう 爺「左やう
長「團扇を貸して呉んかと云たら乃公の身装が悪いもんだから

今に山同心か岡引が来りやアチヨツと来いと云れる悪い事は云わね

エから其處に寐て居かいで早く家へ往けと云たろう其時犬に吠られ

て娘が一人逃げ込んで来て千住迄連れてツて呉れ蕎麥ア惣仕舞にし

て遣ると云たのでお前が其娘を宅へ連れて往き婆さんと二人で其娘

を蕎麥切庖丁で薬研下しお首を切りまい百兩の金子を取た其内乃公

か五十兩取たさア 爺「ハイ、サ左様で御座いましたツけ 長「乃公が

持てツた五十兩の金子は首尾好博奕に取られツちまい江戸にも満足
ぢやア居られねへから坊主に成て江戸の地を立去らうと云ふので六

里隔ツた此府中へ来て珍らしいお前に會て見りやア此通り立派ナ立

場茶屋を出して居るのは大方彼金子で出したんだろふ、サ如何だ知

らねへとは云やアしめへの 爺「ハイ、ハイ 長「お前は都合がよし

乃公は五十兩の金子も三文もねエんだ、乃公は是から何處へ往くか

分らねエ身の上だがお前は先づ斯う遣て巢立の出来るやうに成てる

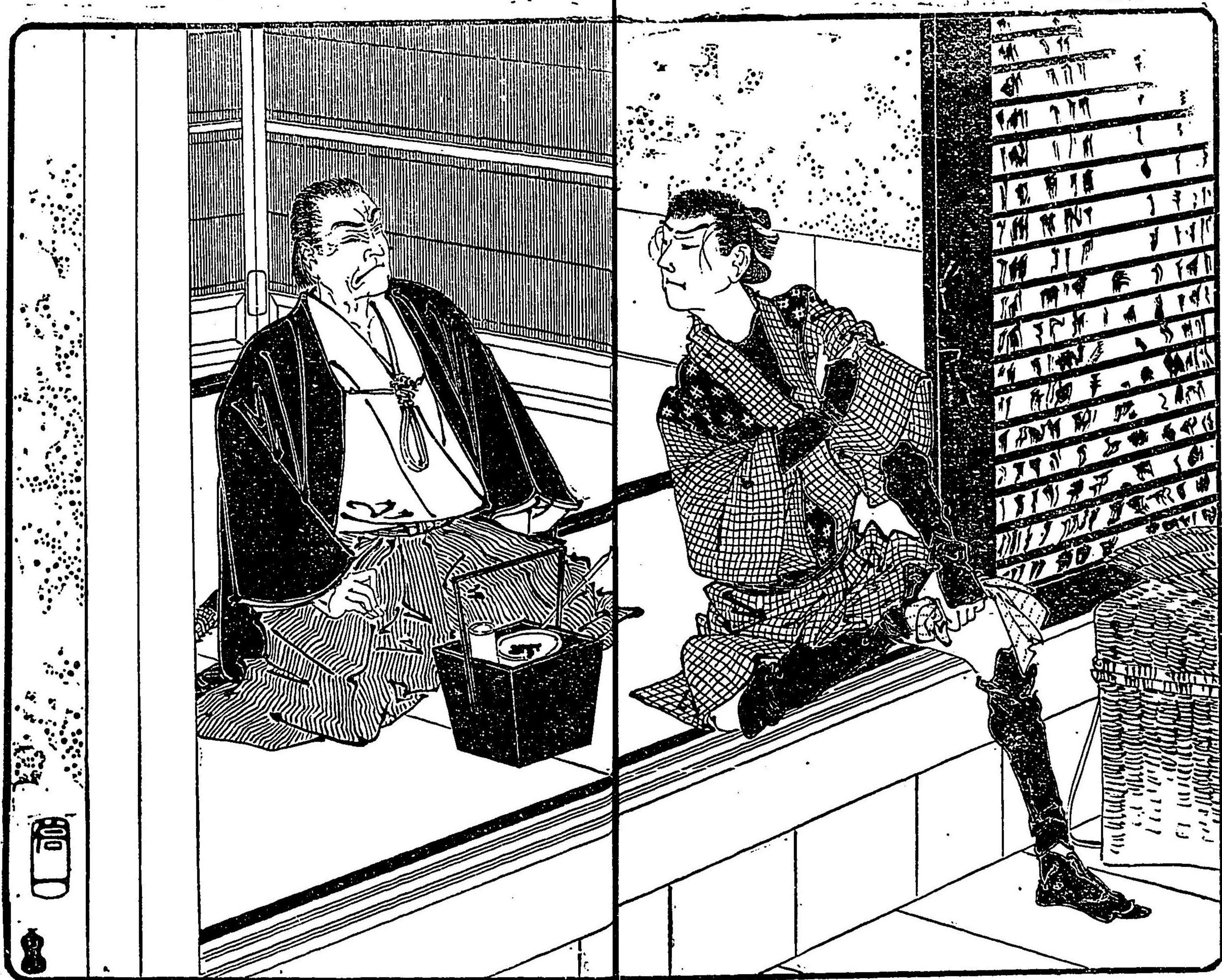
底から悪い長五郎でも有ません自分は何一る五拾兩遣て居て爺と婆に側へ來られて事由を云われ泣れて見ると正可に殘金を遣せとも云へないから長五郎は十五兩の金子を握て 長爺さんや、婆さん苦し紛れに斯うはしたものと悪く思て呉れるナ、アハ随分達者で暮しおさぬ又會へる事も有たら會う、と十五兩の金子を持って長五郎は府中の宿を立去りました、是から長五郎は何地へ参りましたか是は後のお話し、却説毎年五月廿八日は兩國の川開きで従前は川開きと云ふと人で橋か埋りました (淋しい所も幾らも有ますが兩國橋計りは花火の庇蔭で大層人が集ります) 夫也へ蜀山の狂哥に

見渡せを淡雪花火橋の下價千万兩國の景

成程兩國の景は大した物で委敷申上ませんでも皆さん御存ぞの通り

でがす 男「チヨイとおちよさん ちよアイ 男」ぞやア不動さまへね

参りをして歸らう花火は先刻仕舞ちまつた、最う彼是四ッ過たるふ



女「未だそんなおにありやアしまいヨ 男「今夜は宅へ歸るかエ 女「妾

ア歸りやアしまいヨ、宅へ歸らさいでも宜いやうにして來たが何家

か泊る處はさいか子 男「おやア乃公と一緒に往きナ 女「何處だエ

男「同朋町の叔母さんの宅ヨ 女「藝者屋かエ 男「ウソ、雛妓の三人も

居て抱へが二人斗り居る 女「アハ妾のやうナ不粹ナものが往ては：

： 男「ナニ乃公の叔母さんは其様か人おやアねエヨ、乃公を子のや

うに思つて可愛がつて呉れるからマ一緒に往て見ねエ餘ッ程粹な叔

母さんだヨ 女「夫りやア藝者屋をして居る位だから粹だろふ、何か

お土産を……矢張りお菓子折でも…… 男「其様ナ物を買つて往たつ

て詰らねエ、夫より是て鰻でもお上りあさいと云て金子の貳分も出

した方が悦ぶ殊に寄れば叔母さんの方で損が立位だから 女「然うか

エ、おやア連れてツてお呉れナ、併し体裁が悪いねい 男「ナニ今夜

は川開きで内の抱へは皆ナ出て仕舞ひ藝者が足りあくつて清元の師

匠や常盤津の師匠が藝者の代りに呼ばれるのが今夜は江戸中で兩國へ
 落る金子が何の位たか知れぬエ乃公も今夜お客が有たんだがお前と
 遊びに来たから座敷へ往かさいのだ 女「然うかエ、宏やア一緒に往
 うと是から二人で同朋町へ参り湯屋の裏へ這入り 男「御免ささいま
 し」内儀「誰だエ 男「エ、伊之助でげす 内儀「オヤ伊之助かエ 伊「ハイ
 内儀「今夜はれ客かエ 伊「イエお客宏やアおわせん、皆ナ出ましたね
 エ 内儀「ア、今夜宅に居る藝者は一人だつて有りやアしさいヤ平生
 何様に賣れさいでも今夜は賣切だおまへ獨りかエ 伊「イエ同伴が有
 ます」内儀「何んだエ同伴は 伊「へエ婦人でげす 内儀「女も宜いと思
 ち者を連れて來なさんか、戸外エ立して置かいて此方へお入れ 伊「
 へイ、サおちよさん此方へお這入ンかさい 女「御免下さいまし 内儀「
 マお昇りかさい、サ伊之さん此方へお昇げ申しさ 伊「おちよさんか
 昇り ちよ「御免下さいまし 内儀「サ此方へお出ささいまし ちよ「誠

に遅く上りまして…… 内儀「ナアにお前今夜はまだ宵だアね、是か
 ら皆が歸つて來るまで起て居なければならいんで、伊之や狭い家
 だから二階へお連れ申さ、伊之や何處の女中だエ 伊「へエ是は白銀
 町に居ます清元の師匠で延千代と申す者で 内儀「ア、然うかエ藝人
 が、夫宏やア宜いけれども亭主持は止さエ 伊「へ……亭主は有り
 やアしません 叔母「然んから宜いが泊るのかエ 伊「へエ何卒お留な
 すつて 叔母「泊つて往きナ藝人ならば何でもさい責も咎も來やアし
 さいから、何かエ旦那でも有のかエ 伊「イエ母親と二人で居るので
 叔母「然うかエ、和女さん何かエ清元のお師匠さんで 千代「如何致さ
 して師匠と申すのは嗚呼ケ間しう御座います、毎度伊之さんのお世
 話に成ります…… 叔母「此伊之助は妾の甥宏やア有ます清元の三
 味線彈で清元伊之助と云て居ますが和女さんは清元の御師匠さんか
 エ、下はあんだから二階へお昇りかさい、小供の所から贈したお肴

も有から早晩に妾も昇て一緒に飲むから、伊之や物干へ薄縁を敷て
 一ト口飲むやうに二階へ仕度をしな、蚊屋も有から酔たら勝手に寐
 ち 伊「有難う御座います 千代「おやアお内儀さん御免ささいまし
 叔母「サア〜遠慮を爲さいでお昇り、然んち窮屈さ婆じやないヨ
 伊「サアおちぐさん此方へお出……如何だエ酔か人だろふ ちよ本
 統に酔か叔母さんです子、如何しやう此お金子を出し兼たが 伊「ヤ
 宜いや何だ煙草盆の中へでも入れて置が宜い、却て改めて遣ると体
 裁が悪いと云ひながら伊之助は下へ下りる内に女中が酒の燗を付て
 持て来る叔母さんも二階へ昇つて共に酒を飲みましたか遊人同志だ
 から種々蕪の話しを爲たり何かして 叔母「お千代さんお前はまア始
 終白銀町に居る積りかエ 千代「妾は妹ですから本来亭主を持つか如
 何かしおければ成ませんけれ共妾の兄が入牢に成て居ますから然ら
 云ふ譯にも往かず誠に困つて居ます 伊「小哥も聞て居るかお前の兄

は長年牢へ這入てるのかエ 千代「アア九一年入牢に成て居るのです
 叔母「夫りやア大變だ、ノッ伊之助ヤお前も獨身で何年が何年までも
 居られる譯もなし此師匠を女房に持てお前は三味線を弾から劇場エ
 出たら跡へお弟子が来ても稽古が出来て稼業に成から恰ど似合の夫
 婦だから然うおれば妾も安心するがお前も此娘さんと斯う云ふ事情
 にあつてるから母親を引取て夫婦にお成りお然うすれを妾も安心だ
 が、子お千代さんどやら 千代「ハイ有難う御座います兄が牢から
 出て来ません内は妾の身の振り方が付さいので 伊「お千代さんおま
 への兄てエのは如何云ふ譯で牢へ這入たんだ、何を爲たんだ 千代「
 伊之さんまア聞てお呉んさい、本統に子叔母さん迂濶り物は拾へ
 さいもので妾の兄さんは淺草阿部川町の粉屋へ奉公して居まして柳
 の稻荷の傍で奥の原とかいふ所の蕎麥屋へ朝蕎麥粉を持って往くと誰
 も居さいで好い櫛が落ちて居たので拾つたのが災難で、と云ふは其夜

蕎麥賣が娘を殺しお金子を百兩とか奪たと云ふので何しろ兄さんが
 櫛を拾つた事が露顯して娘を殺した本人が知れるまで入牢と云ふの
 で未だに牢へ這入て居ますから阿母さんが且暮心配するのみで妾に
 も如何する事も出来ません夫もへ叔母さん妾は何家へも娘に往く事
 も出来なければ亭主を持譯にも参りません誠に困ります、種々神信
 をして居ますが今に兄の牢から出て来ませんので、伊「ム、夫れ何か
 エお千代さん何日の事だエ、千代「去年の五月廿八日の事で、伊「ウ、
 何處で櫛を拾つたんだへ、千代「妾は知らさいけれども山下の夜蕎麥
 賣の家だそうで、伊「待ねへヨ、コウと去年の五月廿八日には私がお
 客に連れられ船で兩國の花火を見るより高臺で見ろ方が宜いでエので
 天神の松葉へ連れて往かれ其歸りに山下で俺が夜鷹蕎麥を喰て居る
 と頻りに犬が吠て娘が足袋踏で黄八丈の小風呂敷を小脇に抱ひ込み
 縮緬の單物を着た十六七の娘が驅込んで来て千住の掃部宿まで往く

者だが駕籠を誂へてお呉れと云ふ床几の上に一人寐て居る奴が有て
 蕎麥屋か何か愚痴を云て居たが何しろ淋しい處を娘さん一人で遣る
 のは險香だのら蕎麥が餘えて居るから惣仕舞をしてお遣んさい然
 して蕎麥屋さん此娘さんを掃部宿まで送くてお遣りと云て俺が代を
 拂て歸つて来たのが去年の五月廿八日の晩だヌと今年の五月四日
 五日は甲冑街道府中宿の六所さまのお祭で毎年俺が府中へ呼れるか
 ら今年も其五月四日五日のれ祭禮に付て田中屋の万五郎さんと云ふ
 親分の所へ往く積りで府中の宿盡頭へ掛ると腹が空て来たからヒヨ
 イと傍を見ると頼だ涼しそう立揚茶屋が有だから中に這入て蕎麥
 を喰ながら見ると此家の亭主は山下の夜蕎麥賣だから爺さんお前
 中へ見世を出しおさつたかど云ふと貴郎と誰方と聞から忘れやアし
 りへ去年の五月廿八日の晩山下でお前の處の蕎麥を喰たお彼時の娘
 は如何したへと聞たら爺眞青にありやアかつたが彼爺に聞たら解ら